文部省検定済教科書

われわれの國語 二

私たちの國語研究会 編

教育學部資料室

13 秀英 高國 1102

高KC Sh992

60369
教科書文庫
6
810
46-1949
01304
49681

中央図書館

広島大学図書
0130449681

寄贈

昭和二十四年十月十日 高等学校國語科用
文部省檢定済

教科書文庫
6
810
46-1949
0130449681

われわれの國語

二

広島大学図書
0130449681

廣島大學
教育學部圖書

目次

一　談話生活の問題……一
二　対　話……十三
〔一〕きゅうりのいぼ……十四
〔二〕ものを食う細胞……二十
〔三〕イソポの機知……二十七
三　手紙と随筆……三十三
〔一〕パリだより……三十四
〔二〕山上の牧場……四十二
〔三〕をりにつけつゝ……四十八
四　味読・朗読……五十三
〔一〕もず……五十四
〔二〕詩三編……六十三
〔三〕美の発見と創造……七十

五 研　究……七十九
〔一〕事彙辞書の話……八十
〔二〕切符の切らないかた……八十七
〔三〕もみぢの錦……九十五
六 劇……百二
〔一〕つばめ……百三
〔二〕霜夜だぬき……百十一
〔三〕羽　衣……百三十三
七 講　演……百四十二
〔一〕ことばの調子……百四十三
〔二〕幸　福……百五十二

一 談話生活の問題

西尾　実

國語学習の目標が、主としてわれ〳〵の言語生活の向上にあることは、今あらためて述べるまでもない。高等学校、第二年めの國語学習にはいるに先だって、今までの学習を反省し、この國語学習の目標を達するためのいっそう有効な学習の方途を考えてみることは、きわめて意義のあることである。われ〳〵の言語生活は日々に向上しつゝあるであろうか。日々に向上するような適切な方法がとられているであろうか。

言語生活を向上させるために、われ〳〵は自己の言語活動の実際について、よく反省しなければならない。相手、または他人のそれを注意深く観察して、自己の言語活動の参考にしなければならない。そして、自己の欠点は、直ちに改めて、正しい言語活動を実践して行こうとする意志と勇氣とを持たなければならない。これらの点に遺憾はないであろうか。

もちろん、こういう反省・観察・実践は、実は、だれでも、意識的にではないにしても、日常の言語生活のうちに、行っているわけであるが、その反省が不徹底に終りやすく、その観察が皮相にとゞまって、より有効な言語活動の実践にあまり役立っていない場合が多い。われ〳〵は、言語生活の根本問題にさかのぼって、意識的、積極的に自己の言語生活の向上に努めるべきである。

われ〳〵の國語学習は、このような日常の言語生活に結びつけて考えなければならない。

なお、人は自分のことはなか／＼氣がつかないが、他人のことになると、容易に微細な点まで氣のつくものである。そこで学校生活では、一般に相互批判、共同学習の長所を十分生かすべきであるが、言語生活向上のための國語学習において、特にそうである。

この巻頭に載せた一文は、言語生活の中軸ともいうべき談話生活について反省し、その向上のための基礎的問題を論じたものであるが、ひとり談話の上ばかりでなく、廣く言語生活全般についての反省に役立つ点が多いであろう。

われ／＼の談話というものは、きわめて複雑な構造を持っている。まず、その談話の主体になるわれと、その聞き手または聽衆であるなんじとの対立を場とし、あるいは、われの意志をなんじに通じ、あるいは、われの感情をなんじに訴え、あるいは、われの知識をなんじに傳えようとする意欲によって形成せられる社会意識の活動であって、耳に聞く音声的表出・表現を中軸とし、それに、目に訴える身体的表出・表現——表情・身ぶり・動作など——が、不可分離に結合した傳達行爲である。

したがって、談話生活の実態を握るためには、まず、刻々の自己の傳達行爲のあるがまゝをあるがまゝに内省し、それを、あるべき行爲として形成して行こうとする眞摯な実践的立場に立たなくてはならぬ。たとえば、ある談話において、自己の意志を相手に通じようとして話したけれども、自分が熱心になればなるほど、相手は、いわゆるあいづちを打つだけで、身を入れた受け答えをしなくなったとすると、それは、すでに、ほんとうの傳達行爲ではなくなったわけである。そのよってきた原因は、その場合場合によって一様ではないに違いないが、多くは、自己の意志を早く相手に通じよう、

自己の感情を早く相手に訴えよう、自己の知識を早く相手に傳えようと知らず知らずあせっている結果、その話し方が衝動的な、自己本位な、相手の心持から離れた單なるおしゃべりになり、相手にわかるように意を盡くした表現行爲などではなくなっているのが、その一般である。

そういう狀態に陥った時、それを立てなおして、相手によく通じるような表現行爲に改めて行くには、どうしたらよいか。

こゝに、まともな内省と、適切有力な実践への卽座の轉換が要請せられてくる。そうして、その要請にこたえる最も直接的な方法は、身体的な立てなおしであるといってよい。というのは、われ／＼の話が、あせりぎみになっている時、それと氣づいてなおそうと思っても、心に思うだけではなかなかなおすことができない。衝動の波にのって、とめどなく押し流されて行くだけである。そういう時のからだの内の狀態を顧みると、呼吸がせわしくなり、血行が早くなっている。更に注意してみると、姿勢がくずれている。その上、手で頭をなでたり、そこにありあわせた物を無意味にもてあそんだり、握ったりしている。つまり、身体的に統制を失っているのである。そういう場合、その統制をとり返し、しっかりと相手に意志が通じるようにするには、また、感情を訴えるには、知識を傳えるには、まず、その身体を整え、自分のものにすることが第一である。いわゆる、しっかりと腰をすえなくてはならぬ。それとともに、呼吸を整えて行くと、血行も平靜になり、心も落ち着いてきて、話のあせりも自然に消えてしまう。

が、その場に臨んで、これだけの身体的統制ができるためには、平生において、よほど姿勢を整え、呼吸を整える訓練ができていなくてはならない。

言語生活が音声を中軸的媒介とした表現行爲である以上、発声・発音が重要な契機を成すものであることはいうまでもない。ところが、われ〳〵の言語生活では、発声と同じく発音に対する注意もきわめて淺く、少し誇張した言い方をすれば、原始的発音狀態をいくらも脱しえていないありさまである。標準語音の設定もなければ、談話のための発音訓練も行われてはいない。しかも、他の文化民族の言語音とまともな比較もしないで、ひとりよがりにこういうわれ〳〵の音声を清雅だときめこんでしまったり、レコードに吹きこんだ自分の談話を聞くことによって、自ら言語における発音その他の不完全さを客観的に反省し、矯正するというような科学的方法もとらないでいて、言い換えると、自分の言語音を反省しようともしないで、ひそかにうぬぼれてさえいるというのが、一般的現狀ではないかと思われる。音樂において発声・発音の練習はしても、それは音樂という専門文化だけのことで、それが日常における言語生活の基礎的訓練でもあるというようには考えていない。そういう意味には行っていない。したがって、自己の発音を反省し、他の言語音のいかんを識別し、批判する能力が発達していない。自己の言語音の反省とともに、発音の訓練によって、言語生活を指導する実践的立場の確立をはかることは、欠くことのできない用意であると思う。

言語生活における発声・発音と直接の関連に置かれているのは、表情・身ぶり・動作のような身体的な表出や表現である。身体的な発声器官や発音器官の緊張は、全心身の作用を背景として行われる作用であるから、同じ緊張が、発声・発音器官のほかにもなんらかの変化を生じ、あるいは目つきや顔つきに、あるいは身ぶりや態度に現われるのは、きわめて自然なことである。したがって、日常におけるわれ〳〵の談話生活は、耳に聞く音声のほかに、目に見る身体的表出や表現をも合わせて省察しなくては、その眞相をとらえ、それを完全なものにするための生きた問題は把握せられるものではない。しかし、私がこゝで言おうとしている身体的表出・表現は、わざとする表情や誇張した身ぶり・動作などをさすものではない。そういう偶然的なものではなく、音声言語に伴なって必然的、不可抗的に現われてくるそれ〳〵である。

次に問題にせられなくてはならぬのは、われ〳〵の言語生活を規定している倫理性である。

自分ではそれと氣づかずに、自分の個人的な感情狀態が、それとなんら関係のない話の相手との談話の調子にまで影響を及ぼし、何もこだわる必要も理由もない点にこだわり、ちっとも興奮する問題でもないのに声を励まして主張するというような傾向は、だれの上にも絶無であるとはなか〳〵いえない。――もちろん、まれには、どういう立場に立っても、いつも朗らかな調子で、あくまで聞き手の氣分をいたわり、聞き手の理解しやすいように言う意図で話す話し手もあるが――。これは、いうまでもなく、言語生活における倫理性の問題として取りあげられ、訓練せられなくてはならぬ問題であると思われる。

それで思い出されるのは、いつであったか、井の頭線の澁谷駅ホームに、乗車の目じるしができた当時のことである。ある日の夕方、私は三、四人めの列に立った。すると私の次に來た学生が、私のうしろに並ばないで、私よりも前へ行って、列の横に立っている。なんだか默って過ごしてはよくないような氣になった。それが学生である。どこの学生にしても、教師である私にも責任があるというような氣持も手傳って、とう〳〵、「きみ、乗るなら列にはいりたまえ。」と言ってしまった。

するとその学生は「こゝは二列乗車です。」と言う。そういえば、しるしの幅が二列ぶんとってある。「なるほど、これは失礼。」とわびるほかはなかった。当時、一般には、一列乗車の励行が始まり、列をつくるといえば一列だと思いこんでいた私のとらわれのために、その学生に言われるまで、しるしの幅が廣くできていることが目にはいらなかったのである。廣さは目にはいっても、廣さの意味が理解せられなかったのである。これも、論理の問題であるよりは、倫理の問題である。他人の立場を客観的に認識し理解しようとするよりも、いきなり自己の主観的な判断をもって非難し否定しようとする傾向が強いのである。こういう独断を自ら克服し、客観的な理解にいで、普遍的な認識に立つためには、平生よほど自己否定に媒介された主体の発展が遂げられていなくてはならぬであろう。そこに、言語生活を正しく営むための、倫理的訓練の要が提示せられている。

ひとが話をしていると、いきなり、「しかし」ということばで横やりを入れ、自分で話しはじめるが、その言うところを聞いていると、ちっとも、「しかし」などではなく、全く、同じ趣意の枝葉のことを、たゞ、自分の話として始めるにすぎない話しぶりがある。そのくせ、最後には、「……ではないですか。」などと、話の出にした、「しかし」と同じような調子で、いかにも自分独自の意見らしく結ぶ。ところが、その話のなかみはといえば、相手が話しはじめていた趣意と全然といっていいほど同じなのであるから、相手はなんと答えてよいやら、まごつかざるを得ない。これは、われわれの談話における論理の問題である。肯定か否定か、賛成か反対かの別さえ判明しない聞き手の頭のわろさとして受けとられるであろう。しかし、なぜそれだけの聞きわけさえつかないかというと、それは、決して頭のわろさなどではない。ひとの話を最後まで聞くことができないという、更にいえば、何か自分の経験に触れ、自分の思想に関連したことになってくると、それを自分で話さないではいられないという心理から、たゞその話を奪う必要から、「しかし」という逆説の接続詞をさしはさむにすぎないのである。したがって、それからの話が、聞いていたところと逆であるか順であるかなどは問題ではない。たゞ、聞いていることができなくなって、自分が話し手になりさえすればよいという、身勝手にすぎない。よその國では、たとえ、反対意見を述べる場合でも、まず「イエス」と受けとっておいて、「が、こうも考えられはしませんか。」というように、相手をいたわり、おのれを立てないようにして、反対意見をも述べるという。これは、一應、論理の問題であるけれども、更にいえば、倫理に発する論理の問題であるとしなくてはならぬであろう。

ある朝、私はいつもとは違った方向の電車に乗ろうと思って、ある社線の一駅の窓口に並んだ。私の前に並んでいる五十かっこうの婦人が、「こゝではほかの線の駅へ行く切符を賣ってくれますか。」とききいている。窓口にいた従業員が、「どこの 駅ですか。」とき返すと、「何駅です。」と言う。うしろに立って聞いていると、この婦人の切符の求め方は、いかにも合理的であるらしくて合理的でない。他線連絡の切符を賣るか賣らないかという一般原則からききはじめるとなると、次には、おそらく、どの線かが問題になるだろう。それを確かめた上で駅名を言うことになると、なか〳〵時間がかゝる。窓口の従業員がそういう論理を飛躍させて、いきなり、「どこの駅ですか。」ときいたから遅滞なく運んだものの、もしも、まともに問答していたら、容易にらちはあかなかったであろう。こういう窓口などでは、一般原則や前提條件などを問題にしないで、だれの旅行目的をも達しうるよう

に準備されているもの、係は、それに必要な知識は持ちあわせているものという立てまえで、まず、所要切符を請求するのが適当と思われる。もし、それで、らちがあかなかったら、その時はじめて、係の知識や一般原則などがとりあげられるべきではないだろうか。この婦人に限らず、そういう現実認識がないと、わけても、その場所の慣習がわかっていないと、合理的、能率的な談話生活は成り立たない。こゝにも、談話における論理の基礎が問題にせられなくてはならぬものを覚える。

ある中学校に勤めていた時、生徒が何事かについて教師にしかられて、その教師のもとへ陳謝に來た時、「先生、おわびに來ました。」と言って來たのを、隣にいて耳にしたことがあった。「おわびに來ました。」は陳謝そのものではない。陳謝に來たという報告にすぎない。だから、やす〳〵と口にできるのである。陳謝を陳謝としてまともに表明することは、思いきって決心しないと、できないことである。しかし、その言いにくさを押しきって言うところに陳謝の実があるのである。

これに類したことは、われ〳〵の日常の談話生活にいくらもある。何か仕事をひとに頼む場合、相手に向かって、「頼む。」とか、「お願いします。」とか言うかわりに、「こうしてもらうか。」とひとりごとの形で言う。あるいは、母親が、幼児のことをひとに頼みたい場合など、「おばちゃんにこうしていたゞきなさい。」というように、幼児に言うような形で、実はそばにいる第三者に、依頼したり、言いつけたりする。これも一つの表現法で、相手が長者である場合には、敬意を含めた謙遜な言い方になり、相手が同輩以下である場合には、その自由意志を重んじた言いつけ方になることもないではない。しかし、それは、あくまで特殊な頼み方である。それが、その限度を越え、頭を下げるかわりの言い方になると、その人の卑屈を表わすか、ごまかしを感じさせるにすぎなくなる。これも談話生活における論理の問題であり、更に、それを基礎づけている心理や性格の問題として、やがては倫理の問題にもかゝわってくる。

昔から、たいせつなことばとして、「イエス」と「ノー」がとりあげられ、それをはっきり言うことが、談話生活の急所とせられたのは、談話生活における論理の正確とともに、主体的眞実の重要さを示したものであると思う。同じ理由をもって、「ありがとう。」と言うべき時に「ありがとう。」と言い、「ください。」と言うべき時に「ください。」と言い、「すみません。」と言うべき時に「すみません。」と言うというように、われ〳〵の日常において、まともなもの言いをするということは、そんなにやさしいことでもなければ、また、それが言えるか言えないかということは、そんなに軽い問題でもない。これがはっきり言える人々の間には、つまらないいざこざは少ないであろう。数人で話しあっている場合、または、会議の席などで、同時にふたりが発言した場合、ひとりが「どうぞ。」と言って発言を讓り、他のひとりが「ごめんなさい。」と言ってから、その発言を続けるというような風景が、最近急に多くなってきたのは、うれしい当然な作法に違いないが、こういう当然な作法が形成されるには、人間性の根本要求に発し、また、その相剋を経た結果としての知恵によるものであることが理解せられる。

もう少し、話のなかみについての問題に立ち入ると、われ〳〵は、うっかりすると、新聞で読んだことなどを、自分で見たことか、したことでもあるような話し方に陥ってしまう。「けさの新聞によると、」とか、「ある人から聞いた話ですが、」とか前おきして話し出せば確かな話にもなり、ゆかしくも聞えるのに、故意ではないにしても、それを略したり、怠ったりして、「・・・ということです。」とか、

「……だそうです。」と結ぶべきところを、「……です。」という直説法にすると、眞実ではなくなってしまう。そういう場合の話は、かりに、はっきりした引用の形がとれないまでも、自分の経験や意見の形にしないで、世上の話がらとして、「……ということですね。」とでもいうふうに客観的に位置づけることができるはずである。そういう事実関係をいいかげんにした話というものは、話し手の虚栄心として感じられたり、ごまかしとして受けとられたりするものであることを知らなくてはならぬ。われわれの日常における談話生活が、こういうあいまいの中にあるために、仮定として言った話が確定的に言ったものとして問題にせられ、推定として話したことが断定として傳えられて、誤解・誤傳を生み、われわれの社会生活の混雑を招く有力な原因を形づくる。

また、親しい友人どうしどとしての学生社会にあって、知らず知らずにできた談話生活の習慣を、新しくはいった職業社会における談話に持ちこんで、まともに言うべきところを、才氣にまかせて、皮肉を言ったり、しゃれを言ったりしても、それが皮肉やしゃれにはならないで、かえって、相手の心理を傷つけたり、一座の空氣を混濁させたりすることがある。皮肉やしゃれというような特殊な話し方になると、その場におけるその人の立場が、皮肉を皮肉として成り立たせ、しゃれをしゃれとして通用させることの可能な立場に立っていなくてはその意義を成しえないものであり、逆効果をさえ招くものである。たとえ、皮肉やしゃれでなくても、聞いた話には、一々感想や意見を加えて反應を示すということも、度が過ぎると煩わしくなり、無意義な饒舌（じょう）にすぎなくなる。「なるほど。」と言って深く聞き入り、「ふうん。」とうなずくような聞き方が、もっとあってもいいように思う。

家族や親しい友人どうしが円卓を囲んで談話する場合など、ともすればひとりで話の中心にならないと氣のすまない者があり、話す機会を独占してはゞからない者がある。これなども、われわれ日本人の社会性の乏しさを表わすものといわねばならない。談話生活としては、すべての人が心を傾けて話のなかまになり、一つの話を終りまで聞くことを心がけ、しかも、自己をむなしくして聞き、更にその話し手の心をいたわって聞くという態度を養わなくてはならぬと思う。したがって、その話し手も、話す機会を独占しないように、適当にまとめ、適当なところで他に譲るという客観的態度を失ってはならぬ。自他の対立と協同とが適切有効に行われるための節度を見いだし、これを守って行くことが、賢明な生活であり、人間生活向上の推進力になるであろう。

われわれの談話生活の基底である社会には、欧米人が幾世紀にわたって、その宗教によって養われてきた倫理性と、近代科学によってつちかわれてきた論理性に比敵すべき基礎がない。

われわれは、われわれの談話生活において、社会的効果や効率を問題にする前に、まず、倫理的な眞実さや論理的な明確さを問題にしなくてはならぬ段階にある。この眞実性・眞理性の確立を忘れて、直ちに社会的効果や効率に走ることは危険である。しかし、談話生活そのものが、本來われわれの社会性を基調とした生の営みである以上、すべての問題を社会的関連の中に見いだし、社会的事実として、その発達が意図せられなくてはならぬことはいうまでもない。

（雑誌「國語学」）

研　究

一　言語生活には、話したり聞いたりする方面のほかにどういう方面があるか。

二　談話の構造を、話し手と聞き手、談話の内容と目的、談話の言語手段と身体的補助手段など

に分けて、談話におけるそれ〴〵の役割を互に関係させて考えてみよう。

三 談話の「身体的な立てなおし」とはどういうことか。

四 筆者は、「発声」と「発音」とをどういうふうに区別しているか。こゝには省いた場所で、「発声の基礎的訓練としての呼吸法」などの言い方をしてあるのを参考にして考えてみよう。

五 「身体的な表出や表現」とはどういうことか。それ〴〵の中の一つ〳〵について、談話との関係を具体的に詳しく考えてみよう。

六 談話生活における倫理の問題、言語の「倫理的な眞実さ」とはどういうことか。

七 談話生活における論理的な問題、「言語の論理的な明確さ」とはどういうことか。

八 「現実認識」とか「その場所の慣習がわかっていること」とかはどういうことか。

九 「イエス」と「ノー」とをはっきり言うことが談話生活の急所とされるのはどうしてか。

十 「合理的、能率的な談話生活」とはどういうととか、具体的に考えてみよう。

十一 「社会的な効果や効率」とはどういうことか、具体的に考えてみよう。

十二 筆者は、談話生活の実態を、幾つかの自己の見聞に即して、身体的問題・倫理的問題・論理的問題・社会的問題としてとらえている。それぞれの問題について、筆者の論旨、その実例を表にして示してみよう。

十三 筆者が一番重く見ている問題は、どの問題か。

十四 われ〳〵の言語生活を反省して、みんなで話しあってみよう。また、それを記録して、学級の申し合わせとして、言語生活の向上に努めよう。

二 対話

対話とは、いうまでもなく、人と互に話しあうことである。講演のように、一方的に話すのではなく、自分の言うことに対して、相手が答え、その答を聞いて、また自分の考えを述べる場合である。もちろん、聞き手がひとりと限ったことではなく、数人が同席して、かわるがわる話しあったり論じあったりする場合も含まれる。

対話といっても、その場面、相手に應じて、問答・会話・討議と、いろ〳〵の形式をとる。その内容も交歓を主とするもの、計画を立てるためのもの、疑問を解決し研究を目的とするものなど、いろ〳〵ある。

われ〳〵は、その時その時の必要に應じて、話す態度、話すことば、声の調子の細かいところまで、よく注意をして、その目的を達するために有効な方法をとるようにしなければならない。

どんな場合にも、自分の述べようとすることをはっきりさせる、相手の言うところを正しく理解しようとすることが第一に必要で、思いつきや口から出まかせなもの言いは慎むべきである。

また、話し手としては、相手の聞き取り方に注意して、その理解を確かめながら、ものを言うようにしなければいけない。聞き手としては、わからない時には、わからないとい

うことをはっきりさせることが、相手に対して親切であり、正しい態度である。

たとえば、何か疑問を持って人に聞こうとする場合には、自分の疑問の意味をよく考えて、どういう点が疑問なのか、わかっているところとわからないところの境はどこかなどをめいりょうにすることがたいせつである。人から疑問を出された時は、やはり、その疑問の意味を確かめ、答えられる問題かどうかをよく考えてから答える。疑問の性質上、どうしても答えることのできない場合には、その答えられない理由を示してやるだけの親切さがほしい。こういった親切や深い用意があってはじめて、話しあいがスムースに行き、その目的を達することができるのである。

いうまでもなく、話の内容には、事実の裏づけがたいせつである。ことばのあやや、抽象的な論理の追究にのみ熱中するのは、およそ意味のないことだと知るべきである。

なお、話を進めて行く場合に、ことがらが、たゞ、わかるとかわからせるとかだけでなく、愉快に話が進められることが望ましく、そのためにユーモアや機知をまじえることも忘れてはならない。

こゝには、疑問の意味と疑問の説明のしかたに関する科学的随筆、問答形式による科学的解説、機知に富んだ寓話を載せて、対話の参考にした。

〔一〕きゅうりのいぼ

服部静夫

放送局の人から、その人の担当している投書整理の苦心談を聞いたことがある。こんなのがありますとさし出された一束のはがきを見て行くと、なか〳〵おもしろい。中に、「きゅうりのいぼ〳〵は、どうしてあるのですか。」というのが、八歳の男の子から來ている。鉛筆で大きなかたかなで書いてあって、まぎれもなく、一年生のまじめな質問である。実にかわいい質問であり、たくまないユーモアもたっぷりある。さてこういう質問に会ったとして、答える側の者はどう答えたらいいだろうか。考えてみると、投げかけられた質問の持っている外面的な氣安さにもかゝわらず、その事象の持つ深みは意外なほど大きいのである。大げさにいうと自然科学の限界とか、自然科学と哲学との関係とかいう問題にも触れてくることがらともいえるであろう。またそれだけに、そんな起りうべき波紋を露ほども予想しない、また説明されてもわからないような質問者に、どうしたら納得のゆくように答えることができるであろうかと思うと、多少とも自然科学に足を踏みこんだ者として、少なくとも晏如たることはできない。

きゅうりの実が花の中の雌しべの後身であるからには、実についているいぼが雌しべの子房にそなわっている突起の後身であるだけの話であって、自然科学者、少なくとも植物学者は、きわめてあたりまえのことと考えている。だから、このいぼがなぜ存在しているかと尋ねられると、虚をつかれてろうばいするか当惑するのである。しかし、この種の疑問が自然科学だけで十分に説明し盡くされるのかどうかも、はっきりしないのであるから、自然科学者のろうばいはゆえもないことで、ふだんからの不安や弱点をかゝえていた弱みから出たことかもしれぬ。少なくとも、自然科学で答えるべき問題であるかどうか、しっかりと検討しておかなかった罪がありそうだ。だからきゅうりのいぼなどは瑣事にすぎぬとはいえないのである。多くの人のいだく疑問に、これに類したものが数多くあり、時々

学者を困らすのである。

悪いことには、こと生き物に関しては、自分自身が生き物であるためか、動物や植物のことや自分たちのからだに関することとなると、ついちょろい説明をする人が從來少なくなかったのは困ったことである。つまり生き物のからだや行動については、なんとか説明をつけないと質問者が満足しないのに調子を合わせすぎたのではないであろうか。極端な場合になると、荒唐無稽といってよいような解答を與えてすましていた例もある。こんなように、説明を與えないと承知しないような質問者があることが、実は問題であるし、両者の間のこのみぞをそのまゝにしてあったことも問題である。

しかし、こうはいっても、私なども、またおそらくだれもがそうであるかもしれないように、子供の時には、きゅうりのいぼに類した現象に、限りもない疑問を深めたものである。それはおとなの疑問と違って樂しいものである。この樂しい疑問を踏みにじりたくはないが、しかし、この子供がそのまま自然科学的な教養に触れることもなく成人して行く可能性のあることを考えると、夢は夢として、やはり自然科学的な考え方を徹底させておく必要がありそうに思える。おとなにもこの種の疑問を通じて見られる自然科学的なものの考え方の欠陥が強くないことはない。

きゅうりのいぼは、おし廣めて行くと、意外に大きな波紋を描きそうである。生き物の学問に関係している私たちからいうと、きゅうりのいぼ的疑問は、どういうわけか、生き物界に特に多く投げかけられるように思われる。そのうちの最高峰にしてもよいようなのは、「人間はなぜこのような形をしているか。」というのである。人間のかわりに馬にしても櫻にしても同じような質問ができる。こんな質問は、もう少しで、人間はなぜ存在しているのかという質問に変わることもできようのに、人間は

なぜ存在しているかという疑問が自然科学者に投げかけられた話はあまり聞かないようである。これで見ると、普通にはこの二つの疑問は本質的に違うもののように思われているのであろうか。

ところが一方では、「なぜ水や空氣が存在しているのか。」とか、「なぜ水は零度で氷になるようになっているのか。」というような疑問もあまり聞いたことがない。なぜ電氣があり、光があるかとも尋ねられない。それだのに、生き物界のこととなると、これと同じような意味の疑問は俄然ふえてくる。物理学者や化学者はこの種の疑問におびやかされる心配がないから氣がらくであるが、生き物界を研究する学者は、始終こういった質問を受ける機会が多い。柳に風と受け流せるうちはいいが、佛の顔も三度とやらとて、しまいには腹立たしくなることもないとはいえない。昔の学者がしかるべくまにあわせの解答をして切りぬけたことにも同情されなくはないが、その報いが來たか、私たちが、生き物界の事象について、何事にでもそれ解決をつけろとばかりつめよられるのでは、恐縮するばかりなのである。

こんなわけで、生き物界のことについては「なぜ」という語のうちに、二種類の氣持を区別しなければならない。その一つは、完全に因果関係を明らかにする方針で進めば答えられるはずであるが、他の一つについては、そうはいかないので困るのである。人間のからだをはじめ、植物や動物については、このような、現象とその價値感との結びつきが、実に固陋に等しいまでも、人の頭にこびりついているのである。だから、「花の色が虫を呼ぶためにあのようにさま〴〵になっているのはわかっているが、何があるので、あのような色が出るのですか。」というような質問が出てくるようになる。私たちとしては、花の色が虫を呼ぶためであるかどうかはわからない。ひょっとしたら、そういうこ

とがあるかもしれない。何はともあれ、花の色が何物であるか、どういう順序を踏んできているのかということを研究しようという態度で進んでいる。つまり逆なのである。

生き物界についての意見がこのようにくい違っているのである。花の色が虫を呼ぶためだとわかっている人が、空氣は人間に吸われるために存在しているのだと喝破するなら首尾一貫しておもしろいともいえるのだが、まさかそんなことはあるまい。都合のよい一定の目的に従って事象が存在すると考えたのでは、癌などはどうしたって説明できなくなる。まさか、その人を殺すために癌ができたのだなどとはいえないであろう。これだけがあげられる例ではないが、つまるところ、合目的を原理とした説明はむやみに應用できないし、またやたらに應用しない方が安全でもあるのである。生き物の世界では、人間の目から、人間の経驗を通してものを考えやすいのは、私たちも氣をつけなければならないようだ。

しかし、また考えてみると、子供のきゅうりのいぼ的質問には、なんとかしてうまく説明してやりたいものだと思う。私たちとしては、そういう質問の要求しない解答や、要求するより以下の解答を與えるのを避けて、子供の氣持をも滿たし、また私たちも滿足できるような答を出さなければならない。私たちの普通にする解答は、自分で考えてみても、あまりに科学的でありすぎるかもしれない。科学的であるというよりは、あまりに、わかりきったことだけを述べすぎるきらいがあるのかもしれない。

帰するところ、子供の質問には、疑問の要領がわからないために起されている昏迷があると思われる。これをたゞ答えられる質問と答えられない質問とに分けてしまって答えるだけでは、やはり困ると思う。そうすることは、まだ海のものとも山のものともわからない子供の頭を、一方的に堅いものにしてしまうおそれがあるわけである。つまり、生き物については合目的な考え方を適用しようという傾向がだれにでもあるのだから、これが必ずしも理由のあるものではないことを、どうしてもわからせる必要がありはしないか。疑問を持つことは、科学教育上絶対に必要なのであるから、疑問の持ち方について注意を喚起しなければならない。今まで何がなんでも疑問を持つことがたいせつだというような指導が行われ、疑問の種類についての指導はどちらかというと不足だったのである。もっとも、その疑問が解決されるか解決されないかは、疑問を持つ当人には、理解するよしもないのであるが、適当な指導によって、おのずから、それとこれとは弁別できるようになりはしないであろうか。少なくとも、中学校の二、三年以上にでもなれば、自然科学的に解決できないものとの区別はある程度できるようになるのではないだろうか。それにはどうしても、疑問を持つことと、その疑問の持ち方について各人が発明するようにならなければいけないと思うし、また教育の立場にある者も、卵をかえす者の愼重さと愛情を持つのでなければだめだと思う。

（マッの瘤）

研究

一　われ〳〵が、ごくあたりまえのことと考えていることでも、なぜそういうことがあるのかということを、深く考えるとわからなくなることが多い。いろ〳〵の例を考えてみよう。

二　次のような質問の出し方についても、考えてみよう。

イ　人間はなぜこのような形をしているのか。

ロ　なぜ水や空氣が存在しているのか。

ハ なぜ水は零度で氷になるのか。

三 自然科学で答えるべき問題と、そうでない問題との区別は何か。

四 「生き物界のことについては、『なぜ』という語のうちに、二種類の氣持を区別しなければならない。」と、筆者は言っている。それ〴〵の例を考えてみよう。

五 都合のよい一定の目的に従って事象が存在すると考えることはいいか。

六 「私たちの普通にする解答は、自分で考えてみても、あまりに科学的でありすぎるかもしれない。」という場合の「科学的」ということは、どういう事実をさして言っているのか。

七 「疑問を持つことは、科学教育上絶対に必要なのであるから、疑問の持ち方について、注意を喚起しなければならない。」と言っているが、どういう注意が必要なのだろうか。

八 この文で筆者の言おうとしていることは何か、簡単にまとめてみよう。

九 もし、小さい子供から、「きゅうりのいぼいぼはどうしてあるのか。」というような質問を出された時、どう答えたらいいか。答え方について話しあおう。

十 「科学的」ということはどういうことであるか。このことを主題として討論してみよう。

〔二〕 ものを食う細胞

緒方富雄

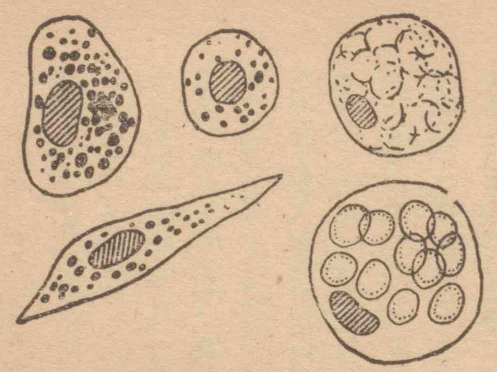
A われ〴〵のからだの中に、ものを食う細胞があることは御存じでしょうね。

B 白血球のことではありませんか。そのほかにもあるのでしょう。メチニコフの傳記で読みました。

A 驚きましたね。そういうことまで御存じですか。

B オリガ＝メチニコフの「メチニコフ傳」やド＝クライフの「微生物を追う人々」で、おもしろく読みました。

A この種の細胞の働きから「食細胞」という名がつけられたことも覚えていらっしゃるでしょうね。白血球は細菌類のような小さなものを好んで食うし、白血球でない食細胞はもっと大きいもの、たとえば赤血球を食ったり、炭の粉を食ったり、組織のこわれたものを食ったりします。それで白血球のようなものを「小食細胞」（小さいものを食う食細胞という意味）と呼び、もう一つのものを「大食細胞」（大きいものを——というより、大きいものも——食う食細胞という意味）と呼びます。しかし、こゝにいう大小は寛大にとってください。白血球だってかなり大きいものも食います。炭も食います。近ごろは食うものの大小からでなく、細胞の由來で呼び分けているのです。ところで、私は今たび〴〵「食う」ということばを使いましたが、一個の細胞がものを「食う」という言い方をするのはおかしいと思いませんか。



ものを食っている大食細胞。左の三つは炭を食ったところ。右上は脂肪滴を、右下は赤血球を食っているところ。（模型図）

B なぜですか。

A こういう細胞には、神経があるわけではないし、口もあるわけではない。だから、われ〴〵が「食う」ように、食いたいという意志が働いて、それを口の中にとりこむというのではない。そういうのを「食う」というのがおかしくはないかというのです。

B　そうかとえば、なるほどそうです。では、どういえば正確なのですか。

A　実は「食う」ということばでまにあわせているのです。ことばはお互の約束で成立しているのですから、「細胞が食う」といえば、こういう意味だと約束して使っているのです。「とりこむ」とか「とりこまれる」とかいってみても、やはり細胞に意志があってやることのように響くし、「中にはいる」といえば、よほどいいでしょうが、それでも文句はつけられる。どうせ文句がつくのなら、お互の約束で、簡単に「食う」といっておいても不都合はない。そういうわけで、あなたがたも、このことばをとがめないでいたゞきたいと思うのです。

B　いわゆる擬人法的な言い方が、しろうとにはあぶないということですね。

A　まあそうです。実際に擬人法的な言い方を、そのまゝほんとうと思っているしろうとがあります。たとえば、結核菌がわれ〳〵のからだの中へはいって繁殖した時、結核菌の侵入を受けたというようなことをいいますが、これはたゞことばのいいまわしだけのことであって、別に結核菌が、われ〳〵を目のかたきにして襲撃して來たわけでもなんでもない。たゞ、簡單のためにそう言うだけのことなのです。科学のことばに擬人法はいけないとよくいわれますが、よく捜せば、専門家は互にずいぶんたくさんこれを使っています。ほとんど無限といってよい。要は、それにつりこまれないようにすることです。

B　それはよくわかりました。それでは、食細胞がものを「食う」のは、どういう働きですか。

A　これは、食細胞の働きについて、最もおもしろい問題の一つです。それだけに、いろ〳〵のことがいわれていて、まだ十分にわからないところが多いのですが、次のような考えは、多くの場合にあてはまると思われます。それは何かというと、食細胞の表面張力と、いわゆる「食われるもの」の表面張力との違いに目をつける考え方です。表面張力のことは、説明するまでもないと思いますが、食細胞の働きを考えるのに関連したことだけを考えてみましょう。

まず表面張力の違う二種類の液体が触れあった時に、どんなことが起るか、それを考えてみようではありませんか。たとえば、油と水とは御承知のように溶けあいませんが、水の上に油をたらすとどうなるか、御存じでしょうね。

B　水の上を、油が走るように廣がるのじゃありませんか。よく川の水や、雨の降った日に鋪装した道の上などで見かけることですが……。

A　その通りです。しかし、今私は油と水と言いましたが、油といわれているものにもいろ〳〵の種類があって、水の上に廣がらないものもあります。

それはともかくとして、水の上に廣がる油は、水の表面張力で引っぱられて引き廣げられるわけです。今考えたのは、廣い水の表面に、もう一つの液体をたらしたような場合でしたが、両方がまとまった形をなしているような場合でも、同じようなことを考えていいはずです。結局、表面張力の小さい液体が、表面張力の大きい液体の表面におゝいかぶさりますから、かぶさった方の液が、これを取りこんでしまうということになります。そういうありさまを擬人法でいえば、「食った」といってもいいでしょう。

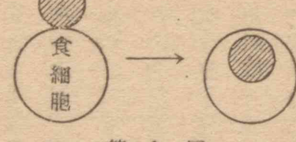
こういうような、二つの物体の表面張力の関係の考えを、食細胞の表面張力(a)と、これに食わ

れる物体の表面張力（ｂ）との間に持ってくるのです。そうすると、だいたいこういうことが言えるはずです。

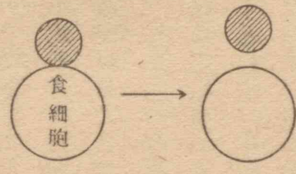
(1)　ａがｂより著しく小さければ、食細胞は物体の表面にかぶさってしまう。したがって、その結果として、食細胞が物体を食ったことになる（第一図）。

(2)　ａがｂより著しく大きければ、ｂを示す物体が一定の形をとっている限り、食細胞は物体と接触してもこれを食わない（第二図）。

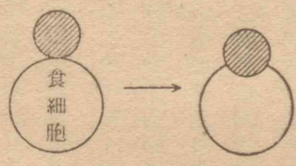
(3)　ａとｂとの差が一定の範囲内であると、物体は不完全に食細胞に取りこまれた状態のまゝでつりあっている（第三図）。こんなことで、食細胞が物体を食ったり食わなかったりするということが考えられるわけです。



第1図



第2図



第3図

Ｂ　なるほど、つまり食細胞を液体の一滴のように見なして解釈するのですね。そんな簡単なことでいいのですか。

Ａ　もちろん、実際はわれ〳〵がまだはかり知ることのできないほど複雑なものでしょう。しかし、今考えたようなからくりが行われることがありうるだろうということは、考えてよいでしょう。複雑といえば、食われる物体が非常に小さなものになると、もっと別の作用が影響していると思われますし、生きた細菌などでは、化学的な作用が食細胞に及ぶということも考えられます。また食われる途中と刻々と條件が変わって行くということもあるでしょう。いずれにしても、食細胞はこんなからくりでものを食うのであろうと考えるのが妥当でしょう。

Ｂ　食細胞に食われたものはどうなりますか。

Ａ　食われたものによります。細菌類などはたいていのものは、早かれおそかれ、分解してしまいます。それを「細胞内の消化」といっています。やはり酵素の作用で起るものだろうといわれています。

Ｂ　消化といわれましたが、一体食細胞がものを食うのは、細胞自身の生活にどんな意味があるのですか。この細胞はこういうものを食ってそれを栄養として生きて行くのですか。

Ａ　いやそうではありません。これは逆に考えてごらんになるとわかるはずです。われ〳〵のからだの中にあるおびたゞしい数の白血球や大食細胞は、その大部分は一度も細菌を食わないでしょう。それでも白血球や大食細胞の壽命はちゃんと保たれています。それはこういう細胞も、からだのほかの細胞と同じように、体液から栄養分を受けて生活しているのです。食うのは、生きるため以外の働きといえるでしょう。

Ｂ　もっとも、独立して生活しているアメーバなどでは、事情が違うようです。これはやはり食ったものの中から栄養をとっていると考えられているようです。

Ａ　白血球などはどのくらいの壽命のあるものですか。

Ｂ　動物や人の白血球についてくわしい研究があります。とにかく温度を低くしておけば、案外長く生きているようで、哺乳動物では攝氏五度くらいで、一、二週間は生きているものと見えます。

攝氏三十七度近くになると一、二日というところのようです。

B　食細胞に食われたものは、すべて消化を受けるのですか。

A　いや、さっきちょっと申しましたように、食細胞は炭の粉のようなものまで食いますが、御承知のように、炭は最も安定なものですから、細胞の中へはいっても、いつまでもそのまゝで存在しています。そして食細胞が死んでも、そのまゝ残っています。

B　それでは、食細胞はどんなものを食うのか、何か一定の法則のようなものがあるのですか。

A　どんなものを食うかということは、さっき順序を立てずに申しておきましたが、一定の法則があるといえば、いえます。第一に、われ〳〵のからだになじまないもの、すなわちたいていはわれわれのからだの外からはいって來るものがよく食われています。たとえば細菌類や、炭の粉などがそれです。それから第二には、自分のからだの中にあるものでも、何か性質が変わったような時に食われています。たとえば組織のこわれた破片のようなものや、自分のからだの中にある赤血球なども、何か変質した時に盛んに食われます。これも「なじまない」ものになったのであろうと思われます。しかし、この「なじまないもの」という概念は、嚴格に考えれば非常にむずかしいものです。

なお、今まで、食われるといえば、まあ顯微鏡で見える程度のものを頭においてお話していましたが、もっと小さいもの、たとえば、外からはいって來たたんぱく溶液のようなものでも、確かに食われているという証拠はあります。これらの細胞が栄養分をとりこむのなども、その部類に入れてさしつかえないでしょう。

（からだを護るもの）

研究

一　「細胞が食う」という場合の「食う」はどんな意味で使われているか、

二　一つの「事実」と、それを表わす「ことば」との関係について考えてみよう。

三　擬人法的な言い方をするのは、どうしてしろうとにはあぶないか。

四　「なじまないもの」という概念は、嚴格に考えると、非常にむずかしいものであるという事実について考えてみよう。

五　この対話を読んで、質問のしかたと、それに対する解答のしかたを研究しよう。

六　この対話を通して知られる事実を、簡單にまとめてみよう。

七　科学的事実と科学的記述との差異について考えてみよう。

八　この対話を材料として、その内容と説明のしかたとについて討論をしよう。

〔三〕 イソポの機知

われ〳〵が少年時代から絵本や讀物として親しみ、中学校にはいって英語の本でも勉強したイソップ物語については、深い愛着を感ずるであろう。イソップは紀元前六・七世紀のギリシアの賢人で、比喩談の達人として著名であった。いわゆる「イソップ物語」は、必ずしもイソップによって作られたものではなく、後代の比喩談が、名人イソップに仮託されたものといわれている。各國語に訳述されたこの物語は、種類も多く、話の数も一定していない。

天草本 伊曾保物語

わが國には、十六世紀の下半期に、キリスト教とともに、説教用の補助的教訓本として輸入されたが、そのはじめの時期は不明である。この本文の出典天草(あまくさ)本伊曾保(いそほ)物語は、文祿二年（一五九三）の春、天草のキリシタン学寮から出版されたもので、ラテン語からの和訳、ローマ字でつゞられており、文体は簡潔な、当時の口語体である。話の数は七十。その前にイソップの略傳がついている。この略傳は、ビザンツの学僧、マキシモス＝ホ＝プラヌーデースがギリシア語からラテン語に飜訳したものとされている。もちろん、この傳記もギリシアの古傳説によったもので、史実をもととしたものではない。こゝに載せたのは、その略傳の一部である。

ESOPONO
FABVLAS.
Latinuo vaxite Nippon no cuchito nasu mono nari.
IESVS NO COMPANHIA NO
Collegio Amacusano votte Superiores no gomenqiotoxite coreuo fanni qizamu mono nari.
Goxuxe yori M.D.L.XXXXIII.

本文によって、われ〲に親しみの深いイソップ物語のわが國における源流を知り、西洋文化の東漸のへんりんにも触れることができる。また飜訳当時の國語について知ることができて、興味深いものがあるであろう。

なお、本文では、イソップは「イソポ」と書かれている。「シャント」はイソップの主人の名である。

ある時シャント、イソポに、「わが第一と思はう珍物を買ひもとめて來い。」と下知せらるるに、諸人座につらなつてゐるところへ、けだものの舌ばかりを調へて出いた。シャント大きにあやしめて、イソポを召して、「なんぢはなぜに舌ばかりをば買うて來るぞ。」と言はるれば、イソポ答へて言ふは、「第一と思はう珍物を買うてまゐれと仰せらるるによつて、かうつかまつつた。それをなぜにと申すに、天下の善悪は舌三寸のさへづりにあるといふことがござる。しかれば天下國家の安否も舌に任することとなれば、何かはこれにまさらうずるぞ。」と申した。「しからばまた第一のあしい物を買うて來い。」と下知をせらるれば、イソポまた舌ばかりを買うて來たを、シャント「これは何事ぞ。」とあやしめらるれば、「舌はこれ禍(わざはひ)の門(かど)なりとまうすことわざがござれば、これに過ぎたあしい物はござるまじい。」と答へたと申す。

ある時またシャント、イソポに、「ふろに行いて人の多少を見て來い。」とやらるれば、ふろへ行く路次(ろし)で、宿老「われはどこへ行くぞ。」と問ふに、「身は存ぜぬ。」と答へたれば、その人、「これはらうぜき至極なやつぢや。」と言うて、すでに籠(ろう)者になさうとするところで、イソポが言ふは、「わたくしがたゞ今知らぬと申したことは、かやうに籠者せられうことをわきまへなんだによつて、知らぬとは答へてござる。」と言うたれば、そこで人々もおほきに笑うて許いてやれば、それからイソポ、ふろに行つて見るところに、そのふろ屋の前にするどな石が一つ出てあつたが、出入りの人の足をやぶり、傷をつけたを、ある人が、かの石をとつてかしこに捨てたところで、イソポこれを見て、立ち帰つて、「ふろにはたゞ一人ゐまらする。」と言うたれば、すなはちシャント喜うでふろに入らうとおもむかるるに、人がこぞつて、足をふみ入れうずる所もなかつたによつて、シャント、イソポに怒つて言はるるは、「おのれはふろにたゞひとりあると言うたが、この群集(くんじゅ)は、常よりも多いは何事ぞ。」と。イソポ「このふろ屋の入口にとがつた石があつて、出入りの人のあたとなつたを、たれも取り捨てないで、人ごとにつ

まづき倒るれども顧みなんだを、ある人一人來てとつて捨ててござれば、知分のほどのたゞ一人なことを申した。」と答へておぢやる。

ある時シャント沈醉してゐらるるところへ、人が來て、「大海のうしほを一口に飲みつくさるるみちがあらうか。」と問ふに、シャント「たやすう飲まうずる。」と領掌をせられた時、その人の言ふは、「もし飲みつくさせられずばなんと。」と。シャント「かならず明日飲まうず。もしまた飲み損ずるにおいては、一家の財宝をこと〳〵くまひなひに進ぜうず。」と言へば、相手もそのぶん約束して、互に指金を取りかはいた。その人が帰り去つて、酒さめて後、イソポを招きよせ、「身が指金はどこにあるぞ。」と問はるれば、イソポが言ふは、「今日まではこの家のお主なれども、明日はなんとならせられうか。」と言うて、先の爭ひを語つたれば、シャントは大きに驚いて、「さてなんとせうぞ。ひとへになんぢに任するぞ。このことをなんとぞ計略してみよ。」と言はれたれば、イソポが言ふは、「われこの難儀をのがれさせられうずることを教へまらせうず。しからばわが身を自由になさせられい。」と。シャント「そのだんはいとやすいことぢや。」と約束して、はかりことをイソポに教へられ、翌日海辺に出て、大海を飲まうと爭ふほどに、見物の貴賤海のほとりに市をないた。その時、シャント器物にうしほをくんで、高座にのぼつて言ふは、「われきのふの約束のごとく、海の水をこと〳〵く飲みつくさうず、しかれども、まづもろ〳〵の川の流れをせき止められい。その後海をこと〳〵く飲まうずる。」と言うたれば、その時爭うた人は問訊して、シャントの足もとにひれ伏し、「ぜひにおよばぬ、れうじを申した、右の懸物をば御赦免あれ。」と賴むによつて、その所にはせ集まつた万民も、ともに「許されい。」とこひ受くるによつて、すなはち赦免せられた。

（天草本伊曾保物語―新村出訳）

研究

一　三つの話に現われているイソポの機知について話しあおう。

二　これに似た話、たとえば「屛風の絵にかかれたとらを縛れ。」と言われて、「そのとらを追い出してください。」と逆襲したなどという話が、わが國にもあるが、このほかにはないだろうか。

三　原本は、ローマ字書きで、当時の口語の発音は、かなり正しく傳えられている。こゝでは漢字を当ててあるから、特殊な語も、およそは理解できるであろう。今日では使われなくなっている語、たとえば「沈醉」「籠者」「問訊」の類をあげてみよう。

四　今日も用いている漢語で、その読み方の違っているのがある。たとえば「大海」「安否」の類をあげよう。

五　似た意味では、今日も用いるが、少しく違った意味で用いられていた語、たとえば「調へる」「あた」などの類を考えよう。

六　人称代名詞を全部抜き出して、その用い方を、今日の標準語と比較しよう。また、自分の使っている方言と比べよう。

七　「ゐまらする」「教へまらせうず」などの「まらす」について調べよう。

八　「許いて」「喜うで」「ないて」など、特殊な音便の形に注意しよう。

九　推量の助動詞「う」が、盛んに用いられている。その例を抜き出そう。

十　「まさらうずるぞ」「ふみ入れうずるところ」「飲まうず」などの例を抜き出して、その意味を考えよう。今もこれに似た言い方をする地方はないか調べよう。

十一　「ところへ」「ところで」「ところに」「所も」という言い方を抜き出して意味の異同を考えよう。

十二　打消の言い方で注意すべきものをあげよう。

十三　そのほか、特殊な言い方と思われるものを、一つ〳〵調べてみよう。

十四　本文のことばと、ほゞ同じ時代のことばを写したといわれる狂言のことばとを比較してみよう。

十五　この当時の特別な言い方を正確に理解した上で、あらためて本文をよく味わってみよう。

十六　この話を、わかりやすく、おもしろく聞かれるように、現代語でつゞってみよう。

三　手紙と随筆

手紙の種類は大きく分けて二つにすることができる。実用的なものと社交的なものである。親戚や知友と時候のあいさつをかわしたり、病氣や災害の見舞をしたり、近況を報じあったりして、互に励ましあい、慰めあう。これらはみな社交のための手紙である。これに対して、商品を注文したり、会合の日時を連絡したり、あるいは、何かについて人に依頼をしたりする場合のものが実用的の手紙である。

社交のための手紙では、ちょうど、特にこれといった要件はなく、人が集まって、愉快に談笑する場合に似ていて、相手に対する親愛の情にあふれ、適度の敬意を失わないことがたいせつである。実用的のものでも、このことが無視されてはならないが、それよりも留意しなければならないことは、要件を明確にすること、誤解を招かないような辞句を用いること、それからできるだけむだを省いて簡潔に書くということとである。それはちょうど、商業上の取引や問題解決のための会議における應答や討議の場合と似ている。

談話と違って手紙の場合には、相手が目の前にいないのであるから、相手の誤解を直ちに解くことができない。この点を考えれば、手紙文の書き方は、談話の場合以上に、細かくことばに注意する必要があるわけである。手紙文の、社会生活において占める重要さを考えると、平素から自分の考えや、いろ〳〵のことがらを文章にしてみる習慣を養ってお

くことが望ましい。

随筆は、もとより手紙文とは無関係なもので、まして、手紙文の上達を目的にして書かれるものではないが、それを書いて樂しむうちに、自分の心持をまとめたり、ことがらを明確に書いたりする能力がついて、手紙を書く上にも、大いに役立つに違いない。

小説や詩歌などと違う、文学としての随筆の本質がどこにあるか、すぐれた随筆の作品にどんなものがあるかについては、今までに聞いたり読んだりしていることでもあろうが、なお自分たちで研究しよう。

こゝには、遠く異郷にあって、時おり、身辺の状況や感想を故國の妻に報じた手紙文、山上の一牧場に対する深い愛着を示した随筆、および、過去の日本が生んだすぐれた随筆枕草子からの抄出を掲げた。よく読み味わって手紙を書いたり、随筆を書いたりする参考にしよう。

〔一〕パリだより

植田壽藏

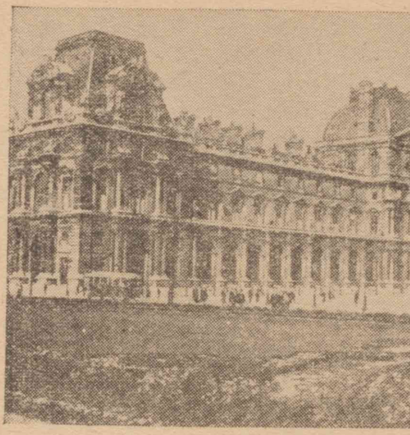
九月十一日　午後六時

ではまた手紙を書くことにしよう。こないだはこっけいだったよ。マドレーヌというお寺の前の町かどで、本屋の飾り窓を見ると、古い上品な装幀の、小型の本が並べてある。見るとパスカルという人の「パンセ」という本だ。かねてからほしいと思っていた本で、しかも装幀がこんなのだから、さっそくはいって値を聞くと、十四フランと言うらしい。これはまた安いと思って、大喜びで、十フラン紙幣を二枚出して、悠々として渡すと、「安いのならほかにあります。」と言う。よく聞いてみると、千四百フランだ。「おゝ高い。」と、思わず言ったら、「高いです、初版ですから。」と言った。なんとしてもほしいので、だいぶ考えたが、まあぜいたくはよそうと思って、うしろ髪をひかれながら去った。四、五日して、セーヌ川の岸の古本屋の箱を、一つずつのぞいて行くと、ふっと目についたのが同じ本だ。全く同じ装幀だ。とび立つように思ったが、今度は警戒して、耳をすまして聞いてみると、五十フランだという。もちろん買った。帰って調べてみたら再版で、ちょうど二百年前の本だった。再版でたくさんだ。

きょうからレンブラントに取りかゝった。牛肉をつるした絵から始めて、肖像画を数点見た。きょうはなんだか疲れていて、氣のりがしなかったのだが、二、三分見ているうちに、いつとなく氣持がさえてきた。えらい絵はどうしても違ったものだ。時計を見たら知らんまにおひるになっていた。少少興奮の氣味で、少し歩こうと思って、美術橋を渡って、セーヌに沿ったマラケー河岸を來ると、美術学校の方へ折れるかどの所で、思わず「おゝ。」と言って立ちどまった。そこの飾り窓に、レンブラントの「エマオの巡礼」の大きい色刷りがあるのだ。もしルーブルで好きな絵を二枚あげろと言われたら、ぼくはミレーの「晩鐘」と、この絵をあげる。まあしかしきょうは買わずに來た。

九月二十一日　午後三時

きょうはとてもよい天氣で、珍しく青い空に、白い雲が軽そうに浮かんでいる。あすは雨にでもならなければよいが。まだほんのこないだたったばかりのように思うが、もうやがて三月になると、き



ルーブル博物館

ょうも、月曜でルーブルは休みだから、郊外へ出て、セーヌ川に沿ったいなか道をひとりで歩きながら、思ったことだ。絵を見る仕事もだいぶはかどった。さしもに多いルーブルの絵も、七、八分どおりはすんで、ようやくミレーの「晩鐘」を見るところまできた。きのうは、おゝかた半日この絵の前に立ちつくした。

ルーブルで、はじめてこの絵を見つけた時の氣持は、ちょっと書きようがない。昔、中学にいたころに、たしか「文藝界」という雑誌が、しばらく出た。それが毎号、口絵に西洋の名画を載せて、高山樗牛があの名文でその解説を書いていた。そこで見たのがはじめだと思う。それ以來、この原作が一度見たいと、いくら思ったかしれない。いつか西洋から取りよせた、ちょっと大きい画集が九冊あるのを知っているね。あの中にフランスの美術が一冊ある。そこにこの絵があるが、あの色刷りが、いろんな複製のうちで割合原作の調子に近いようだ。それがどんなに違うものか、きのうルーブルで書いたノートをちょっと写してみるから、興味があったら比べてごらん。向かいあって立っている農夫の顔は、ほおもあごもひどくこけた、苦労のはっきりわかる顔だ。口は一すじ線を引いて、その下にくちびるの影がかすかに見えるだけなんだが、その眞率な氣持といったら。頭が黒色に近いほど濃い暗褐色、顔と上着は暗さが少し浅く、赤色が少し加わっている。耳、右のほお、肩、かゞめた腕の下の方は、更に赤みが加わっている。ほのかに白いシャツの間からのぞく、顔と同じ色の胸に、かすれたような赤い絵の具の筆触がある。濃い、暗い青色のズボンにも、毛糸のような赤い筆触が縦に引いてある。木ぐつも足も、赤みを帯びた暗褐色。農婦の頭も顔も手も、上着の一部も、同じように濃い暗褐色だが、この方はかなり濃く赤みを帯びて、一部分には青みがかゝっている。淡紅色の腕抜きのかげのところと上着の一部が、青みを帯びた濃い灰色だ。青みのかった前かけの一部が光を受けて、白くかすかに灰色を帯びている。その上に淡紅色の軽い筆触が、縦に長く引いてある。暗いところは、青みのかった灰色の曲線が、横に重ねて引いてある。前かけのうしろとすそに見えるスカートは、青みを帯びた濃い暗褐色、それに、かすれた赤い絵の具がつけてある。木ぐつの足は濃い鉄色で、こゝろもち淡紅色がかゝっている。光を受けたところは、その紅色がめだっている。ふたりとも輪郭をはっきりかかず、少しにじましてある。農婦のくびのあたりは、もゝけた紙のように絵の具をつけて、背・腰・足のあたりは、淡紅色などのかすれた線を添えて、はっきりした輪郭を消してある。あとは略するが、明かるく高い空の下に、ほの暗く遠く廣がる野の土を踏んで、ふたりの暗い姿が恐ろしいほど力強く立っている。くい入るように目に迫ってくる。ふたりともほんとうに祈っている。うつむけた顔や、合わした手ばかりではない。全身が祈るのだ。いじらしいほどそぼくな足つきで、土からはえたように、しっかり立っている。かれらの足は、この野の土のほかに、踏むべき土を知らない足のようだ。車の柄からも、車の輪からも、「今動く」というけはいが、じっとくい入るように迫る。いつまでいても去る

時がない。農婦の頭の上の方から右のすみへかけて、からすであろう、鳥が十五羽半飛んでいる。どの複製を見ても、この鳥の数が足りない。

ルーブルの賣店で賣っている大きい複製のを数えてみたら十二羽しかいなかった。

十月二十七日　午後六時

晝飯後、ゾラの「ルーブル（製作）」を読んでいたが、疲れていやになったから、やめて手紙を書きかけたら、廊下に足音がして戸をたゝく。進藤君だなと思う、誠一君。足音でわかる。「アントレー」と、大きなふざけ声を出す。進藤君に誘われて、小雨が降るのにこうもりもささずに散歩して、進藤君の下宿へまわって、本を借り、また雨の中を帰って來た。

小説を読んでいるそうだね。非常によろし。大いに読むがよい。「改造」に出ている志賀さんのものなんかよいね。あの人の小説は、いかにもおうようで、なんとなくそぼくな中に、一種の大きさがあってね。もっともそんなことは、筋だけ追うて読んだだけではよくわからないよ、書きぶりをよく味わって読んでみなければ。一葉のものは、丹波の姉のところにあるから、あれも読んでごらん。鏡花は前に読んでいたね。これもまだいろ〳〵読んでみるがよい。こゝへも少し持って來たが、まだ何冊か装幀のきれいな本が残っているし、雑誌に載っているのも取ってある。

夏目さんの「行人」というのがあるが読んだか。まだならあれも読んでみるとよい。大きなかき色の背皮の本だ。その中に兄よめという人がいてね、夫が文学部の教授で、この人は、ぼくにはとんと同感できない、まあきらいだが、夫人の方は実によい。外見はいかにも冷たそうだが、その実とても親しみのある、強い情熱を内にひそめた人で、ぼくはこういう性格の人は大好きだ。ことにそのことばづかいが氣にいった。まあ読んでごらん、そうしてこの人のことばもよく味わってごらん。

ことばというものは実におもしろいもので、きれいな、ていねいなことばさえ使えばよいというものではない。上品なことば、うちとけたことば、いろんな様子のことばをうまく取り合わして話すのだね。同じことばでも、声の出し方、速さ、強さの違いで、いろんな心持が、つまりその人の感情・性格が現われるものだ。ドラクロワという、フランスの十九世紀の大画家がいる。ルーブルにたくさんりっぱな絵があるが、一生独身で、教養の高い生活をした人だ。この人が、「ムッシュウ（あなた）」という一つのことばを、二十四とおりに話しわけたと書いてある。二十四とおりは、一々勘定したものかどうか知らないが、まあ洗練した話しぶりのことをいうのだろうね。

洗練ということは、むずかしいことだがたいせつなことだ。こないだ、「ときわ」で食事をして帰ろうとすると、見知りごしの夫人がいるのでちょっとあいさつした。そうすると、いすにかけて、はしを持ったまゝひょこんと頭を下げられた。しかるべく食べ物をのみこんで、はしを置いて、ちょっと立つべきだというぐらいのことは知られないのでもなかろうが――あるいは知られないのかもしれないが――知っていてそれができないのは、平素の訓練が足りないのだね。どんなとっさの場合でも、いきなりでなく、ほんの一、二秒落ち着いて、次の動作を判断することのできるのが、訓練ができているということだ。いつかも往來を歩いていると、向こうからひとり日本人が來て、出あいがしらにおじぎした。ぼくも帽子をぬいでおじぎすると、「あっ、失礼しました、人違いでした。」と言った。ぼくはこんな釈明を生まれてはじめて聞いた。天涯万里の異郷で、同じ日本人に会って会釈をするこ

とは、人違いであることを弁解しなければならないほど失礼なことだと思っている人と見えるね。おそらくこれも、とっさの判断のできない人なんだろう。

ルーブルにいると、いろんなかっこうをした日本人がたくさん來るよ。四、五人も連れだって、大きな声で話して行く人やら、上着の両方のポケットにぶら／＼するほど物を入れている人やら、なんとかならんものかと思うなあ。いつかふたり連れの人が來て、あんまりたくさんあって困るが、どれを見たらよかろうと言うから、ぼくももう帰ろうとしていた時だし、こういう人も珍しいから、ざっと案内してあげたら、喜んで礼を言って別れて行った。四、五日して、ブーローニュの森を散歩していると、またそのひとりが向こうから來たが、知らん顔をしてすれ違って行った。こういう目の人は、美術には向かない。

十一月二日　午後六時半

京都もこのごろはよい月夜だろうね。パリも月は日本と少しも感じが変わらない。もうマロニエもプラターヌも、すっかり葉が落ちた。このふぜいも実によい。自然はいつ、どこで見ても美しい。きのうは岡崎(おかざき)君とふたりで、セーヌ川の向こうへ遠足して、久しぶりに柔らかい土を踏んで、ほんとうになつかしかった。一度、嵯峨(さが)へ行って、天龍寺(りゅう)の松林や、二尊院の前あたりを歩いてみたい。松たけなんかはちっともうらやましくないよ。たつ時、人のくれたのがまだ一かん残っている。かきもたくさんみごとなのがあるよ。かきはこゝでも「かき」というから妙だ。くりはね、パリにもよい焼きぐりがあるよ。ちょうど焼きいも屋のようにして、レストランの前などで焼きながら賣っている。

十二月七日　午後八時二十分

さっき竹田さんに別れて、美術橋を渡ると、リュードーリヴォリの町の燈火が、ぼうっと空に映る。その前にルーブルの大建築がまっ黒に、さま／＼の屋根を起伏させてずうっと向こうまで続いていた。それではあすの晩、九時二十分の汽車で、竹田さんと岡崎君と、三人いっしょにパリをたつ。あさっての今ごろは、スイスで、レマン湖畔に泊まっていることと思う。いよ／＼去るとなると、なんとなくなごり惜しい。竹田さんも、きのう午後散歩して、パンテオンの丸屋根がうす紫にそびえるのをながめて、一生の見おさめだと思うと、ほんとうになごり惜しかったと言われた。ぼくは來年、春までこゝへもどるけれども。

八日、午後三時。もう少し書き加える。けさは、マドレーヌの前のクックへ行って、切符と座席券を受け取って、ルーブルのそばの、これもルーブルというデパートでスーツケースを一つ買って、帰って詰めて、だいぶ忙しかった。ではこの手紙を出して、進藤君に別れを告げて。さらばパリよ。

（雑誌「文体」）

研究

一　この手紙は、外遊中の筆者から、京都に留守居している妻にあてたものである。この手紙によって察せられる筆者の人がらや職業について考えてみよう。

二　この手紙から察して、妻から筆者にあてて書かれた手紙の内容について想像してみよう。

三　この手紙の文章と、普通の口語文とを比較してみよう。また、会話に用いられる「話しことば」と、この手紙文とを比較してみよう。

四　十月二十七日付の手紙について、その文の進め方について考えてみよう。

五　「ぼくはこんな釈明を生まれてはじめて聞いた。天涯万里の異郷で……おそらくこれも、とっさの判断のできない人なんだろう。」と言っているが、筆者は、どういう前提のもとに、こうした意見を立てたのであろうか。

六　十一月二日付の手紙を読んで、時候のあいさつのための手紙文として参考になる点を考えてみよう。

七　本文を中心に、手紙文・紀行文・随筆・日記の書き方について話しあってみよう。

八　志賀直哉（なおや）の作品は、この教科書でも採ってあるが、廣く他の作品も読みあって、その作風について話しあおう。

九　樋（ひ）口一葉・泉鏡花・夏目漱（そう）石などの作品を読んで、そのあらすじを書いたり、読後の感想を話しあおう。

十　自分の好きな絵や彫刻などの美術作品を選んで、それに関する説明文またはそれに対する感想・批評の文を書いてみよう。

〔二〕山上の牧場

大島亮吉

バタ製造場の煙突からは、すっと柔らかに煙が流れて消えて行く。石を敷きつめた低い屋根の牛舎の間の幅廣い通路にはいると、もう家畜特有のにおいがする。干し草の香がせまる。

どこかの牧舎の中で声高に話しあっている、健康そうで、快活な牧夫たちの話し声、遠くでほえるあの羊飼い犬の鳴き声などとうちまじって、そば近くの牛舎の白いラック塗りの窓からは、人なつこい、甘えたような、乳牛たちの「もう」が聞える。牛舎の間の中庭も、そこいらに散らかった寝わらくずも、水たまりもみな凍っている。見かけはくすんだ百姓家づくりで、屋根に石を載せた牧舎も、その内部はみな、さっぱりとして、明かるい感じのする西洋ふうの白ラック塗りになっている。そして、ほの暗い、むん〳〵と鼻をつくような牛舎特有のこんがらかったにおいのする内部には、くり色・白・黒・ぶちなど、すべて小山のようなゼルシイ種の多産なおとなしい獣たちが、出っぱったしりの先にぼんやりあたるばら色の朝日を受けて、立ったり、前足を折ったり、すわったり、反芻（すう）したり、よだれを流したり、なまあたゝかい呼吸をもう〳〵と吐いている。

搾乳係の牧夫が、手なれた手つきで、うすばら色の大きな乳ぶさからアルミニウムの大きなバケツの中へ、ちゅうちゅうと白い線をほとばしらせて乳をしぼっている。彼女たちはその間、溫順な目つきをして、もぐ〳〵とたゞ干し草を食べている。甘ったるい臭氣の中を、こんな寒さにも、はいがぶんぶん飛びまわっている。

ニウムのバケツから、そのしぼりたてのまゝを厚でのガラスの大コップへいっぱいになみ〳〵と注いでくれた牛乳の、なんという新鮮さ、なんという芳醇（じゅん）さ、冷えたからだになまあたゝかい牛乳のほんとうのうす甘い味をもって、のどをぐい〳〵通る時のうまさ。

あゝ、美しい、清らかなこの信濃（しなの）境の山上牧場の春浅い朝に飲む、この芳醇甘美な一ぱいの牛乳。私は都会にいては米のとぎしるみたいな牛乳は飲まない。けれど、この牧場へやって來ると、いつも毎朝、毎夕しぼりたての牛乳を、二合ばかりはいる大コップに一ぱいぐっと飲む。それも朝は、晴れやかな散歩や、一日のさまよい歩きに出かける前、夕べは終日の山歩きから、ほどよく疲れて帰って

來て、すぐかわいたのどに夕食前に飲む。私のこの山の牧場を好んで來るいろ〳〵な理由の一つは、実にこゝのまゝ新しい牛乳の味を忘れかねてである。たゞそこへ乳を飲みに行くことだけでも、それは実に私にとって喜ばしい健康なことだ。

この牧場は、実にいい場所にある。清らかな、透きとおった場所だ。標高は千メートルから千三百メートルまでの間にある。

山の上の高い所に、よくもこんな、緩傾斜の廣い場所があったものだと感心するくらいだ。牧場を出て、からまつのまばらに立っている枯れ草の斜丘にのぼると、春まだ浅い山くぼ、谷くまには雪が残っている。こゝでも春はふきのとうから芽ぐむ。そして、こゝへ來る時通って來た上州のうす青い谷々や、淡紫色の低い山の遠景を見ていると、春は平原からのぼって來るのだということが、つく〴〵と感じられる。

もしも、物見か寄石の頂までのぼって行ったら、そこのぐるりに開ける山上展望に私は酔わずにはいられない。雪ふか〴〵に、西風に洗われて、水晶のように透明に光っている北アルプスを最も遠くに、八が岳から続いた蓼科は老い朽ちた死火山の影を放ち、浅間は吐く煙もほのかに、みな雪に白く、秩父は屋根黒々と高く、それとこゝとの間にある折り重なった多くの黒木山の林層のあいまには、ところどころ白く雪が光って見える。右は八風山に続いて起伏するまだら雪山。のぼって來たうしろには、妙義の黒い、骨ばった峰々。そして更に視線を遠く上州の平原へとのばすと、それに続く低い山々の折りたゝみが、まるで固体の海の波濤ででもあるかのようにながめられる。私は、この物見と寄石との、三月のある午前の山上展望によって、一度は遠ざかっていた北アルプスに、強くまたひき寄せられた。そして、その時急いで私は家に帰り、すぐさま友を誘ってそこへ出かけて行った。それから蓼科へも、そこからの展望によって誘惑されて、牧場をおりて行ったことがあった。おそらくこゝの展望は、この早春のころと、そして晩秋のころが最もいいであろう。

牛舎・まぐさ小屋・肥料小屋・物置小屋・牧夫小屋・バタつくり場など、みなこのあたりの風景にふさわしく、無秩序のように、それでいてうまく、最も都合よく建てられてある。だいたいこの牧場の建物や小屋は、外部は普通の信濃の山家のつくりそのまゝをとって、たゞ内部を、牧舎や、それ〴〵の小屋の用途に適するように変えただけである。私のいつも來て泊まる牧場の炊事場と食堂をかねて、それに牧場へのお客も泊まるようにできている小屋は、きわめて氣にいった内部のつくりだ。厚い一枚板のがんじょうで大きな食卓、その上で牧夫たちが驚くべき健啖さを発揮して、いつも質素な食事をする。室の中にはなんの飾りもないが、片すみの暖炉のそばの側面架の上の湯沸かしはいつでもやさしく、つゝましやかな歌をうたい、明かるいガラス窓は、一つのりっぱな戸外の風景をそのまゝ、額ぶちのようにはめこみ、その上青い山上の朝霧の網をふるわして、ばら色の日光がそのへやの中に斜めに太くさしこむ時、その明かるい窓は全く、このへやにとって最もふさわしい生きた装飾となる。そうして暖炉のそばには、毛なみのつや〳〵した、鼻先のとがって、いかにもりこうそうな顔つきの羊飼い犬がおとなしくすわっている。へやは食事と食事の間には、いかにもこざっぱりと快適に、まるでゴッホの素描のように、きっぱりした明暗と生氣とを受けて整っている。そして食事時の鐘が鳴れ

ば、牛舎からも、バタつくり場からも、仕事を置いて牧夫たちは、日にやけた、まっかな太い腕をまる出しにして、集まって來る。綿の厚くはいった和製テルシャツの仕事着で着ぶくれたそれらの人たちの体軀は、若さと健康とにはちきれるばかり。そして、さもうまそうに、最も質素な食事に向かう。同じいつくしみの空氣は、かれらの上にたゞよって、にぎやかな談笑が、わくようにそれらの人たちの中から卷き起る。

この牧場は、もとは、この物見山の信濃側のふもとにある志賀村の豪家、神津氏の経営にあって、それで神津牧場と呼ばれているのだが、この土地では物見山牧場の方がよく通じる。神津バタの名はよく聞くだろう。それほどこゝはよいバタをつくる牧場としても知られているのだ。

牧場では年じゅう乳をしぼっては、それでバタをつくっている。牧場の生活は單調だ。牧夫のうちには、それ〴〵乳をしぼる役目、まぐさを刻む役目、バタをつくる分離器をまわす役目、まきをつくる役目などときまっている。毎日それを、おの〳〵がくり返している。

この牧場の夏の夕べは、谷から靜かに、煙のようにのぼって來る。そしてそれは山の中腹をはっている。すると遠くで遊んでいた牛の群れは、牛舎の前の、かわいた石を積んで囲った囲いの中にひとりでに帰って來る。乳牛たちは今は朝あけから日沒まで一日、暑い太陽に燒かれた、花と牧草のにおっている、廣い牧場で草を食べたり、流れの水を飲んだりしているのだ。乳をしぼる時間が今來たわけなのである。乳牛たちはちゃんとそのことを知っているらしい。あるものは起きたまゝ、じっと穏やかな、どんよりとした目で私を見つめているし、また別のものは、長々と寝そべり、足をのばし、大きな腹で、まるで乳ぶさをおしつぶしてはしまやしないかと思われるほどにして横になっている。みんなねむそうだ。長いまつ毛のふさ〳〵とした下で、おとなしい目を半ば閉じたり、つぶったりしている。そして、みんな規則的な、ものういかっこうで、反芻している。うすばら色の鼻づらからは、よだれがゆら〳〵と糸をひいて、ゆられている。

すると炊事場の方から、からん、からんという鐘の音が響いてくる。乳をしぼれのあいずだ。乳しぼりの牧夫がやって來る。強い、大きな頭が、ひとりでにみんな起きあがって、大好きな塩をねだっている。牛たちがぺちゃぺちゃと濕った音をたてて、塩をしゃぶっている間、牧夫はしゃがんで、ニウムのバケツの中へ、雪のように白い乳を、ちゅうちゅうしぼり出す。そのしぼる手先の運動は、一つのリズムを持っている。あわだって、乳はバケツにたまる。

谷からのぼって來た夕べは、空からおりてきたすみれ色のヴェールと、この山上でいっしょになってしまった。コリー種の羊飼い犬のほえ声が、牧場の夕べの平和をわずかに破る。炊事場の青い煙が、屋根の上にたゞよっている。ようやく乳しぼりがすんだ牛たちは、穏やかな、重みのある歩きっぷりで、一匹ずつ、囲いの中から、牛舎へと連れこまれる。あっちこっちの牛小屋の中で、低音の「もう」が聞えてくる。そして、靜かに、この山上の牧場に、暑い一日のあとの平和な夕暮れが訪れる。

（山）

研究

一 地図によって、この牧場の位置や、この山上――からながめられる山々の位置を調べよう。

二　筆者は、この牧場のどんなところに愛着を感じているのか。

三　細かい観察による描写や、新しい表現について研究しよう。

四　擬声語や擬態語の使い方について研究しよう。

五　ゴッホはどこの人か。いつごろの人か。どんな絵をかいた人か。

六　このような牧場での生活について話しあってみよう。

七　この文章をもとにして、詩をつくってみよう。

八　われ〳〵の経験をもとにして、紀行文・随想文を作って、発表しあおう。

〔三〕 をりにつけつゝ

清少納言

枕草子は清少納言の作で、紫式部の源氏物語とともに、平安時代文学の双璧と称せられる。その内容は、自然・人事のすべての方面にわたっての作者の観察や感想をしるしたものであり、この作者でなくては見られない鋭敏な感受性、自由奔放な連想を氣品の高い文章をもって表現したものであって、國文学史上、高い地位を占めている。吉田兼好の「つれ〴〵草」をはじめ、後世の文学に與えた影響も著しい。

ころは、正月、三月、四月、五月、七、八、九月、十一、二月、すべてをりにつけつゝ、一年ながらをかし。

正月一日は、まいて空のけしきもうら〳〵と、めづらしうかすみこめたるに、世にありとある人はみな、姿・かたち、心ことにつくろひ、君をもわれをも祝ひなどしたるさま、ことにをかし。

七日は、雪まの若菜つみ、青やかにて、例はさしもさるもの、目近からぬ所に、もてさわぎたるこそをかしけれ。白馬見にとて、里人は車清げにしたてて見に行く。中の御門の戸じきみ引き過ぐるほど、かしらひとところにゆるぎあひ、さしぐしも落ち、用意せねば折れなどして、笑ふもまたをかし。左衛門の陣のもとに、殿上人などあまた立ちて、舍人の弓ども取りて、馬どもおどろかし笑ふを、はつかに見入れたれば、たてじとみなどの見ゆるに、主殿司・女官などの行き違ひたるこそをかしけれ。いかばかりなる人、九重をならすらむなど思ひやらるるに、内裏にて見るはいとせばきほどにて、舍人の顔のきぬもあらはれ、まことに黒きに、白きもの行きつかぬところは、雪のむら〳〵消え残りたるこゝちして、いと見苦しく、馬のあがりさわぐなどもいと恐ろしう見ゆれば、引き入られてよくも見えず。

三月三日は、うら〳〵とのどかに照りたる。桃の花のいま咲きはじむる。柳などをかしきこそさらなれ。そもまだまゆにこもりたるはをかし。ひろごりたるはにくし。花も散りたるのちはうたてぞ見ゆる。おもしろく咲きたる櫻を、長く折りて、大きなるかめにさしたるこそをかしけれ。櫻の直衣にいだしうちぎして、まらうどにもあれ、御せうとの君達にても、そこ近くゐてものなどうち言ひたる、いとをかし。

四月、祭のころいとをかし。上達部・殿上人も、うへのきぬの濃き薄きばかりのけぢめにて、白がさねどもおなじさまに、涼しげにをかし。

木々の木の葉、まだいとしげうはあらで、若やかに青みわたりたるに、かすみも霧もへだてぬ空のけしきの、なにとなくすゞろにをかしきに、少し曇りたる夕つかた、夜など、忍びたるほとゝぎすの、遠くそら音かとおぼゆばかりたど〳〵しきを聞きつけたらむは、なにごこちかせむ。

祭近くなりて、青朽葉・二藍のものどもおし巻きて、紙などにけしきばかりおし包みて、行き違ひもてありくこそをかしけれ。すそ濃・むら濃・巻き染めなども、常よりはをかしく見ゆ。わらはべの、かしらばかり洗ひつくろひて、なりはみなほころび絶え、乱れかゝりたるもあるが、屐子・履などに、「緒すげさせ。裏をさせ。」などもてさわぎて、いつしかその日にならなむと、急ぎおしありくも、いとをかしや。あやしうをどりありく者どもの、さうぞきしたてつれば、いみじく、定者などいふ法師のやうに練りさまよふ、いかに心もとなからむ。ほど〳〵につけて、親、をばの女、姉などの、ともし、つくろひてゐてありくもをかし。

すさまじきもの　晝ほゆる犬。春の網代。三、四月の紅梅のきぬ。牛死にたる牛飼。ちごなくなりたる産屋。火おこさぬ炭櫃・地火炉。方たがへに行きたるに、あるじせぬところ。まいて節分などはいとすさまじ。

あてなるもの　薄色に白がさねのかざみ。かりのこ。削り氷にあまづら入れて、新しき金まりに入れたる。水晶の数珠。ふぢの花。梅の花に雪の降りかゝりたる。いみじううつくしきちごの、いちごなど食ひたる。

うつくしきもの　うりにかきたるちごの顔。すゞめの子の、ねず鳴きするにをどり來る。二つ三つばかりなるちごの、急ぎてはひ來る道に、いと小さきちりのありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなる指にとらへて、おとななどに見せたる、いとうつくし。かしらは尼そぎなるちごの、目に髪のおほへるをかきはやらで、うちかたぶきてものなど見たるもうつくし。あふひのいと小さき。何も何も、小さきものはみなうつくし。

にはとりのひなの、足高に白うをかしげに、きぬみじかなるさまして、ひよ〳〵とかしがましう鳴きて、人のしり先に立ちてありくもをかし。また、親のともにつれて、たちて走るもみなうつくし。

野分のまたの日こそ、いみじうあはれにをかしけれ。たてじとみ・透垣などの乱れたるに、前栽どもいと心苦しげなり。大きなる木どもも倒れ、枝など吹き折られたるが、はぎ・をみなへしなどの上によころばひ伏せる、いと思はずなり。格子のつぼなどに木の葉をことさらにしたらむやうにこまごまと吹き入れたるこそ、あらかりつる風のしわざとはおぼえね。

五月ばかりなどに山里にありく、いとをかし。草葉も水もいと青く見えわたりたるに、上はつれなくて草おひ茂りたるを、長々とたゝざまに行けば、下はえならざりける水の、深くはあらねど、人などの歩むに走りあがりたる、いとをかし。

左右にあるかきにあるものの枝などの、車の屋形などにさし入るを、急ぎてとらへて折らむとするほどに、ふと過ぎてはづれたるこそ、いとくちをしけれ。よもぎの、車に押しひしがれたりけるが、輪のまはりたるに、近ううちかゝりたるもをかし。

月のいと明かきに川を渡れば、牛の歩むまゝに、水晶などの割れたるやうに水の散りたるこそをかしけれ。

（枕草子）

研究

一 「青やかにて」の主語は何か。「もてさわぎ」の目的語は何か。古典の文章を理解する時には、適当に主語や述語を想定して考えよう。

二 「内裏にて見るはいとせばきほどにて」とあるが、なぜ「内裏にて見るは」とことわったのか。「いとせばき…」の主語は何か。また「ほど」という語に注意しよう。

三 「引き入られて」の「れ」はどういう意味か。古文を理解する時は、助動詞によく注意しよう。

四 「ひよ〳〵と」の擬声語は、現在ではどういうか。かなではこう書いてあるが、実際の発音はどうだったのであろう。ハ行の音は発音が変わってきていることを参考として考えよう。

五 序段「春はあけぼの」は、特に有名な文であるから、すでに読んだ人も多かろうが、その他の部分もできるだけ読み味わってみよう。そして随筆を書く参考としよう。

四 味読・朗読

われ〳〵が書物を読む目的は、知識を得るため、他人の意見を参考にするため、自分の考えをまとめるため、自分の経験しないことを書物を通して自分にとり入れるため、また文学作品などによって、自分の生活を豊かにするためなど、いろ〳〵ある。書物には、記録的なもの、藝術的なもの、研究的なもの、思想的なものなど、性質も多種多様であり、平易なもの、むずかしいもの、一見平易のようで、内容の深いもの、ことばの上では難解でも、内容の浅薄なものなど、難易の段階も種々ある。われ〳〵は、目的によって書物を選び、それ〳〵の書物に應ずる読み方をくふうするようにしなければならない。深い思想を持った書物にあい対して、その書物の著者の歩んだ思索の道すじを、自分もまた一歩一歩歩いてみるとか、すぐれた文学作品に対して、その世界にはいりこんで、そこに新しい美を感じとるとかいった場合には、われ〳〵は簡單に通読してすませることはできない。文章の一字一句もゆるがせにせず、自分の全精神を集中することが必要になってくる。そして、三読、四読、くり返し読むことによって、作者の眞意をつかむことができるのである。われ〳〵の社会生活においては、日常、読まなければならない新聞雑誌が多く、やゝもすれば、しっかりした内容を持った書物を、心ゆくまで味わうことの價値を忘れがちである。自分の能力に應じて、つとめて古典的價値の高いものを味わうようにしよう。

次に今日、書物は默読されるのが普通である。目と頭を働かせる読み方で、これは口を使い、耳を働かせることによって、かえって注意を分散させることのない点からも、推奨されるべきである。しかし、文学的な作品、ことに詩歌のように韻律を重んずるものは、これを音声化することによって、いっそう深く、樂しみ、味わうことができる。自分の読みとった作品の味を、朗読をくふうすることによって、他の人々にもたやすく理解させたり、樂しませたりすることができる。朗読はどこまでも、その作品の持つ味を、すなおに表わすようにしたい。

こゝには、文学作品として現代小説の一節、近代詩三編、世界的文豪との対話を翻訳したものの一節を載せた。十分に味読したい。小説や詩については、その朗読についてもくふうしてみよう。

〔一〕 も ず

志 賀 直 哉

そろ〳〵草のもえだすころで、柳堂はしりっぱしょりをして、ひとり、庭の草取りをやっていた。ぽか〳〵と朝の日を背中に受けながら、ぬれた地面から立つ土のかおりをかいでいると、いかにも心の落ち着くのをおぼえた。昨年は今ごろ坐骨神経痛でひどく悩まされた。ことしはこうして草取りなどができる。それを思うだけでも、非常な幸福に感じられた。

五、六年前、東京からこの沼べりへ引っ越して以來、かれは植えこみ以外の庭の手入れを、ほとんど植木屋の手を借りずにやってきた。いなかは氣らくだった。散歩などでいい木を見つけると、簡單

な交渉でそれを手に入れることができた。そして植えこんだ木が、一年一年他の木と折りあって行くのを見ることが、かれには一つの樂しみとなっていた。

「先生、ちょっといらしてごらんなさい。」

でしの今西が庭口から呼んだ。かれはどろだらけの手をはたくと、腰をのしながらそっちへ歩いて行った。

「もずとへびとがけんかをしているんです。」

「どこで。」

「物置の裏でやっています。」

ふたりは台所の前から湯殿をまわって、物置の裏へ行った。

くまざさの中でがさ〳〵と音を立てながら、もずがひとりであばれていた。しかしよく見ると、その首に、女の小指ほどの太さで銀色をした小さなへびが巻きついていた。へびが頭を上げると、もずはその頭を激しくくちばしで突いた。へびはもうだいぶ弱っていた。頭はすでに砕かれているが、それでも下からかま首を上げては、もずに食いつこうとした。

「これは地もぐりというへびだ。小さいがなか〳〵氣の強いやつで、ステッキなどを出すと、向かうやつだよ。」

「両方氣の強いやつだから、いい勝負ですな。」

「もうへびはだめだよ。取ってやれよ。何か棒のようなもので押さえてからでないとあぶない。」

もずはへびと戰いながら、人間の方も用心している。今西が小さい竹の棒を持って來ると、もずは

へびを首へ下げたまゝ、地面とすれ〳〵に飛んで逃げた。そして隣との境のやぶへ逃げこもうとすると、小松の下枝にへびのからだが触れ、もずはつんのめるようにそこへ落ちた。

今西はすぐ駆けて行って、へびのからだを押さえた。もずは口をあき、「かっ〳〵」というような音をさせた。「ばか。」今西はちょっとしゃくにさわって、あいた方の手で、もずの頭を打ったが、もずはすかさずその手を突いた。

「へびよりは人間の方が強敵だからな。」柳堂は立って見ていた。

「何かもう一つ竹を取っていたゞきます。」

柳堂はそのへんを見まわしたが、適当な竹がなかった。それで、はえた竹の枝を折った。

「どうだ、これでいいか。」

へびは二巻き巻いて一つ結んでいた。竹の先でほごすのはなか〳〵やっかいだった。

「死にかけていて、まだ締めてるです。」

「そのへびは植木に悪いことをするやつだから、離したら完全に殺してしまえよ。」

「もずはどうしましょう。」

「もずなんか飼ったってしかたがない。」

「おとりになりますがな。」

「生きえだからめんどうくさい。」

へびのからだが解けると、もずは非常な敏捷（しょう）さで逃げて行った。

「お礼もいわずに逃げて行ったね。」柳堂は笑った。

柳堂は庭先にあふれている井戸の水で手を洗うと、離れの画室にはいった。かれはにかわを火にかけながら、壁に立てかけた、かきかけのわく張りに目をやった。それはあした、ある絵の会の若い画家が取りに來るはずの絵だった。が、とてもきょうじゅうにはかきあげられそうもなかった。

妹のお種が、庭げたを鳴らしながら、茶道具を持って來た。

「どうだ、これは…。」柳堂はあごでちょっとその絵をさして言った。

「……。」お種は茶道具を持ったまゝ、しばらく立って、それを見ていた。

「あまりおもしろくないか。」

「そうでもありませんよ。しかし、どちらかといえばのんきな絵ね…。でも、いいことよ。おもしろいところがあってよ。」

「きょうじゅうにかきあげられないと困るのだ。」

「涌島（わくじま）さんが取りにいらっしゃるのは、あした。」

「あしただ。」

「潤筆料がもらえない絵だからなまけてるなんて思われるといけませんよ。」お種はひやかした。

「ばかなことを言え。これでもこの月かいたものではましな方だ。」

お種は柳堂がにかわなべをおろすのを待ち、火ばちの炭をついで帰って行った。

「きいいっ。きいいっ。」という小鳥の強い鳴き声がさっきから画室の裏でしていた。柳堂は便所へ

立ったついでに、裏の窓をあけて見た。裏は松山で、画室はこの松山の一部を切りくずして建てられたもので、その切りくずしたがけの途中に、実生(みしょう)の三年ほどたった小松がはえている。「きいいっ、きいいっ。」という声は、その中でしていた。まもなくその枝の一つが搖れだすと、そこにすゞめほどのいやにまん丸い小鳥が現われて來た。くちばしのぐあい、もずの子らしかった。小鳥はしきりにそのへんを見まわしながら、「きいいっ、きいいっ。」と、強い声で鳴き立てている。さっきのもずの子に違いないと柳堂は思った。へびはこの小鳥をねらったのかもしれない。

氣が氣でない不安そうな声で、しきりに母鳥を呼ぶ様子がいかにもかれんだった。長くなるはずの尾は、まだあまり伸びていず、それでも鳴くたびにぴくりぴくり動かしていた。

柳堂は今西を呼んではしごを持つて來させ、自分でその小鳥を捕らえた。静かに手をやると、小鳥は少しも恐れず、柳堂はやす〳〵それを掌中にすることができた。

前にカナリヤを飼ったことがあり、八角の大きな鳥かごがあったので、それへ入れてやった。

「かわいいのね。」

なんだって子供はみんなかわいいもんだよ。」

「いまにおまえさんも、いやにいばり散らして憎々しくなるのかねえ。」

「そりゃあ、しかたがない。そのころは逃がしてやるのだ。」

「それまで生きてるでしょうか。」

「こいつは子供だからすぐえにつくだろう。あんまり鳴かなくなったじゃないか。」

「おとなしくしてますわ。人間でもそばにいる方がたよりになるのかしら。」

「こりゃあ、鷭(ばん)よりもおもしろいよ。」

「第一、がらですわ。おにいさんになれるなんて、もずぐらいなものよ。」

柳堂は苦笑した。

「ひどいことを言いやがる。」

柳堂は興味を持ったものがあると、日に何度となくその前へ行って、飽きるまでは時間つぶしをする悪い癖があった。それを知っているお種は、

「きょう一日はお預かりしておきますからね。」と言って、それを持って行こうとした。

「ばか、子供みたようなことを言うな。仕事のあいまあいまに見て、氣を変えるんだ。」

「だめですよ。おにいさんのは、こだわりだすと、いつまでもこだわっていらっしゃるんだから。あした取りにいらして、できてないと悪いことよ。」

えはだいじょうぶつけてみせるということで、とう〳〵お種はそれをどこかへ隠してしまった。

もずの子が早く見たいからというわけでもなかったが、柳堂の仕事は珍しくはかどった。そして夕方、あかりのつくまでには、どうかこうかそれをしあげてしまった。

かれはひどくじょうきげんで、夜食のしたくのできた茶の間へはいって來ると、

「おい、こゝへもずを持って來い。」こんな調子に言った。

もずの子は柳堂によくなれた。かごは庭のえのきの枝に掛けてある。こっちから小さく切ったにわとりの肉を持って柳堂が行くと、もずの子は遠くからそれを見つけて、全身の毛をふくらまし、小さな羽を震わして喜んだ。

「こら、ばか、ばか。」

とがらしたはしの先にさした小さな肉を入れてやると、もずの子は少しもこわがらずにすぐ食った。柳堂は、「もずがこんなにかわいいものだと思わなかった。」など言った。

ある日、柳堂は東京へ行く用があって、一日家をあけた。そして翌日かれは寝過ごし、床の中で目をあくと、親もずらしい強い鳴き声が外でしているのを聞いた。親もずならいいが、ほかのもずがねらいに來ているのではないかしら、と思った。そして、かれは寝巻にたんぜんを着て、まぶしい外へ出て行った。

かごはいつものようにえのきの枝に下げてあったが、どうしたことか、柳堂が近づくともずの子はひどく驚いて、かごの中でばた〳〵騒いだ。

「どうした、どうした。」かれはそう言いながら引っ返してえを取って來た。櫻の木の高い枝で、親もずがけたゝましく鳴いていた。

もずの子は、かれのやろうとするにわとりの肉を食わなかった。そして、いちずに逃げようと中であばれている。

「お種、お種。」かれは大きな声でお種を呼んだ。お種は手をふきながら出て來た。

「きのう、ちゃんとえをやったか。」

「えゝ。」

「おかしいぜ。なんだか、すっかり野生にかえってしまってる。」

「きのうから親鳥が來て、えをつけだしたんです。」

「それでだな。どうもおかしいと思った。——あすこで鳴いている、あいつか。」

「そうね、きっとあれでしょう。」

「人間という恐ろしい動物だから、ゆだんをするなとでも敎えたかな。」

「ほんとうに。」お種は笑った。「いいかげんに逃がしてやる方がいいわね。」

「自分が助けられたことを忘れやがって、けしからんやつだ。」

「でも、自分の子供がこんなかごの中に入れられてるんですもの、心配なんでしょう。きのうから始終このへんに來て鳴いているのよ。逃がしてやる方がようござんすよ。」

「いや〳〵。もう少しこうして飼っててやる。」

もずの子は、それからもずっとなれなかった。柳堂もあきらめて、夜は軒下へ移すが、晝間は、少しぐらい雨の日でも、えのきの枝にかけっ放しにして、近ごろはえをやることさえやめてしまった。親鳥は絶えずえを運んでいた。子鳥が食う以上に運ぶので、それらはだん〳〵鳥かごの底にたまった。とかげの胴切りの、両方に一本ずつ足のあるやつなどが、幾つもあお向けになってはいっている。

「どうも、これがやりきれない。」

「だから、もう逃がしてやればいいのよ。」お種もまゆをしかめて言った。

「しかたがない、逃がしてやろう。」

親鳥が櫻の高い枝でしきりに鳴いている時だった。柳堂はかごの口をあけてやった。子鳥はいかにもおぼつかない飛び方で、親鳥のいる方へ飛んで行ったが、かさのような太行松の上まで來ると、そのかさの中へ沈んでしまった。櫻では親鳥が夢中になって鳴き立てた。子鳥も、鳴きながら、再び飛び立ったが、とうてい一度では親鳥の所まで行けなかった。そして無経驗から、自身の重みに堪えられないような細い枝の先にとまると、そのたびに落ちかけて、いたくろうばいした。

親鳥は子が近づくと、鳴きながら先へ行った。また來るとまた先へ行きして、とう〳〵どこかへ連れて行ってしまった。

（矢島柳堂）

研究

一　「もず」に対して、作中の人物が人間に対するような呼びかけをしたり、作者が人間に対するようなかき方をしたりしている点を指摘してみよう。

二　柳堂の「もず」を飼うことに対する氣持の移り行きを調べてみよう。

三　この文章の用語法について調べてみよう。たとえば、諸君は「腰をのす」「つんのめる」「ほどす」などを用いているか。「死にかけていて、まだ締めてるです。」のような「です」の、動詞へ接続して用いられる用法は、この会話でどういう役目をしているか、また標準語として認めていないか。

四　矢島柳堂の人がらについて読み味わってみよう。

〔三〕詩三編

わが國近代詩の先駆者、島崎藤村（明治五年―昭和十八年）、語感に豊かな天分を示した詩人、北原白秋（明治十八年―昭和十七年）、農民詩人として異色のあった宮沢賢治（明治二十九年―昭和八年）は、それぞれ明治、大正、昭和の詩壇に特異な存在を示した人たちである。

「千曲川旅情の歌」は、「落梅集」（明治三十三年）に収められたもので、同書では前段を「小諸なる古城のほとり」、後段を「千曲川旅情の歌」として、おの〳〵別の詩として掲げていた。後、藤村自身の手によって一つにまとめられ、「千曲川旅情の歌」とされた。

「からまつ」は詩集「水墨集」（大正十二年）に収められている。

「松の針」は、詩集「春と修羅」（大正十三年）の「無声慟哭」と題する、妹トシ子の死を歌った五編中の一つである。

千曲川旅情の歌

島崎藤村

一

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ
緑なすはこべはもえず
若草もしくによしなし
しろがねのふすまのをかべ

〔二〕 詩 三 編

日に溶けて淡雪流る

あたゝかき光はあれど
野に満つるかをりも知らず
浅くのみ春はかすみて
麦の色わづかに青し
旅人の群れはいくつか
畑中の道を急ぎぬ

暮れ行けば浅間も見えず
歌かなし佐久の草笛
千曲川いざよふ波の
岸近き宿にのぼりつ
濁り酒濁れる飲みて
草まくらしばし慰む

二

きのふまたかくてありけり

けふもまたかくてありなむ
この命なにをあくせく
あすをのみ思ひわづらふ

いくたびか栄枯の夢の
消え残る谷にくだりて
川波のいざよふ見れば
砂まじり水巻き帰る

あゝ古城なにをか語り
岸の波なにをか答ふ
いにし世を静かに思へ
百年（ももとせ）もきのふのごとし

千曲川やなぎかすみて
春浅く水流れたり
たゞひとり岩をめぐりて
この岸にうれひをつなぐ

四　味読・朗読

〔二〕詩三編

からまつ

北原白秋

一

からまつの林を過ぎて、
からまつをしみ〴〵と見き。
からまつはさびしかりけり。
旅行くはさびしかりけり。

二

からまつの林をいでて、
からまつの林に入りぬ。
からまつの林に入りて、
また細く道はつゞけり。

三

からまつの林の奥も
わが通る道はありけり。
霧雨（きりさめ）のかゝる道なり。
山風のかよふ道なり。

四

からまつの林の道は

われのみか、人も通ひぬ。
ほそ〴〵と通ふ道なり。
さび〳〵と急ぐ道なり。

五

からまつの林を過ぎて、
ゆゑしらず歩みひそめつ。
からまつはさびしかりけり。
からまつとさゝやきにけり。

六

からまつの林をいでて、
浅間嶺（あさまね）にけぶり立つ見つ。
浅間嶺にけぶり立つ見つ。
からまつのまたその上に。

七

からまつの林の雨は
さびしけどいよゝ靜けし。
かんこ鳥鳴けるのみなる。
からまつのぬるるのみなる。

八

世の中よ、あはれなりけり。
常なけどうれしかりけり。
山川に山がはの音、
からまつにからまつの風。

松の針

宮沢賢治

さっきのみぞれをとってきた
あのきれいな松のえだだよ
おゝ　おまえはまるでとびつくように
そのみどりの葉にあついほおをあてる
そんな植物性の青い針のなかに
はげしくほおを刺させることは
むさぼるようにさえすることは
どんなにみんなをおどろかすことか
そんなにまでおまえは林へ行きたかったのだ
おまえがあんなにねつに燃され
あせやいたみでもだえているとき

わたくしは日のてるところでたのしくはたらいたり
ほかのひとのことを考えながらぶら／＼森をあるいていた
《あゝいい　さっぱりした
まるで林のながさ來たよだ》
鳥のようにりすのように
おまえは林をしたっていた
どんなにわたくしがうらやましかったろう
あゝきょうのうちにとおくへさろうとするいもうとよ
ほんとうにおまえはたったひとりでいけるのか
わたくしにいっしょに行けとたのんでくれ
泣いてわたくしにそう言ってくれ
おまえのほおの　けれども
なんというきょうのうつくしさよ
わたくしは緑のかやのうえにも
この新鮮な松のえだをおこう
いまにしずくもおちるだろうし
そら
さわやかな

turpentine（ターペンタイン） のにおいもするだろう

研究

一　この三つの詩に現われた作者の心持やその表現のしかたの似たところ、違ったところについて味わってみよう。

二　季節はそれぞれいつか。

三　三編の詩の形式について、比較して味わおう。

四　藤村の「千曲川のスケッチ」を読んで、「千曲川旅情の歌」の詩を生み出した藤村の生活について調べよう。

五　白秋の詩において「しみじみと」「ほそぼそと」「さびさびと」といった副詞、「さびしかりけり」「あはれなりけり」、「うれしかりけり」といった句の用い方、また脚韻をふみ、くり返しを盛んに使っていることの効果について話しあおう。

六　宮沢賢治の詩において、作者の想像した部分と実際にあった部分とを区別しよう。

七　この三編の詩の中から、自分の最も氣にいった詩を選んで、その詩についての感想をまとめてみよう。

八　明治以來の、いわゆる近代詩の変遷を明らかにして、この三人の文学史上の位置について調べてみよう。

九　これらの詩の朗読について研究しよう。

〔三〕 美の発見と創造

エッケルマン

エッケルマン（一七九二—一八五四）は、ドイツの大文豪ゲーテ（一七四九—一八三二）の晩年、その忠実な秘書となって働いた。「ゲーテ全集」のために、ゲーテの旧稿を整理し、「ゲーテとの対話」を著わして知られている。「ゲーテとの対話」の記録は、エッケルマン以外にも数種あるが、ゲーテの信頼を受けたエッケルマンのものが、最も生彩があり、ほとんどこの題名を独占していると言っていい。この書は、ゲーテの多くの書翰（かん）集・記録とともに、文豪の理解に欠くことのできない貴重な文献とされている。

一八二七年四月十八日　水曜

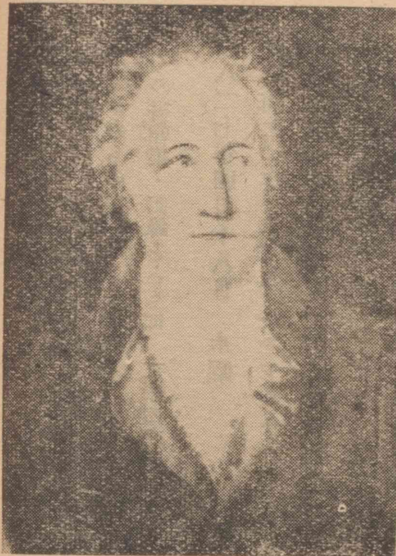
食事前に、ゲーテと、エルフルトへ行く街路を少しばかり馬車で散策した。いろんな荷車がライプチヒの大市へ荷物を積んで行くのに出会った。また馬の列に二、三出会ったが、中には非常にいいのがいた。「私は美学者連がおかしくてならない。」と、ゲーテは言った。「かれらは、われわれがすでに美ということばで呼んでいる言い表わしがたいものを、二、三の抽象的なことばを使って一つの概念に作りあげようとして苦しんでいる。美は根本現象である。それ自身は現われないが、その反映は無数の雑多な創造的精神の発現の中に見られる。そして自然そのもののごとくに多種多様である。」

「こういう説をたびたび聞きました。」と、私は言った。「自然は常に美しい。藝術家を絶望させる。完全に自然に到達しうることがまれだからと。」

ゲーテは答えた。「しばしば自然が到達しがたい魅力を表わすことは、よく知っている。しかし私は、自然のいっさいの発現が美しいとは、決して考えない。自然の意向は常に善ではあるが、自然の意向を常に完全に発現させるのに必要な條件が備わりがたい。

だから、かしは非常に美しくなりうる樹木ではあろうが、非常に多くの好都合な事情がそろわねば、自然は眞に美しいかしを作り出すことができないだろう。かしが森の茂みの中で、大樹に囲まれて成

長したら、次第に空を求め、次第に自由な空氣と光とを求めて行くだろう。側面にはわずかの弱い枝を出すだけで、こういう枝も百年もたてばしおれて落ちてしまうだろう。しかし、ついにこずえが大空に達すると、安心して、それから側面に枝を張り、樹冠を作りはじめるだろう。しかし、この時すでに中年を過ぎ、上をめがけた多年の努力のため、その最もはつらつたる力を使い果たしている。これから横へ大いに廣がろうとする努力は、もはやさして成功しないだろう。りっぱに成長したら、高く、強く、まっすぐになるだろう、が、眞に美しくなるための樹冠と幹との間のあゝいうつりあいを持たないで終るだろう。



ゲーテ

更に、かしが濕った沼地にはえ、土地が肥沃(よく)に過ぎ、ゆとりが十分あると、早くから多くの枝を四方へ張る。しかし、抵抗し、阻害する作用が不足しよう。節のあるところ、がんこなところ、とがりなどは発達しまい。そして遠くから見ると弱々しい、ぼだい樹めいた姿をして、美しくあるまい。少なくともかしとしての美しさがないだろう。

最後に、がけの、乾燥した石の多い所にはえたら、過度にぎざ〱があり、節くれだった姿になろう。が、のび〱として育たず早くから成長を妨げられるだろう。そして『その木の中には、われらを驚嘆させるものが支配している。』と言えるまでにはいたらないだろう。」

私はこの有益なことばを喜んだ。私は言った。「数年前たま〱ゲッティンゲンからウェゼルの谷に小旅行をした時、非常に美しいかしを見ました。特にヘックステル附近のゾルリンクで、堂々としたのを見ました。」

「砂地、または砂の交った土地は、」と、ゲーテは続けた。「どちらへでも元氣な根を廣げることができ、かしの木に一番いいようだ。また光と太陽と、雨と風とを四方から受けるだけの、相当な余地のある場所が必要である。雨と天候とから容易に守られて成長すると、つまらない木になる。が、自然力と百年も戦うと強く堂々たるものになって、完全に成長すれば、驚くばかりの姿になる。」

「あなたのお話から、」と、私は言った。「結論を引き出してこう言ったらどうでしょう。『生物の美しさは、その自然的発達の頂点に達した時にある。』と。」

「いかにもそうだ。」と、ゲーテは答えた。「しかしその前に、自然的発達の頂点の意味を述べておかねばなるまい。」

「私はその意味を、」と、私は答えた。「各生物独得の特性が完全明白に現われる時期にとろうと思います。」

「その說に、」と、ゲーテは答えた。「異論はあるまい。それにこうつけ加えたら、特に。『そういう特性が完全に発達するには、同時に一生物のさま〱な部分の骨組みがその自然的定命に適合することが、つまり合目的なることが必要である、』と。

さっき、出会った乗馬のうちの数頭を美しいというのは、まさしくその骨格の合目的なるがためで

はないか。單に動作が上品で軽快で優雅なだけでなく、なおその上に、巧みな騎者や専門家しか知らないような、われ〳〵が單に漠然としか感じないような、多くの長所があったろう。」

私は言った。「さっき、ブラバンの馭者の荷車を、数頭の非常にじょうぶな駄馬が引いているのに会いました。あゝいうものも美しいと言えないでしょうか。」

「全くだ。」ゲーテは答えた。「もちろんだ。おそらく画家は、上品な乗馬のやさしい似よった特性よりは、そういう馬車馬のきわだった特性、すなわち骨や腱や筋肉などの活氣の方に、さま〲な美のはるかに多様な現われを見つけるだろう。」

「結局主要点は、」と、ゲーテは続けた。「種が純粋で、人間が手を加えて不具にしていないことだ。尾とたてがみとを切られた馬とか、耳を切られた犬とか、強大な枝を切り、残りを丸く刻んだ樹木とか、こういういっさいのものは、善良な趣味に反し、單に俗人の化粧問答に載りそうなものだ。」

こういう話をしながら、われ〳〵は帰った。食事の前にも少し庭の中を歩いた。天氣は非常によかった。春の太陽は強くなりはじめ、茂みやかきねにもいろ〳〵な葉や花を誘い出していた。

私が帰りじたくをした時、かれはも少しいてくれと言った。かれはオランダ画家の銅版画とエッチングとのはいった紙ばさみを持参させた。

「食後に、」かれは言った。「きみにいいものをお目にかけよう。」こう言って、かれは私の前にルーベンスの風景を一枚廣げた。

「きみは、」と、かれは言った。「この絵を私のところですでに見ているが、傑作は幾度見ても飽かない。しかも今度はまるで変わった問題がある。きみの見るところを話してみたまえ。」

「遠景から始めますと、」私は言った。「ずっと後方に、ちょうど日没のあとのような非常に明かるい空が見えます。同時にまたずっと遠方に、夕日を浴びた一つの村と一つの町とがあり、次に絵の中央の道路の上を羊の群れが村の方へ急いでおり、絵の右方にいろんな干し草の堆積と、今荷をいっぱいに積んだばかりの車が一つ。馬具をつけた馬が附近で草を食っている。更にかたわらの茂みの中にはたくさんの牝馬がちらばって、子馬とともに草を食っている。この様子では、戸外で夜を過ごすようである。それから、もっと前景の方には、大樹の一群れがあり、最後に、ずっと前景の左側には、いろんな労働者が家路をたどっています。」

「よろしい。」と、ゲーテは言った。「それですっかりだろう。が、まだたいせつなものが欠けている。家畜の群れ、枯れ草を積んだ車、馬、家路をたどっている百姓、これが画面に出ている全部である。どちらから光を受けているか。」

「われ〳〵の方から光を受けて、」と、私は言った。「絵の中の方へ影を投げています。特に前景の家路をたどっている百姓たちは非常に明かるい光線を受け、それがすてきな味わいを出しています。」

「しかし、ルーベンスはこの美しい味わいをどうして出しているか。」

私は答えた。「暗い背景にこの明かるい人物を表わしているからです。」

「しかしこの暗い背景は、」とゲーテは答えた。「どうしてできているか。」

「それは、」と、私は言った。「木の群れが人物の方へ投げている強大な影です。――が、おや。」と、私は驚いて続けた。「人物は絵の中の方へ影を投げ、木の群れは反対にわれ〳〵の方へ影を投げ

ています。反対の両方面から光がさしているではありませんか、全く不自然ではありませんか。」

「そこが問題だ。」と、ゲーテは微笑しながら答えた。「ルーベンスが偉大さを発揮し、かれが自由な精神をもって自然を超越し、自分のより高い目的にかなうように自然を使って見せるのはそこだ。二つの光線は確かに乱暴だ。またきみが不自然だと言うのももっともだ。しかし、不自然なら、私は言いたい、それは同時に自然以上だ。それは、藝術は必ずしも自然の法則に従わない、藝術自身の法則を持っているということを、天才的に示す巨匠の大胆な筆法だ。」

「藝術家は、」と、ゲーテは続けた。「むろん、自然を微細にわたって忠実にすなおに模写しなければならない。動物の骨格や、腱と筋肉との位置を勝手に変えてはならぬ。変えたら眞の特性がそこなわれよう。それは自然を破壊することになるからだ。しかし、絵を眞の絵たらしむる美術的手法の高尙な境は、藝術家の自由だ。こうなると更に、ルーベンスがこの二つの光線を使ってやったように、作爲にまで進んでいい。

藝術家は自然に対して二種の態度をとる。かれは支配者であると同時に下僕である。理解されんがために現世的な手段をもって働く、その限りにおいては下僕だ。しかしこの現世的手段をかれのより高い意向に隷属させ、服従させる、その限りにおいて支配者だ。

藝術家は世の人に一つの全体を通じて語ろうとする。しかし、この全体は自然の中に発見されない。藝術家自身の精神が作り出すものだ、あるいは豊かなる神の呼吸のそよぎの作り出すものと言ってもよかろう。

このルーベンスの風景を一見すると、いっさい自然的で、あたかも直接自然を模写したもののように思われる。しかし、事実はそうでない。こういう美しい絵は決して自然の中に見られない。プーサンやクロオード＝ロレンの風景も同様だ。非常に自然的には見えるが、同様に現実の中には求められない。」

「総じて、」と、ゲーテは続けた。「われ〳〵は画家の筆をそう細かにほじくってはならない。むしろ、大胆な自由な精神をもって作られた藝術品を、またできる限りそういう精神で観照し味わうべきだ。」

（ゲーテとの対話—亀尾英四郎訳）

研　究

一　「われ〳〵がすでに美ということばで呼んでいる言い表わしがたいものを、二、三の抽象的なことばを使って一つの概念に作りあげようとして苦しんでいる。」とはどういうことか、「すでに」とか「苦しんで」とかいうことばに注意して考えてみよう。「美」の定義を辞典などによって調べてみよう。

二　「美は根本現象である。それ自身は現われないが、その反映は無数の雑多な創造的精神の発見の中に見られる。」とはどういうことか、具体的に考えてみよう。

三　「自然の意向は常に善である」とはどういうことか。

四　自然の意向を完全に発現させるのに必要な條件を、ゲーテのあげているかしの例について、まとめてみよう。

五　ゲーテは「かしとしての美しさ」を、どう見ているか。

六　「雨と天候とから容易に守られて成長するとつまらない木になる。」とはどういうことか。

七　「一生物のさま〴〵な部分の骨組みが、合目的なること」とはどういうことか。魚の形態や、

動物の四肢が、その住む場所に應じて違い、それぞれに美しさを持っていることなどを参考にして話しあってみよう。

八　ゲーテの考えていた自然の美について、まとめてみよう。

九　荷車を引くじょうぶな駄馬の美しさは、どこにあると言っているか。

十　「善良な趣味に反し、單に俗人の化粧問答に載りそうなもの」とゲーテに言われそうな、具体的な例が、現代人の生活の中に見いだされないか。実例について話しあってみよう。

十一　「まだたいせつなものが欠けている。」とゲーテの言っているのは何か。あとをよく読んで考えてみよう。

十二　エッケルマンは、なぜ「――が、おや。」と驚いたのか。

十三　「ルーベンスが偉大さを発揮し、かれが自由な精神をもって自然を超越し、自分のより高い目的にかなうように自然を使って見せるのはそこだ。」とはどういうことか。

十四　「藝術は必ずしも自然の法則に従わない。藝術自身の法則を持っている。」ということを、この文の前後をよく読んで説明してみよう。

十五　ゲーテは藝術家の作爲をどういう点から認めているのか。

十六　藝術家が自然に対して「支配者」であり、「下僕」であるという意味を説明してみよう。

十七　自然の美と、藝術の美との関係、およびその相違点を、ゲーテは、どう考えていたか。

十八　この対話をよく読んで、感想を書いてみよう。

五　研　究

研究の目的は、いろ〳〵な疑問を解決し、それによって生活を改善して行くことにある。人類文化の向上はひとえに、人類が、その生活の必要を満足させ、生活を豊かにするために努力してきた長期にわたる研究のたまものと言わなければならない。しかし、人の解決すべき問題は無限に続いており、一つの問題を解決すれば、更に新しい問題か起ってくる。かくて人類の進歩は無限に約束されていると言っていい。

問題によっては、すでに人が研究し盡くしたもので、いくら努力しても、それに何も附加することのできないものがある。それでも、その問題をほんとうに理解するためには、やはり、自分ではじめから研究してみることが必要であって、決して從來の結果をうのみにしてはいけない。過去の研究の結果は、どこまでも重んじ、これを利用しなければならないが、そのために自主的な態度を失うようなことは、大いに警戒すべきである。

また、問題によっては、自分ひとりの力では研究を進めることの困難なものがある。共同研究によらなければできないものがある。図書館・博物館を利用する必要もあろう。父兄や先生の援助を受けたり、友人や兄弟と力を合わせて研究を進める必要もあろう。

研究は、知りたいという人間の本能に根ざす活動ではあるが、たゞ、そのおり〳〵の興味にまかせて、正しい方法や順序を顧みないと、所期の目的を達しえないことになり、ま

して、社会人類の幸福を増進させることなど思いもよらないものとなってしまう。学問の進歩に伴なって、研究の方法や順序について吟味するようになった。さもなければ、研究の結果を信用することができなくなるからである。われ〳〵は、自分の疑問を、どうとりあげて問題とし、どのような方法をもって、その解決に進むべきか、注意深く考えてみることがたいせつである。

こゝには、あらゆる研究に有力な参考となる百科事典や辞書について解説したもの、新しい表現方法の発生に関する研究論文を載せて、研究のしかたや、論文の書き方の参考にし、また、古代の和歌を抜き出して、研究材料にあてた。これを機会に、レポートの書き方や、発表のしかたなどをも考えてみよう。

〔一〕事彙辞書の話

松本賢治

あることがらについて調べようとする時、それが自分のよく知らぬものである場合には、どのような順序でいかなる書物を参考とすべきか。もちろん、ことがらの性質内容によって、順序は同じでないが、図書館を利用する場合には、次のようなやり方が時間の経済ともなり、また目的を達成する上にも好都合である。それは、

第一、まず一般的な百科事彙について該当の箇所を調べる。できるだけ発行の新しい、そして省略のないものを用いるのがよい。

第二、特殊の事彙・辞書および参考図書を調べる。参考図書とは、たとえば年鑑・統計書・人名辞典・地名辞典・旅行案内・地図書などのごとく瞬時的参照に役立つものをいう。

第三、次にカード目録により、主題に関係のある書物をさがし、雑誌の索引によって比較的に新しい調査・研究の報告をさがす。

第四、書物の終りに載せてある索引に当たって、適当な箇所を調べる。

第五、パンフレット・切り抜き・写眞帳などのつゞりこみがあれば、その中をさがしてみる。

以上のような手順によって進めて行くのであるが、中でも第一の百科事彙、第二の各科事彙、辞書の利用は特に重要である。

百科事彙は、百科辞典・百科辞書とも呼ばれ、「総合的教養」を意味するギリシア語から作られた語であって、あらゆる知識を総合的に理解させようとするものである。近代的な意味での百科事彙は、少なくも十八世紀の中葉、フランスのディドロ・ダランベールなどの画期的な出版、すなわち大百科辞典刊行以後のことである。

フランスのアンシクロペディ以後、百科事彙の編纂には多数の学者が協力し、巻数が増大することとなったため、その刊行にはばくだいな資本が必要となったから、大規模なものは多く出版書肆の名をもって呼ばれるのが通例となった。フランスのラルース、ドイツのマイエル・ブロックハウスなどはその例である。このほか現時最も行われている世界的な百科事彙としては、イギリスに、單にブリタニカと呼ばれて知られている大英百科事彙、アメリカにアメリカ百科事彙、新万國百科事彙などがあり、ソヴィエト・イタリア・スウェーデン・ノルウェー・スペイン・ハンガリーなどにも著名な百科

事彙がある。

わが國では、芳賀矢一・下田次郎「日本家庭百科事彙」（明治三十九年）、三省堂「日本百科大辞典」十巻（明治四十一年—大正八年）、冨山房「國民百科大辞典」十五巻および別巻（昭和九年以降）、平凡社「大百科事典」二十八巻（昭和六年—十年）などがある。

百科事彙の利用について最も注意せねばならぬことが二つある。一つはできるだけ新しくできたものを選べということである。傳記とか、ある部分の歴史に関する知識については、その項目がいつ書かれたかということはさほど重要でないが、自然科学や時事問題についてはそうでない。標題紙の裏（わが國のものは奥付）にしるしてある刊行年を必ず調べなくてはならない。代表的な百科事彙ではしば〳〵増訂版を出すのが普通で、中には別に補遺・年鑑を出版しているものもある。第二は権威ある内容のものを選べということである。各項目について最もすぐれた専門家が執筆しているかどうか、編集者が全項目にわたって周到な考慮を拂い、読者の利用を容易ならしめるような排列をとっているかどうかが重要である。執筆者の地位・氏名は、普通第一巻または各巻の巻頭に掲げられているから、その表を吟味すれば、この事彙が権威あり信頼に値するものかどうかということがわかる。その他、項目の排列法に注意し（凡例、序文等を参照）、交叉参照・索引の利用は怠ってはならない。

事彙は、各方面の学術技藝について専門的知識を総合して理解させるためにつくられるもので、百科事彙が「百科」の意味するごとく一般にわたるのに対し、特殊的な範囲を扱っている。その性質上、一般百科と共通なものが多い。歴史も古く、かつその体裁も多くは五十音順またはアルファベット順排列を用いている。各科に専門の事彙があり、たとえば哲学辞典・理化学辞典・動物学辞典・文藝辞典などがそれである。これらは「辞典」となっているが、実は言語の知識を與える語学辞典ではなく、その言語によって示されることがらの知識を傳えるものであるから、正確には「事彙」「事典」と書くべきであるが、形式上、語学辞典と同様にアルファベットまたは五十音順の排列を用いているために、混同して用いられる。しかし内容からは明らかに区別さるべきであるから、こゝでは、固有の書名に「辞典」とある場合のほかは、注意して「事典」と「辞典」を使い分けることとする。各科の学習・研究に当たって「事彙」を利用することは、最も能率的な、賢明なやり方である。たとえば、ペスタロッチについて知ろうとする時、ペスタロッチの著書・論文やペスタロッチについて書かれたものを調べることは必要ではあるが、特に深く研究する場合を除けば、教育学事典について、きわめて短時間に必要な知識を得ることができる。その生涯・業績・時代的背景はもとより、その学説の大要、教育思想および教育の実際に及ぼした影響などはきわめて要領を得た敍述が與えられている。一般にわれわれの必要とする知識や技術を取り扱った文献はきわめて多数にあって、まずその取捨選択に迷うことが多いのみならず、中には権威ある信頼すべきものもあるとともに、はなはだ内容のそまつなものも少なくない。良書が幸いにして入手できたとしても、これによって必要な知識を求めることは多大な労力と時間を要し、時機に必要な問題の解決にはきわめて不便である。事彙はこの点において一般図書の短を補うもので、瞬時的参照に資するという本來の目的から、その利用については周到なくふうと努力を用いている。たとえば、邦語および欧語による索引、系統的分類索引・年表・地図等が巻末に、または別巻となって発行されている。

索引が事彙において占める役割は非常に重いものであって、あたかも雑誌の索引と同様であり、図

書館のカード目録にも等しい意義を持つ。索引の價値は、これを利用することを知るもののみが知っている。單行本でも西洋のものには、それが学術書であれば、必ずともいってよいほどに索引を附してあるのが普通である。わが國ではまだこの慣習が一般的になっていないのであって、著者・出版者の協力により必ず索引をつけるようにしたいものである。交叉参照も重要であって、ある項目について述べられねばならぬことがらが他の項目の中に含まれていることを示すのであるから、煩をいとわずその箇所を参照すべきである。

事彙の利用についていま一つ重要なことは、そこには代表的な参考文献があげられているということである。前にも触れたように、多数の文献のある中で、何が最も標準的な、古典的なものであるかということは、相当な専門家でないとすぐはわからない。權威ある執筆者によってとりあげられた文献は、必ずなんらかの意味においてすぐれた價値を持つものである。かくて今後の研究・調査に当たって、何を参考にすべきかというだいたいの目やすが事彙によって與えられることとなる。次に、個人の編纂になるものと多くの執筆者の協力によるものとはどちらがよいかという問題があるが、百科事彙よりも小規模なものであるために、一概に個人の独力編纂になるものが劣っているとはいえない。もっとも、個人がひとりで全部を書いた場合でも、必ず他の類書を参考にしているのが普通であるから、嚴密には独力執筆とはいえないが、ひとりのすぐれた精神と判断力によって統一ある敍述を試みたものには、りっぱな特色を持つものが少なくない。

辞書は言語に関する百般の知識を収めたもので、語彙の排列がアルファベット順、または五十音順になっている点は、百科事彙・各科事彙と共通であり、瞬時的参照のために役立つという点も共通であるから、しば〳〵事彙と混同されやすいことは前に述べた。しかし、辞書の方は言語についての解決をおもな目的とするから、その説明は短文でかつ項目も多く、これに反して百科事彙・各科事彙は項目は少ないがその説明は長い。もっとも例外はある。後にのべるエヌーイーーディーのごときは、一語について多数のページを用いている場合が少なくない。

およそ語学の学習において辞書の意義は決定的であり、辞書の使用を怠る人は決して上達しないといっても過言ではない。辞書に親しみ、しかも權威ある大型の辞書を用いることは、どうしても語学に志す者の忘れてはならぬ鉄則である。辞書はどのような目的のために、どのような内容をもって、つくられているか。それらを説明するとともに、辞書の発達についても簡單に述べておくことにしよう。

言語が思想の発表、交換の最大の道具であって、社会生活上きわめて重要なことはいうまでもなく、したがって言語に関する知識を與える辞書の歴史は古い。しかしその発達のはじめは、難語・難言を集めてこれを解決するという不完全な語彙・語集であったが、後、次第に收録の範囲が大きくなって、それとともにまた、語詞文字の解釈以外に事項の説明をも加えるようになり、辞書の目的が多方面に分化して、一般的なもののほか、発音辞書・語源辞書・熟語成句辞書・引用語辞書・同義語反義語辞書などの専門特殊な辞書を生み、更にまた、特定の知識領域に関しては各科事彙、一般的な知識の説明をなす百科事彙・地名辞書・人名辞書・故事俚言辞書などをつくり出すこととなった。すなわち事彙と辞書とは、その起源においてもと同一であったものが次第に分化発達してそれ〴〵異なる方向に

進んだものである。

西洋における辞書については、まず英語辞書の鼻祖と目されるサミエル＝ジョンソンの英語辞典をあげねばならぬ。それはしかし、まだ難語解釈時代の色彩を抜けきったものではない。次に十九世紀の中葉、ドイツのグリム兄弟によって編纂されたドイツ語辞典は、「現代語と廃語とを問わず、いっさいの記録たるべき」ことを主眼としたもので、その大規模にして完全なる点に新しい時期を画した。よき語もあしき語もすべてを収集し排列すべきだという考え方は、このころから起った。あたかもこの傾向にうながされて世界最大の辞書が刊行されることとなる。それはオックスフォード大辞典、ニューイングリッシューディクショナリを略して、エヌーイーーディーと呼ばれるものである。エヌーイーーディーを簡約したコンサイスーオックスフォード辞典は、ファウラー兄弟の手になり、一般的な英語辞書として典型的な権威書である。かくて辞書の編纂は多数の学者の共同労作を必要とする段階にはいり、著名なザーセンチュリーーディクショナリ、ニューースタンダードーディクショナリ、ウェブスターズーインターナショナルーディクショナリなどはその代表的なものである。

わが國における近代的な國語辞典は、大槻文彦の「言海」に始まる。明治二十四年四月の刊行で、体裁を英語辞書にとり、辞書としての必要條件を備えた画期的なものであり、その後の國語辞典の模範となった。その後、大小の國語辞典が多数編纂された。

（学校図書館）

研究

一　自分たちの学校図書館にどんな百科事典、特殊の事典、および辞書があるか調べてみよう。

二　百科事彙を利用する場合、できるだけ、新しくできたものを選べということであるが、特に自然科学や時事問題については、その項目がいつ書かれたかが重要であるという理由を述べよ。

三　事彙を使用する際に、凡例や序文などをよく注意し、交叉参照や索引の利用を怠ってはならないのは、なぜか。

四　事彙は、一般図書の、どういう短所を補う目的で作られているか。なお、その目的にいっそうよくかなうよう、どんなくふうがしてあるか。

五　学術書には、特に索引をつけることが望まれるのは、どういうわけか。

六　百科事彙、事彙および辞書の発達の歴史、著名な事典、辞書の名称、その内容などについて更に研究してみよう。そのために事彙・辞書および参考となりそうな一般の図書を参照しよう。

七　学校図書館が、能率的に利用されるようにするためには、整理カードを完備しなければならない。整理カードの作り方に、どういうのがあるか、調べてみよう。

八　何か題目を選んで事彙辞書によって研究をまとめてみよう。

〔二〕 切符の切らないかた

橋本進吉

ずっと以前から、東京都電の車掌のことばに、切符の切らないかたはありませんか。

という言い方が一般に行われて、人々の間に問題となっていた。

私は、右の車掌のことばは比較的簡單に説明できるものと思うのである。今かりに私が車掌になったとして、右のような場合に自分のことばで言うとしたら、なんと言うであろうか。

切符を切らないかたはありませんか。

これでよい。「私が切符をまだ切らない人はないか。」という意味を右のように言うのは、正しい日本語の表現である。しかし、こゝに少し難がないではない。「切符を切らないかた」という言い方は、乗客が切符を切らない場合にも用いられる。どちらかというと、右のような言い方は、そんな意味に解すべき場合の方がむしろ多い。もちろん乗客が切符を切るなどということは、実際ないことであるゆえ、誤ってそういう意味に解したとしても、なお一度考えてみれば、正しい意味はすぐわかるけれども、この言い方は、それ自身として右のような二様の解釈が可能であって、一時誤解をきたすか、または変に感ぜられるおそれがないでもない。

そこでもっと違った言い方がないかと考えると、

切符の切ってないかたはありませんか。

というのがある。これも正常な日本語であって、だれが切ったかを問わず、結果として、その人の切符が切られている場合は「切符の切ってあるかた」であり、そうでない場合は「切符の切ってないかた」である。もちろんこれではだれが切符を切るかは示されていないが、車掌が切ることはわかりきったこととして、わざわざ言わないですませてもよい。そうして、この言い方ならば、明白に一義的であって、他の解釈を許さず、誤解をきたすおそれはない。

それではこの言い方を用いればよさそうであるが、これにも難がある。これを大きな声で呼んでみると発音しにくいところがある。それは、

四音節	八音節	六音節
キップノ	キッテナイカタハ	アリマセンカ

と三段に分かれて、中段が長すぎるからである。呼びにくいということは、車掌用語としてはずいぶん重大な欠点であって、この言い方も万全なものでなく、これに安んずることができない。

これと比べて、前にあげた

切符を切らないかたはありませんか。

は、音の続きも長すぎず（三段で、四音節・七音節・六音節となっている。）、口調もなだらかであって、大声で呼ぶにはまことに都合がよい。しかし、前に言ったように、「切符を切らない」という言い方に誤解を生ずる懸念があって、そのまゝ用いるのは躊躇（ちゅうちょ）せられる。

かように上述の二つの言い方

(1) 切符を切らないかたはありませんか。

(2) 切符の切ってないかたはありませんか。

は、どちらも正しい言い方で、どちらを用いてもよいのであるが、車掌の用語としては、それぞれ長所と短所とがあって、そのまゝは用いにくい。ところが、この二つは、意味がだいたい同じであるばかりでなく、語句も非常によく類似し、たゞ二箇所においてそれぞれ一音の相違があるだけで（「切符を」と「切符の」、および「切らない」と「切ってない」）、互に連想しやすく、一方からすぐに他のものを想起させる性質のものである。そこでこの二つの言い方を同時に思い浮かべて、双方からそれぞれ適当な部分を取って一つにし、一方の短所を他方の長所によって補ったのが、問題の

切符の切らないかたはありませんか。

であろうと思う。すなわち、口調がなめらかで発音に都合がよい点から、(1)の言い方を取ろうとした

が、「切符を切らない」の部分が意味のめいりょうを欠くおそれがあるところから、おのずから不安を感じ、意味および形の類似から、自然にこれとともに思い浮かぶ(2)の言い方から、最初の「切符の」を取って最初に置き、以下は(1)の言い方にしたがい、かようにして、誤解のおそれもなく、口調もよい「切符の切らないかた」という新しい言い方ができたのであろう。

以上の私の説明は、この表現の発生過程をあまりに有意的なものとし、あまり論理的に取り扱ったきらいがあるのであって、実際はさほど明らかな自覚はなく、むしろ直感的な感じによって行われたであろうが、とにかく、世間普通に行われ、だれにでもわかる(1)・(2)のごとき表現があるにもかゝわらず、それがそのまゝ用いられず、それとはいくぶん違った、多少不自然の感じさえ伴なう表現が新たにできたのは、単なる偶然の結果と見るべきでなく、上にあげた世間普通に用いられる二つの表現に対する價値判断と、これにもとづく取捨選択とが暗々裡に行われたものとしなければならない。

私は問題の「切符の切らないかた」を、「切符を切らないかた」と「切符の切ってないかた」との二つの表現が混合してできたものと説明した。それは、つまり言語学にいう混淆の一事例としてこれを解釈したことになるのである。

混淆とは、意味が類似し、形においてもあい通ずるところのある二つの語、または表現が混合して、双方から一部分ずつを取ってこれを一つにした新たな語または表現の生ずることをいうのであって、新語や新表現発生の一原因をなすものである。これは談話、ことに不注意な談話にはしば〳〵現われる現象であって、多くの場合にはその場だけのものとして消失するのが常であるが、時には一般に取り上げられて、言語変化を生ぜしめることがあるものである。混淆については西洋の言語学書にはたいがいその名が見え、種々の実例があげられているが、これは個々の語や、文法上の諸形式や、種々の表現形式の史的研究が進展して、その歴史を明らかにした上でなければ的確な判断をくだしがたいものであるゆえ、國語の例として確実なものはあまりあげることはできないが、一例をあげれば、「とらえる」は、今も用いられる語であるが、「とらえる」と「つかまえる」とが混淆して、「とらまえる」となったのである。「とらまえた」という語は、天草本伊曾保物語に見え、「つかまえ」という語は、すでに平安朝初期のものに現われている。かように混淆という現象は、実際の言語にはしばしば起るものであるから、かの「切符の切らないかた」も、他の方法によって満足すべき解決が得られない以上は、混淆によって生じたものと解するのが最も自然な解明であると信ずる。

以上の私の説がさいわいに当を得たものであるとするならば、かような解釈にもとづいて、「切符の切らないかた」という言い方を文法上いかに説明すべきかということが問題になる。

まず「切符の」の「の」の取り扱い方であるが、この「の」は、「切らない」にかゝって行くのであって、もしこれに「を」の意味があると見ることができれば、一應の説明はできるのである。旧來の文法家や國語解釈家ならば、「を」の意味の「の」とか、「を」にかわる「の」とか説明したであろう。しかし、「の」を「を」の意味に用いることはこのほかに例がない上に、この「切符の」は元來「切符の切ってないかた」という言い方にもとづいたもので、「の」は「切ってない」に対する主語を導くものであったのである。それでは、主語を導くものとすべきかというに、「切らない」という動詞に連続しているのであって、さような場合には、文法上「切符が何かを切らない」意味に解するほかなく、それでは事実に違うこととなる。そうして、この「切らない」は、本來「切符を切らない

という言い方から出たもので、「を」を受けるべきものであったのである。かように、この「の」は、「を」と解することもできず、主語を導くものとするのも不穏当である。

それでは、「切らない」に対して何か説明のしようはあるまいか。前に私の推測したところによれば、「切符の切らないかた」の「切符の」は「切符の切ってないかた」という言い方から出たものである。さすれば、「切らない」に「切ってない」という意味があるとか、または「切らない」は「切ってない」の省略であるとか説明することはできまいか。実際、この種の説明法は、旧來の文法家や解釈家にはしば〳〵用いられたものである。しかしながら、これ以外の場合には「切らない」と「切ってない」との間に画然たる区別があって、一をもって他にかえることは許されない。それをこの場合にだけ同一視することは、不合理であるのみならず、またわれ〳〵の言語意識にも合致しない。もし右の言い方がわれ〳〵の言語意識から見て自然なものであるならば、それが世間の人々の間にあのように問題となることはなかったであろう。また「切らない」と「切ってない」とは、たゞ「て」の音一つの相違にすぎないが、この一音の有無によって、両者の意味の相違が示されているのであるから、それは言語としてはきわめてたいせつなものである。それを省略するなどいうことは、ほとんど考えられない。

かように考えてくると、「切符の切らないかた」という言い方は、そのまゝではどうしても文法的説明のできないものである。これは二つの違った言い方が混線したものであるから、これを解き放してもとの形に返さなければ、語句の間の一貫した連絡を求めることは不可能である。

要するに、混淆によって生じた現象は、一種の畸形兒であって、正常の文法のきまりから孤立したものである。しかるに、かような非文法的表現が、何かの理由で世に廣まり、更にそれを模範として、これと同じ形式の表現が、必要にしたがって自由に作り出されるようになることも、時にはあるであろう。かような時に至って、はじめてそれらの表現が文法研究の対象となり、それの構造が正常なる文法上の現象として取り扱われるようになるのである。

前にも一言したように、混淆は実際の談話にはしば〳〵現われるけれども、多くはその場限りで捨て去られて、長い生命を保たないのを常とする。それは、混淆によって生じた形は、正しい言語感覚を持っている人々には多少とも奇異の感をいだかせるからである。しかしながら、しかるべき條件を備えた少数のものは、多少とも一般化して、ある限られた場合、またはある限られた社会に、時としては一般言語社会に常用せられることがある。問題の「切符の切らないかた」は、かような少数の例の一つであって、車掌用語としての限られた範囲においてではあるが、一般に行わるるに至ったものである。この言い方がかく一般化したのは、

一、その音の排列が大声で呼ぶのに都合がよいこと。

二、多少奇異の感を伴なうが、その意味がはっきりしていて誤解を生ずるおそれなく、すぐに了解せられること。(なお「切らないかた」という方が、車掌が切符を切ることを明らかに示していて、「切ってないかた」よりもいっそうその場に適切である。)

三、他にいっそう適当で無難な言い方がないこと。(「切符を切ります。」「切符を切りましょう。」などもあるが、語句が相当に長く、且つ、「…かたはありませんか。」と問いかけた方が、いっそうよく乗客の注意をひく。)

以上のような條件を備えて、他にかえがたいものであるからであろう。

以上私が説明を試みた「切符の切らないかた」のごときは、現代國語の研究としては片すみの些々たる問題にすぎず、さいわいにその解明に成功したとしても、たいして問題にするには足りないものであろう。しかし、私の解するごとく、これが混淆の結果生じたものであるとするならば、同様の現象は、実際の言語においては古今を問わずしば／＼見られるはずであるから、過去の文献に現われた言語の上にも、必ずしも絶無と断ずることはできない。されば、さようなものをいかに見、いかに取り扱うべきかを考えておくことは、現代語を研究する場合にも、過去の文献にもとづいて過去の言語を考究する場合にも必要であって、もし、これに対する正しい認識がなければ、思わぬ錯誤に陥り、またはむなしき努力を費すおそれがないとも限らない。かような認識を深めるためには、この粗雑な小論も、必ずしも無用ではないであろう。

（國語法研究）

研究

一 「切符の切らないかたはありませんか。」という車掌のことばは、どうして人々の間に問題になっていたのであろうか。

二 車掌のことばの意味を正しく表わすのに、われわれならばなんと言うか。お互に話しあってみよう。

三 正しい言い方があるのに、それが行われないで、不自然な言い方が行われるようになったのは、どういう理由からであるか。この文の筆者の考えはどうか。

四 これは「單なる偶然の結果と見るべきでなく、上にあげた世間普通に用いられる二つの表現に対する價値判断と、これにもとづく取捨選択とが暗々裡に行われたものとしなければならない。」という筆者の結論を、わかりやすい言い表わし方で述べよう。

五 言語は、いつのまにか少しずつ変化して行くのであるが、根本的には、どんなことが変遷の原因になるであろうか。

六 「われ／＼の言語意識にも合致しない。」とはどういうことか。またわれ／＼の平素話したり聞いたりすることばの中に、われ／＼の言語意識から見て不自然なものはないか。特に幼い子供たちのことばについて調べてみよう。

七 実際に行われていることばのすべてを、文法が説明し盡くすことのできないのは、どういう理由によるか。

八 この文章をよく読んで、問題のとらえ方、研究の進め方、論文の書き方の参考にしよう。

〔三〕 もみぢの錦

平安時代にはいってから、和歌は漢詩の流行に押されて、一時その影をひそめたが、やがて再び勢いを回復した。延喜五年（九〇五）、最初の勅撰集として、古今和歌集が紀貫之らの手によって編集されたのをはじめとして、その後約三百年の間に、次々に勅撰集がつくられた。後撰・拾遺・後拾遺・金葉・詞花・千載および新古今がそれで、古今集とともに世に八代集と呼ばれている。

古今集以後の作風は、前時代の万葉集と大いに違っている。そぼく雄大で、心情のさながらの表現を重んじた万葉集時代の歌に比較して、纎麗巧緻であって、ことばの微妙なあっせんに力が注がれたのが古今集以後の風であったと言ってよかろう。また、この時代から和歌は、社交の具として、貴族の教養上、特に重ん

ぜられるようになり、その後長く、わが國文学のあらゆる方面に大きな影響を與えた。

こゝに載せたものは、必ずしも八代集のすべての歌集から抜粋したわけではないが、その時代を代表すべき人たちの作品を、適宜八代集から抄出して、ほゞその活躍した時に従って排列したものである。和歌史上における、これら勅撰集の意義について研究するのもよかろう。また、文語法の研究の材料とするのもよい。

惟喬のみこのともに狩にまかりける時に天の川といふ所の川のべにおりゐて酒など飲みけるついでにみこのいひけらく狩して天の川原にいたるといふ心をよみて杯はさせといひければよめる

狩り暮らしたなばたつめに宿からむ天の川原にわれはきにけり　在原業平

題しらず

うたゝねにこひしき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき　小野小町

西の大寺のほとりの柳をよめる

あさみどりいとよりかけてしらつゆを玉にもぬける春の柳か　遍昭

もの思ひけるところものへまかりける道に野火のもえけるを見てよめる

冬枯れの野べとわが身を思ひせばもえても春をまたましものを　伊勢

歌奉れと仰せられし時よみて奉れる

春日野のわかなつみにや白たへのそでふりはへて人の行くらむ　紀貫之

月夜に梅の花を折りてと人のいひければをるとてよめる

月夜にはそれとも見えず梅のはな香を尋ねてぞしるべかりける　凡河内躬恒

是貞のみこの家の歌合によめる

雨ふればかさとり山のもみぢ葉は行きかふ人のそでさへぞ照る　壬生忠岑

音羽山を越えける時にほとゝぎすの鳴くをききてよめる

音羽山けさこえくればほとゝぎすこずゑはるかにいまぞなくなる　紀友則

屏風に

わが宿のかきねや春を隔つらむ夏きにけりとみゆるうの花　源順

嵐の山の下をまかりけるにもみぢのいたく散りければ　藤原公任

あさまだき嵐の山のさむければもみぢの錦きぬ人ぞなき

題知らず

三島江につのぐみわたるあしの根の一よのほどに春めきにけり　曾根好忠

こゝちれいならずはべりけるころ人のもとにつかはしける

あらざらむこの世のほかのおもひでに今ひとたびのあふこともがな　和泉式部

七月ついたちごろに尾張にくだりけるに夕涼みに関山を越ゆとてしばし車をとゞめて休みはべりける

越えはてば都も遠くなりぬべし関の夕風しばしすゞまむ　赤染衛門

月照網代といへることをよめる

月清みせゞのあじろによる氷魚はたまもにさゆる氷なりけり　源経信

堀河院の御時お前にておの〳〵題をさぐりて歌つかうまつりけるにすゝきをとりてつかうまつれる

うづらなく眞野の入江の浜風にをばな波よる秋の夕暮れ　源俊頼

故郷花といへる心をよみはべりける

さゞなみやしがの都はあれにしをむかしながらのやま櫻かな　読み人しらず

攝政太政大臣の家に五首の歌よみはべりけるに

またや見む交野のみ野の櫻がり花の雪散る春のあけぼの　藤原俊成

題知らず

きり〳〵す夜さむに秋のなるまゝに弱るか声の遠ざかりゆく　西行

をのこども詩をつくりて歌に合はせはべりしに水郷春望といふことを

見わたせば山もとかすむ水無瀬川ゆふべは秋となに思ひけむ　後鳥羽上皇

五十首の歌奉りし時

暮れてゆく春のみなとは知らねどもかすみにおつる宇治のしば舟　寂蓮

守覚法親王五十首の歌よませはべりけるに　藤原家隆

ありあけの月まつ宿のそでの上に人だのめなるよひのいなづま

母みまかりにける秋野分しける日もとすみはべりける所にまかりて　藤原定家

たまゆらの露も涙もとゞまらずなき人こふるやどの秋風

百首の歌奉りし時　藤原良経

きり／＼すなくや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかもねむ

百首の歌奉りしに　式子内親王

声はして雲路にむせぶほとゝぎす涙やそゝぐよひのむらさめ

研究

一　今までに読んだことのある万葉集の歌と比べよう。万葉集の歌と、これらの歌とどちらがぴったりした感じを与えるか。

二　これらの歌のうち、特に技巧的な歌を抜き出し、その技巧について調べよう。

三　句の切れるところを指摘しよう。

四　比喩の巧みなものをあげよう。

五　縁語・懸詞について調べよう。

六　名詞で終っている歌について、その効果を考えてみよう。

七　これらの歌の中で、実感をすなおに歌ったもの、ことばの上の技巧や、空想的なおもしろみのかかっているものを区別しよう。

八　自分の好きな歌をあげて、その歌のどの点が自分をひきつけているかを話しあおう。

九　係り結びの法則を研究しよう。

十　意味や語法にしたがって、詞書にも、歌にも、できるだけ多くの句読点をつけてみよう。

十一　「みこのともに……」とあるが、もし「みこととともに」となると、どう意味が違ってくるか。

十二　「いひけらく」について調べよう。

十三　「たなばたつめ」の「つ」に注意しよう。このような「つ」の用例を集めよう。

十四　この中にある助動詞をすべて抜き出し、その意味、活用について調べよう。

十五　「もの」という語がどう使われているか。一つ／＼調べよう。

十六　「わが身を思ひせば」の「せ」について説明しよう。

十七　「月夜にはそれともみえず」の「それ」は何をさすか。

十八　「そでさへぞ照る」の「さへ」は口語の「さえ」とどう違うか。

十九　「越えはてば」は「越えはつれば」とすると、どうなるか。未然形につく「ば」について調べよう。

二十　この中に「音便」というべきものがあったら、それをもとの形にしてみよう。

二十一　「詩をつくりて歌に合はせ」るとはどういうことか。歌合・詩合、その他、古代の遊戯について調べよう。

六　劇

劇と人間生活とは、深く結びついている。どんな未開民族の間にも、きっと劇的な舞踊や所作があって、生活の慰安ともなっている。また、われ〳〵の幼少のおりのことを考えてみても、学校ごっこや人形ごっこに始まって、紙芝居を樂しみ、子供劇に出演したりした。小学校・中学校における大きな行事となっている学藝会などには、必ず劇が行われている。一般社会においても、観劇は、映画鑑賞と並んで大きな娯樂となっている。このような関係を考えてみると、人が劇に興味を持つことは、その本能に根ざすものがあると言ってよかろう。

われ〳〵は、自分の生活に、正しく劇をとり入れ、自らの生活を、いっそう豊かなものにして行きたいものである。また、戯曲を読んだり、劇を演出したりすることによって、いろ〳〵の場合の話のやりとりや、身ぶり・態度などを効果的にする練習になる点が多く、國語科として著しい学習効果を期待することができる。

なお、劇の発達史や、構成の種々相なども好個の研究題目となる。

こゝには、現代作家による戯曲二編と、謠曲の代表的なもの一編を掲げた。戯曲は劇のそして謠曲はわが古典樂劇ともいうべき能樂の台本である。これらをよく味わって、文学としての戯曲の味わい方や、演劇としての劇の演出のしかたをくふうしよう。

〔一〕 つばめ

佐藤春夫

老婆　中風のような病氣で半身不随。年齢不明。
お粂　四十ぐらいの女。
いさ　老婆の孫。お粂の娘。十二、三。

一

百姓の家とも漁師の家とも思える小屋の一室。廣い土手の向こうに入口がある。土間のこちらはござを敷いた板の間である。建物は黒くすゝけている。このへやと奥の間とを仕切る古びた障子には時おりほのおの影がさす。入口の外はうす明かるい。へやの中はほとんど暗い。入口からの鈍い外光と、障子に映るほのおの影とでやっと人物のありさまなどは認められる。

老婆、板の間の土間に近い所へすわっている。そのそばに孫娘のいさが立っている。戸の外では激しい風の音がして、あけっ放した入口からも時おり風が吹きこんでへやの障子が揺れ震える。

お粂　(彼女は障子の影の次の間から話しかける。)　いさ。なぜ早くかどをしめんか、そこからはいって來るんじゃろ、風があおってあぶなくて火が燃されん。
いさ　(母には何も答えずに祖母の耳もとで大声で言う。)かどをしめんとあぶなくて火が燃されんと。
お粂　(いさのことばにつけ足すように、叫ぶがごとく。)障子も何も飛んでしまうよ。
老婆　待て、待て、親つばくらが今に帰って來るのじゃ。それまでかどをあけておいてやらんとつば

くらがかあいそうじゃ。

お粂　（叫ぶがごとく。）ばさま。何を言うのじゃ。いくらつばくらかて、もうこの暗がりに、外でこの風に吹きっさらされてなんでうろついているもんか。もうとっくに巣へ帰ったんじゃろ。かまわん、かまわん。早くかどをしめてまゝを食べにおいでよ。

老婆　いゝや、いゝや。親つばくろはさっき出たきりまだ帰らんのじゃ。このしけであれもえさを見つからんのじゃ。あれが帰るまであけておいてやらんと、あれは帰れんわい。

お粂　（叫ぶ。）帰ったのじゃ。帰ったのじゃ。ばさまは目がかすんでそれが見えなんだのじゃ。それにきまっている。ばさまのとろい目でこの暗がりにつばくらの番したとて、つばくらのつの字も見えるものかのう。

老婆　（半ばつぶやくがごとく。）そうじゃない。そうじゃない。おれはもう毎年毎年、こうしてつばくらの番をしなれていて、巣立ちするつばくらをまだ一度も見のがしたことはないほどじゃわ。もう巣立ちして飛んでしもうという時には、二日も三日も前から親子のそぶりでわかるものじゃ。きょうはこのしけでさえなければ、あれらは飛び立つつもりじゃったのじゃ。わしは何もかもちゃんと見通しじゃ。親のつばくらはさっき行ったぎりまだ帰らんのじゃわい。目は見えないでも、羽音のけはいでもわしにはちゃんとわかるのじゃ。うそじゃと思うなら踏みつぎとろうそくを持って來て巣の中をのぞいて見るがいい。ひょっと帰っているならばおれも安心じゃ。かどをしめてもらおう。

この時風特に激しく表口より吹きこむ。

いさ　ばさま。それじゃこうしよう。少し――つばくらの出はいりできるほどあけておいてほかはしめてしまおう。どうじゃ、それでええじゃろう、のう。

老婆　踏みつぎを持って來てのぞいて見ろ。

いさ　うちにゃ、そんなものあない。（言いながら土間へおりて行く。そうして九尺を二枚でしめるがんじょうな障子をしめる。重そうで立てつけのよくないもの。しめきらずに、二、三寸だけあけておく。）ばさま、これでええじゃろう。（子供のきげんを取るように。）ねえ、ねえ、こうやっておけばだいじょうぶじゃ。つばくらは賢い鳥じゃさか、こゝから抜けて來るよ。

お粂　そうじゃ、そうじゃ。そうしておけばだいじょうぶじゃ。そうしておいて早うこっちへ來てみんなまゝを食うのじゃ。こんな日は早くしもうてしまうのが第一じゃ。いさよ、いさよ、こちらへばさまを連れて來い。

次の間に灯をともしたらしく障子が明かるくなる。

いさ　ばさま、（祖母のそばに寄り添ってその手を自分の肩に掛けながら。）そら立つのじゃ。

老婆　（不精不精に立ちあがる努力をしながら。）どよっこいしょう。

いさ　（ほとんど老婆と同時に。）どよっこいしょう。

老婆はいさの肩にすがって歩きだす。

二

次の間。高い所からつりランプの鎖がさがっている。うす暗いランプがともっている。ランプのほやは上

の方はす〻けて曇っているが、下の方はきれいにみがかれている。大きな紙製のかさがその上にかぶさっている。奥の方に火のけのなくなったかまどが見える。古びた荒壁の上にはいさの古い習字などが張られてある。習字の紙は飜り、ランプの火が時おり風がはいって搖れる。

　三人にしては大きすぎるちゃぶだいに老婆とお粂といさとがすわる。

老婆　こういう晩は火の用心が何よりじゃ。

お粂　それを知っていながらなぜまた早うかどをしめてくれんのじゃ。こんな晩に火をたきとうないと思うたが飯がなくなってしもうたのじゃ。きょうはいもんがゆじゃぞ。

いさ　ほんとうにえらい風じゃ。

お粂　こんな風をうちの中へ吹きこましては障子が飛んでしまうばかりじゃない。それでなうてさえつぶれたがっていている小屋じゃもの、めちゃめちゃに碎けて飛んでしまうぞ。（小声でいさに。）表はあけてあるんじゃろう、しっかりしめて來ておくれよ、——戸も。そっと行かんとばさまがうるさいぞ、ばさまはまるで氣ちがいじゃ、つばくらのことさえいえば。

　いさ、立って出て行く。すぐ帰って來る。

　三人食事を始める。

老婆　（いさを見とがめて。）どこへ行って來たんじゃ。

いさ　御飯の前じゃもの、——途中じゃ惡いと思うて小用して來たんじゃよ。

お粂　（耳を傾けて。）とう〳〵雨も降って來た。沖へ出ている舟がなければええが、村にはきょうは一そうもないはずじゃが、よその浜には出た舟もないとは限られんわ。毎年この季節にはきっとこんな早風が來るのはどういうわけじゃろう。よう忘れんわい、いさ、おまえのじいさんやとうさんが死んだのもこんな風のおかげじゃった。しかたがない、うちばかりじゃないわ。村から十七そう出た舟が一そうも帰らんのじゃ。おまえがちょうどまだ腹の中にいた時分のことじゃ。

老婆　何をつまらん話を始めたのじゃ。子供にそんな話を聞かして何になるかよ。

お粂　ばさまは氣の强そうなことを言う人じゃが、いさ、ばさまはおまえが生まれた時から、（小声で。）おまえの顔をとうさんに見せてやりたかったとそんなことばかり言って、氣病みをしたのじゃ。いつもがんこな强情なことばかり言うばさまじゃが、根はやさしい人なのじゃ。

老婆　（耳を傾けていたが小声の話が聞えぬので。）おまえらはなんの話をしているんじゃ。

お粂　（さびしく笑いながら。）つばくらの話をしているのじゃ。

いさ　（母と同じように笑う。）ばさまの好きなつばくらの話をしているのじゃわ。

老婆　おれは毎年毎年つばくらの番をしていて、巣立ちして飛んで行くつばくらをまだ一度も見のがしたことはないほどじゃ。つばくらはだんな衆の軒でなければ來んというがうそじゃわい。それがうそじゃなきゃこのばゝのうちもだんな衆じゃわい。

お粂　ばさまはそれがじまんじゃ。

老婆　それはそうと親つばくらはもう來たじゃろうな。

お粂　とっくに來ているよ。つばくらじゃとてこの吹き降りになんでいつまでもうろ〳〵しているものか。

老婆　そうじゃ、そうじゃ。あれは賢い小鳥じゃ。

いさ　波の音がだん〴〵強くなるのう。

お粂　そうじゃ、風がひどいのでわからんが風が絶えるとえらい音がしているな。まるで地鳴りじゃ。津波でもせねばええが。

沈默

お粂　夏みかんはみんな落ちたじゃろう。夏みかんはしまいじゃさか落ちてもええが、みかんは大事じゃ。

いさ　稲は。

お粂　稲はだいじょうぶじゃ、だいじょうぶじゃ。まだ風に当たるほどに伸びているものかよ。――うちのような芋作りはどんな風でもなんの心配もないわい。（さびしく笑う。）

いさ　（手で額の汗をふきながら。）芋がゆはうまいが、食うと暑いのう。

いさ食事終り、立って食器のあとしまつをしようとする。

お粂　かまわんとおけ。あしたのことにしよう。（黙っている老婆に。）ばさま、黙りこくって何を考えているんじゃの。

老婆　（お粂の顔を見上げて。）何も考えないわ。

お粂　こういう晩には早く寝るに限るのじゃ。（ひとりごとらしく。）じゃが、こんな風と波とではおちおちと眠ってもいられぬわい。

いさ　橋が流れねばよいがのう。

お粂　雨もそれほどに降ってない。

三

翌日朝。風雨の音全くやみたゞ時々昨夜のなごりらしく波の音が聞える。

一と同じ場面。

いさ老婆を助けて入口の間の端土間に近い所に老婆をすわらせる。

老婆　（つぶやくがごとく。）静かなええ天氣じゃ。おまえらが巣立ちにはもってこいじゃ。待て〳〵、今にかどをあけてやるぞ。

いさ土間におりぞうりをつっかけて表の戸をあける。その時光線とともに戸外からつばめがまっしぐらに入口を潜り抜ける。

いさ　あっ、あっ。

老婆　親つばくらじゃないか。――それ見ろ。

つばめ再び戸外へかけり去る。老婆からだをねじ向けてはりの上を見上げる。次の瞬間土間を見おろす。

老婆　やっ。（驚駭。沈默。続いてわめく。）お粂、出て來い、出て來い。いさ、これを見ろ。

お粂　（障子をあけてのぞきながら。）ばさま、なんじゃのう、大きな声を出して。

いさ　（振り返って同時に。）やっ。（走り寄って土間から生育したつばめの子を両手にいっぱいすくい上げてそれを老婆とお粂との目の前に突き出す。）

お粂　なんじゃ。どうしたのじゃ。

老婆　何を言うのじゃ。夕べおまえらが殺したのじゃ。帰らぬうちに親つばくらをおまえらがしめ出してしまったんじゃ、その留守に子供があばれて落ちたのじゃ、知れたことじや。きまっている。きまっている。

お粂　そうかしらん。そんなはずはあるまい。風に吹き飛ばされて落ちたんじゃろう。

老婆　何を言うんじゃ。親つばくらは今戸をあけるのを待ちかねて飛びこんで來たわ。

いさ　それほんとうじゃ。

老婆　(はじめは強くだん〲力なげに。)おまえらはまだ日も暮れきらんうちにつばくらの親をしめ出してしもうたのじゃ。うちの中は暗くてもまだ戸外は明かるかったのじゃ。——いつもみさきへまだ日が当たっている時分にでも、こゝのうちは日がかげってしもうてうちの中がまっ暗になってしもうことを、おまえらは忘れてしもうたか。うちは夜でも空は暮れずに残っていたのじゃ。……

この時、つばめ再びせわしくはいって來てまた飛び去る。いさ、つばめのあとを追って、あけかけて五、六寸あいている戸をあけっ放して、戸外へ駆けだす。

戸外は輝くような朝。この朝の光の中に空を仰いでいるいさの姿がくっきりと浮かび出し、これに比べて室内の老婆とお粂とはたゞ黒い影のように感ぜられる。

いさ　(子供らしく手を上げて叫ぶ。)つばくら、つばくら。空一面。どこから來たんじゃろう。つばくらが集まった。

老婆　(低く力強く。)知れたことじゃ、みんな勢ぞろえをしてきょうは海を越えて立つんじゃ。その中でうろ〲子をさがしているのがうちのつばくらじゃ——見ろ、もう來年からはうちへはつばくらは來るものか。

無言のお粂が最も悄然(しょう)として立っている。

(佐藤春夫全集)

研究

一　登場人物のつばめに対する心持や考え方を、次のことがらについて比較してみよう。

(1)　つばめが軒に巣くっていること

(2)　親つばめがあらしの夕方しめ出されたこと

(3)　つばめのひなが死んでいたこと

(4)　來年からつばめが來なくなること

二　作者はこの作品によってどんなことを表わそうとしたのか。

三　三人の使うことばが、その年齢によって違い、相手と自分との関係の相違によって変わっている点を指摘しよう。

四　この作品に方言について考えてみよう。また、方言を用いた効果について考えてみよう。方言を標準語になおしてみよう。

五　配役を適当にきめて読んでみよう。

六　われ〲の日常生活に取材して、戯曲を作ってみよう。

〔二〕 霜夜だぬき

宇野信夫

山番

たぬき

その一

とがらしの吹く晩のこと。
山の上の小屋で、老人がひとり炉に向かって酒を飲んでいる。
遠く鐘の声。

ト　義太夫を語る。

山　番　〽ねぐら離れしほとゝぎす……

（風の音）

あゝ、ひどい風になったたな。今夜の風で、山の木の葉という木の葉は、みんな散ってしまうだろうな。こないだ、暑い暑いと思っていたら、もう寒い〳〵だ。月日のたつのは、全く早いものだな。（ト　酒を飲み舌鼓を打つ。）あゝ、うまいうまい。さすがは庄屋様のくだされた酒だけのことはあるぞ。（ト　飲んで、舌鼓。）うまいなあ。庄屋様、毎度うまい酒をくだされまして、なんともお礼の申そうようもございません。こゝから、お礼を申しあげます。へえ、ありがとうございます。（ト　とがらしの音。）おゝ、寒い〳〵……こりゃ今夜はわるくすると雪になるぞ。しかし、春も夏も秋も、またゝくうちに過ぎてしまうが、年をとってからというものは、この冬だけが長いので困るよ。年寄りはきっと、冬の間に年をとるんだな。顔や手にしわのよるのも、きっと寒いうちのことだよ。しかし、年をとろうが、寒かろうが、これさえありゃ千人力だ。（ト　舌鼓。）あゝ、うまいなあ。……うま……おゝ、こりゃあたいへんだ。（ト　しきりに火を吹く。）あゝ、すんでのことに、火を絶やすところだった。あぶない、あぶない。おう、燃える燃える。おう、あったかいな。だが待てよ、火というものは、なんでこんなにあったかいのだろうな。不思議だな。（ト　酒を飲み）酒というものは、なんでこんなにうまいのかな。待てよ、小屋の中で、おれがひとりでこうやっているのもおかしいぞ。はゝ……いや、こりゃあよっぽどおかしいぞ。

ト　とがらしの音。
かすかに戸をたゝく音。

たぬき　今晩は、今晩は……。
山　番　おや、だれか戸をたゝいたようだな。夜ふけさふけに、村の衆が山へのぼって來るわけはなし……。
たぬき　今晩は……今晩は……。
山　番　だれだい、えゝだれだよ。
たぬき　私でございます。
山　番　私でございます……聞いたことのねえ声だが、一体だれだよ。
たぬき　はい。あの、私は……でございます。（ト　言いにくそうに）
山　番　だれだよ、はっきり言いなさいよ。
たぬき　……でございますよ。

山番　だからよ、だれだてえのさ。

たぬき・実はねえ、たぬきでございますよ。

山番　たぬき……はゝゝ……年寄りをからかうもんじゃあねえ。そうだ、おゝかた猟師が道にでも迷ったんだろう。じょうだんはよしにして、はいってあったまんなせえ。

たぬき　私もあたゝまらしていたゞこうと存じまして……しかし、ほんとうに私はたぬきなんでございますが……。

山番　ほんとうにたぬき……それじゃあ何か、ほ、ほんとうにおまえはたぬきだというのかえ。

たぬき　はい、この山に年久しくすまいをいたしております、古だぬきでございます。

山番　その古だぬきが、この太兵衛をばかしに來たというのか。

たぬき　めっそうもない。今も言うとおり、あたゝまらしていたゞこうと思いましてね、実は、私もよる年波、こんなこがらしの吹く晩は、寒くって、どうにもがまんができません。あなたを見こんで、ちょっとあたゝまらしていたゞこうと、こう思いまして……。

山番　いや、そうでねえぞ。そんなことを言って戸をあけさして、おれをばかそうというのだろう。やい、見そこなうなよ。太兵衛さんだぞ。年はとってもたぬきなんぞにばかされるほどもうろくはしねえぞ。たゝきのめして、たぬきじるにして食っちまうからそう思え。

たぬき　たぬきじる……そんなこわいことをおっしゃるもんじゃあございません。つるかめ、つるかめ。

山番　それがいやならさっさと退散しろ。帰れ、帰れ。

たぬき　住みかへもどりましても、今夜の寒さは、どうものがれそうもありません。助けるとおぼしめして、そのあたゝかい火のそばへ、ちょっと寄らしてくださいまし。

山番　やい〳〵、きびの悪い声を出すな。よし、帰らねえな。どうしても帰らねえとありゃあ、おれにもりょうけんがある。さあ、このまきざっぽうが見えねえか。こいつでてめえの頭をどやしつけて……。

たぬき　たぬきじるでございますか。つるかめ、つるかめ。それではどうあってもいけませんか。

山番　いけねえ。

たぬき　どうしてもだめでございますか。

山番　だめだ、だめだ。

たぬき　（ほっといきをつく。）それではしかたがございません。私は今夜はこゞえて死ぬかもしれませんが。

ト　こがらしの音。

たぬき　おゝ、寒い〳〵。それじゃあ太兵衛さん、おさわがせいたしました。さようなら。

山番　おい〳〵、待ちなさい、待ちなさい。おまえ、何かえ、そんなに寒いのかえ。

たぬき　へえ、寒いだんじゃあございません。

山番　こうやって火のそばにいても寒い晩だ。外は寒かろうなあ。

たぬき　はい。年寄りには今夜の風は、しんから骨身にこたえます。

山番　そうかい、しんからこたえるかえ。

たぬき　まるで身を切られるようでございます。

山番　よし、年寄りは年寄りどうしだ。かまわねえからはいんなせえ。

たぬき　えっ、それじゃあはいってもよろしうございますか。

山番　おっと、待ちなせえ、そりゃあはいってもかまわねえが、たぬきの姿ではいって來られちゃあぞっとしねえな。おまえは古だぬきだそうだから、何かこう、人間に化けてはいって來てくれ。

たぬき　ではこういたしましょうか。あなたのおつれにいいようなおやじに化けることにしましょうか。

山番　おやじに化ける……。

たぬき　たぬきおやじと言いますから。

山番　たぬきおやじなざあごめんだな。そうだ、そうだ。おれのせがれに化けられるかえ。

たぬき　あなたのせがれに……。

山番　もっともそのせがれは、今はこの世にいねえがね。一昔前に、あの世へ行っちまったのさ。

たぬき　それは御愁傷さまでございますが、私はあいにくお顔も存じませんので……。

山番　せがれはおれとうり二つで、うりざね顔のそりゃあいい男だったよ。おれの顔を若くすりゃあそれでいいんだ。

たぬき　さようでございますか。では、戸のすきまからとっくりと拜見をいたしましょう。

山番　どうだ、見えるかえ。

たぬき　はゝあ、ひどいなあ。

山番　え。

たぬき　これはどうもおそまつだなあ。どうもこりゃあおせじにもうりざね顔とは申されません。失禮でございますが、そういうお顔だちは、馬づらと申します。

山番　口の惡いたぬきだなあ。

たぬき　いや、わかりました。では、あなたのむすこさんに化けましょう。すみませんが、手を二つばかり打ってくださいまし。

山番　よし。（ト　手を二つ打つ。）どうだ。

たぬき　はい化けました。はいってもよろしゅうございますか。

山番　はいれ、はいれ、はいれ。

ト　戸をあけて、せがれの姿をしたたぬきがはいって來る。

たぬき　今晩は。

山番　おゝ、せがれ……。（ト　思わず言い、われにかえり）驚いたなあ。そっくりだなあ。

たぬき　うまいものでございましょう。

山番　うまいもんだ。さあ、こっちへ來てあたんなせえ。

たぬき　ありがとうございます。どうも、ことしは寒さが早くまいりましたようで……おう、おう、

あたゝこうございますな。

山　番　おい、おまえ、ほんとうにたぬきかえ。せがれがおれに会いたさに、化けて出たんじゃあねえだろうな。

たぬき　そんなことはありません。なんなら、しっぽを出してお目にかけましょうか。

山　番　しっぽなんぞを出されてたまるか。さあ、どん〳〵木をくべてやろう。

たぬき　あゝ、おかげさまで生き返ったようでございます。お互さまに年をとりますと、寒さがこたえますすな。

山　番　全くだ。しかし、なあ、せがれ……。

たぬき　え。

山　番　じゃあないたぬきか。なあ、たぬ公。

たぬき　はい。

山　番　おれも一昔前、せがれを持っていかれた時は、がっかりして生きているそらはなかったよ。おらあもう、せがれをいっそ恨んだものよ。やけをおこして酒をのんだり、……（ト　鼻をつまらせ）　あげくの果てが家を捨てて、流れ〳〵て、こんな山の奥へ來てしまった。だがの、安心してくれ。渡る世間に鬼はないとはよく言ったものさ。今じゃあ、庄屋様はじめ村の衆のお情で、こうして山番をして、寒い思いもしずに暮らしているよ。（ト　せがれに言うように言い、われにかえり）　はゝゝ……いや、どうもおまえがほんとうのせがれのような氣がしてならねえ。どうだ、一ぱい飲まねえか。

たぬき　いゝえ、どうぞ私はもう……。

山　番　瀬戸物のたぬきは、とくりと通い帳を持ってえばっているじゃあねえか。そんな遠慮をしなさんな。

たぬき　それでは一ぱい頂戴いたしましょうか。

山　番　この茶わんがいい。さあついでやろう。

たぬき　ありがとうございます。（ト　飲む。）あゝ、いい御酒でございますな。（ト　舌鼓）

山　番　なあたぬ公、おれも毎晩さむしくってやりきれねえ。せがれの姿で毎晩遊びに來てくんねえよ。

たぬき　ありがとうございます。おしゃくをいたしましょう。

山　番　ありがとう。（ト　飲む。急にしんみりとして）　あゝ、昔の話よ、おれが行燈(あんどん)のそばで酒を飲んでいると、せがれがそばへ來て、おとっつあん、いいかげんによしねえよと言ったことがあったっけ。あいつは苦労性だったからなあ。早死にをするくらいだから、内氣なおとなしいやつだったよ。あゝまたしめっぽくなってきやあがった。

たぬき　さあ、太兵衛さん、熱いところをいかゞでございます。

山　番　せがれのなりをして、太兵衛さんと言うのはおかしい。やっぱりおとっつあんと呼んでくんねえ。

たぬき　そうですね、それじゃあ、おとっつあん……。

山　番　あゝ、声までそっくりだ、さあ、たぬ公、もう一ぱい飲みなさい。

たぬき　たぬ公はいけません。せがれと呼んでおくんなさい。

山　番　それじゃあ、せがれ……さあ、もう一ぱいどうだ。

たぬき　へえ、どうもこれはなみ〳〵と……（ト　一息に飲み、大きな舌鼓）おとっつあん、今夜はどうも私は、いい心持になりました。

山　番　おれもいい心持に醉ったよ。

たぬき　舌鼓ばかりでも氣がききません。一つ腹鼓でも打ちましょうか。

山　番　腹鼓……いや、そいつあごめんだ。

たぬき　それじゃあおとっつあん、あなたのおはこの義太夫でも聞かしてくださいな。

山　番　おれが義太夫をやるのを、よく知っているな。よし、それじゃあ一つ聞かしてやるかな。

〽ねぐら離れしほとゝぎす　子で子にあらぬみづからを……

ト　たぬき、大いびきをかく。

山　番　おや、いびきをかいているな。おい、せがれ……せがれ……たぬ公、たぬ公……。

たぬき　はい、はい。

山　番　せっかくおれが語っているのに、いびきをかくやつがあるかえ。

たぬき　いゝえ、おとっつあん、わたしゃあ寢ちゃあいませんよ。

山　番　だって、いびきをかいていたじゃねえか。

たぬき　いゝえ、こりゃあたぬき寢入りでございますよ。

ト　こがらしの音。

その二

遠く笛の音

戸をたゝく音。

たぬき　今晩は、今晩は。

山　番　あゝ、せがれか。はいれ、はいれ。

ト　戸をあけて、せがれのなりのたぬきがはいって來る。

たぬき　おとっつあん、今晩は。

山　番　あゝ、よく來たなあ。今夜はめっぽうあったかいから、來ねえだろうと思っていたが、よく來てくれた。さあ、あがれ、あがれ。

たぬき　ほんとうに今夜はあったこうございますね。今夜のうちに、お山の花という花が残らず咲いてしまうのでしょう。私がこゝへ來る道で、あっちでもぽん、こっちでもぽんと音がするんですよ。そりゃもううるさいほどでございましたよ。

山番　お株を言っていやあがる。いよ／＼春になったから、今夜からはまた影ぼうしを相手にしなけりゃあならねえと思っていたところだ。ほんとうによく來てくれたなあ。

たぬき　こがらしの吹く寒い晩のことでございましたね。私は寒さにたまりかねて、あなたのお情にすがりました。それからというものは、この炉ばたのあたゝかい火のそばで、あなたは向こう、私はこっちで、夜のしら／＼明けるまで、話しあったりお酒を飲んだり……冬じゅう樂しく暮らしましたが、早いもので、ことしでもう三年になりますね。

山番　そうだなあ。もう三年になるかなあ。さむしくってならねえ冬も、話相手ができたおかげで助かった。一年じゅうで一番長いと思っていた冬が、一番早く行っちまうのよ。

たぬき　毎年寒くなりますと、持病が起って困りましたが、おかげさまでこの三年、ふっつり根切りになりました。冬になって、こがらしが吹きはじめるころになりましたら、また伺いましょう。今夜はその御あいさつだけに伺いました。

山番　そうかい。こっちは一年じゅうでも來てもらいたいが、おまえはそうもいかねえと言うし……あゝ、早く冬が來りゃあいいなあ。

たぬき　まだ春になったばかり、いっそくとびに冬にはなりませんよ。ほんとにおとっつあんは氣が早いなあ。

山番　それ／＼、それなんだよ。その調子まで、せがれにそっくりだ。ほんとうにせがれじゃあねえのかえ。

たぬき　お疑いなら、しっぽを出してみせましょうか。

山番　いや、しっぽなんぞを出されちゃあことだ。ごめんだ、ごめんだ。

ト　笛の音。

たぬき　あゝ、笛が聞えますね。

山番　ふもとで若い衆が吹くんだが、風のぐあいで手にとるように聞えるなあ。

たぬき　去年も春になった晩に、あの笛が聞えましたね。

山番　春になると若い者は、家にじっとしちゃあいられねえ。あゝして外へ浮かれ出て、笛を吹くのさ。

たぬき　私も若い時分は、月のいい晩になりますと、よく腹鼓を打ちましたが、そんなようなものですね。

山番　ちげえねえ。はゝゝ……。

たぬき　つきましておとっつあん、私も三年の間御やっかいになりましたから、何かお礼をしたいものと思いますが……何かあなたのお望みのものはございませんか。

山番　水くせえことを言いなさんな。おまえとおれの中で、何も礼のなんのということはありゃあしねえよ。

たぬき　人間の中には、恩知らずだの恩をあだで返す人だのがいるそうですが、そんなまねをしたくありません。何かおとっつあんに御恩報じをしたいと思います。

山番　寒くなったら毎晩來いよ。それがお礼というものさ。

たぬき　そうでございますか。それではまあこのお話は、これでうちきりといたしましょう。ねえ、おとっつあん、あなたは、この世の中で、何が一番ほしいと思いますか。

山番　さあ、そんなことは考えたこともねえが……なんにもねえなあ。

たぬき　何かあるでしょう。

山番　あった、あった。

たぬき　なんでございます。

山番　目の前にあるよ。おまえがほしいのよ。おまえがたぬきでなかったらなあ。

たぬき　それは御無理というものでございます。

山番　そうだなあ、無理な話だなあ。それじゃあほかには、なんにもねえよ。

たぬき　何かあるでしょう。

山番　くどいなあ。なんにもねえと言っているじゃあねえか。

たぬき　そうですか。でも、何かあるでしょう。

山番　まだ言ってやあがる。まあ、なんだな、小判の一枚もほしいかな。

たぬき　小判一枚……。

山番　おれもとる年だから、いつどんなことになるかしれねえ。そうなったら、村の衆に手数を掛けなけりゃあならねえし……それにはまあ、たんとはいらねえ、小判の一枚もあったらよかろうと思うのさ。まあ、そんなことはどうでもいいや。あいにく、今夜は酒がねえが、けんちんじるがあるから、あったためてやろう。今夜はおなごりに泊まって行けよ。

たぬき　そうですね。当分のお別れですから、今夜は泊まって行きましょうか。

山番　泊まって行ってくれるかえ。そいつあありがてえ。どれ、なべをかけよう。

たぬき　ねえ、おとっつあん、今夜はほんとうにむし〳〵するほどあたゝこうございますね。

山番　全くあったかい晩だな。雨でも降るのかな。

たぬき　私は春はすぐにねむけがさして困るんですよ。年のせいですかね。

山番　菜の花の咲く時分は、だれでもねむいものだよ。

たぬき　そう言っているうちに、どうもこれは眠くなってまいりました。ちょっと、横になってもよろしゅうございますか。

山番　あゝ、いいとも。しるができたら起してやろう。

たぬき　それじゃあ一眠りしましょうか。

ト　すぐにいびきをかく。

山番　もういびきをかいている。寝つきのいいやつだなあ。おい、せがれ……たぬき寝入りじゃあねえのかえ。（ト　いびき）こりゃあほん眠りだ。春さきのこんなあったかい晩に、えてしてかぜをひくものよ。よし〳〵、おれの、甚兵衛をかけてやろう。（ト　甚兵衛を脱ぐ。）どっこいしょ。（ト　立って、たぬきのそばへ行く。）そらよ。かぜをひくなよ。おゝ、よく眠っているなあ。

笛の音遠く聞ゆ。

山番　しかし、どう見てもせがれにそっくりだなあ。おい、せがれ……ほんとうにおまえ、せがれじゃあねえのかえ。おい……せがれだったら目をあきねえ、よ、せがれだったら返事をしねえ。せがれ……おい、せが……。（ト　いびき）あゝ、やっぱりせがれじゃあねえのだなあ……。

ト　笛の音遠く。

その三

鐘の声。
炉に向かって、老人はひとりごと。

山番　あゝ、もう四つか。やれ〳〵、いつまでこうしていたってはじまらねえ。もう酒もおしまいだ。せっかく庄屋様がくだされた酒も、いくら飲んでもちっとも醉わねえ。そろ〳〵寝るとしようかな。あゝ、靜かな晩だな。ことしももう春だな。

ト　遠く笛の音。

山番　おや笛が聞える。こんなにおそく若い衆が浮かれ出たか、おとゝしの春の晩だったな。あいつが笛を聞いて、春になるといつも、あの笛が聞えると言ってたっけ。あの晩がおしまいであれっきり姿を見せねえ。こがらしが吹いても雪が降っても、あいつは姿を見せちゃあくれねえ。あれから冬が二度まわって來たんだが、あいつはたずねて來ちゃあくれねえ。去年もことしも、おらあこの炉ばたで毎晩あいつの來るのを待ったが、とう〳〵ことしも、春になってしまやあがった。あいつも古だぬきだそうだから、壽命が盡きてしまったか。もうこの世にはいねえのかもしれねえな。

ト　戸をたゝく音。

たぬき　今晩は、今晩は……。
山番　おやなんだか戸をたゝいたようだが、氣のせいかな。
たぬき　おやすみでございますか。
山番　だれだえ。
たぬき　おとっつあん、私でございます。
山番　あっ、せがれか。はいんなさい、はいんなさい。

ト　戸をあけて、せがれのなりのたぬきがはいって來る。

たぬき　おとっつあん、お久しゅうございます。
山番　お久しゅうございますもねえもんだ。去年もことしも影を見せねえから、どうしたのかと思っていた。ことしも、もう春になってしまったから、おらあきらめていたんだが……一体どうしたというんだよ。

たぬき　私も早く伺いたいと思っていたんでございますが、思ったよりもてまがとれまして……それでもまあこうやってお目にかゝることができまして、こんなうれしいことはありません。

山番　まあ、あがって、こっちへ來いよ。

たぬき　何からお話してよいやら……まず、おとっつあんにはお変わりもなく、おめでとうございます。

山番　おまえも変わりはなかったのかえ。

たぬき　おかげさまでかぜ一つひきませんでした。

山番　どうしてたずねちゃあくれなかったんだよ。

たぬき　それにはわけがございます。まあ聞いてくださいまし。実はおとゝし、おとっつあんに、何がほしいとお尋ねしたことがありましたね。あなたはその時、何もほしいものはないが、小判が一枚ほしいとおっしゃいました。

山番　そうかなあ……そんなことがあったかなあ。

たぬき　私はどうかして、その小判が一枚ほしいと思いました。なんの小判の一枚ぐらい、持って來るのはわけないことでございますが、御恩報じの小判一枚、人目をかすめて取ったようなものでは、ためになりませんから、私は決心をいたしまして、あれからすぐに海を渡り、佐渡へ行ったのでございます。

山番　佐渡へ……ほう。

たぬき　それはいろ〱とつらい目に会いまして、やっと佐渡へ渡りまして、土や砂にまじったり人の捨てた砂金というものを拾い集めたりいたしまして、新たに小判を一枚ふかしました。へえ、ごらんの通り、小判一枚……二年の月日をかけまして、一心こめてふかしてまいりました。せめても私の御恩報じ、どうか受けてくださいまし。

山番　あゝ、すまないことをしたなあ。おれがよしないことを言ったばっかり、海を渡って苦労をしたか。堪忍してくれ。ほんとうにすまなかったなあ。

たぬき　おとっつあんのお情けを、こんなことで返したというつもりはございませんが、氣は心でございますから、どうか受けてくださいまし。

山番　あいよ。お前の志、ありがたく頂戴するよ。おかげでおれも、これであと〱の心配は何一つねえ。うき世を捨てたつもりでも、小判の色は惡くねえなあ。ありがたく頂戴しますよ。

たぬき　あゝ、私もこれでほっといたしました。しかしねえおとっつあん、二年ぶりで故郷へもどってまいりましたが、やっぱり生まれた土地はよろしゅうございますね。

山番　そりゃあ生まれた土地はいいものさ。

ト　笛の音。

たぬき　あゝ、笛が聞えますね。

山番　春に浮かされて、若い衆が吹いているのさ。

たぬき　あの笛の主は、いつか聞いた時とおんなじ人でしょうかねえ。

山番　若い男だって、いつまで若いわけじゃあない。若い男も年をとりゃあ、笛なんざあ吹かねえ

だろう。違う人かもしれないな。

たぬき　それじゃあおとっつあん、また寒くなりましたら伺います。今夜はこれでおいとまをいたしましょう。

山番　おや、もう帰るのかえ。

たぬき　たゞ今帰ったばっかりで、まだ住みかへもまいりません。たぬきはたぬきなりに、いろ〳〵と用事もたまっておりますから……。

山番　それじゃあ無理にとめるわけにもいかないが、寒くなったらきっとまた來てくんねえよ。

たぬき　またこがらしが吹きはじめるころになりましたら、きっとおじゃまにあがります。おとっつあんも、めっきりおふけなさいました。どうかおからだに氣をつけてくださいまし。

山番　あいよ。

たぬき　それではごめんくださいまし。

山番　もう行くかえ。

たぬき　さようなら。(ト　土間へおりる。)

山番　あばよ。

ト　たぬき、戸をあけて、出る。

たぬき　おう、いいお月夜になりました。

山番　そうかい、月が出たかい。

たぬき　晝間のようでございますよ。

山番　どれ〳〵、(ト　戸口に立ち)おう、なるほど、こりゃあまぶしいや。向こうの山の木が一本一本見えるなあ。

たぬき　それじゃあおとっつあん……。

山番　また來いよ。

ト　笛の音。

山番　おう駆ける駆ける、早いな、早いな。おうい、あぶないぞ。そんなに駆けて、ころぶなよ。

たぬき　(遠くの方から)だいじょうぶですよう……。

山番　また來いよう……。

ト　腹鼓の音、ぽん、ぽん、ぽん……

山番　おや、腹鼓を打っているな。おうい。

ト　腹鼓ぽん、ぽん、ぽん……

山番　年寄りのくせにあんなに打ってだいじょうぶかな。おうい、あんまり打つと、破れるぞ……。

(ト　腹鼓)あばよう……。

ト　遠く腹鼓、次第に消えて行く。

研究

一　この作品の主想について考えてみよう。

二　山番の氣持がどのように変化して行っているか、あとづけよう。

三　作者は、たぬきに、どのような性格を與えているか。また、おとぎばなしや傳説に出てくる擬人化されたたぬきには、普通どんな性格が與えられているか。それは、たぬきの形狀や習性と、どのような關係があるか。この作品で、きつねやさるにしないで、たぬきにした理由を考えてみよう。

四　動きの少ない、單調になりやすい、この種の戲曲では、せりふの運び方が重要な役割を持つことになる。この作品のせりふのやりとりで、特に感じのよく出ていると思うところについて話しあおう。

五　このせりふのやりとりは、どこかリズミカルなところ、お芝居らしい言いまわしになっている。それを具体的に指摘してみよう。

六　この作品には季節感を巧みに取り入れているが、それが作品全体に、どのような效果を與えているか。

七　「寒いだんじゃあござんせん。」「ぞっとしねえ。」「おそまつだなあ。」「せがれをいっそ恨んだものよ。」「おはこ」「お株を言う。」その他、特種なことばの使い方を味わおう。

八　この戲曲を、物語の形式に書きなおしてみよう。

（霜夜狸）

〔三〕 羽衣

こっけいな雑伎雜藝から発達した猿樂は、鎌倉時代末期にやゝ樂劇の体裁を備え、室町初期に観阿彌・世阿彌の父子が現われて、曲舞などの長所も取り入れ、すこぶる藝術的なものとなり、將軍家の保護を受けるにいたって、きわめて嚴粛高雅なものとなった。猿樂の能、または單に能と呼ばれるものである。

能は、能と源を同じくし能とともに発達した狂言と、常にあい伴ない、交互に演ぜられる。能における登場人物はふたり、もしくは数人の小人数で、特定の舞台で演ぜられる。そして笛や鼓などを奏するはやし方、登場人物以外に合唱團ともいうべき地謡方があって、それらの総合藝術である点に特色がある。

能の詞章を謡曲という。これには節をつけてうたう部分と、つけないで述べる部分とがある。その題材は前代の文藝に求められることが多く、古歌・故事を引用するなど古典的傾向が強い。文章も美辞麗句を並べ、七五調に連ねるなど、総合藝術としての効果をねらっているために、普通の文章を見る目で律することのできないものである。これまでに作られた謡曲は一千番以上を数えるが、その多くは室町時代の作品で、中世の文学を代表するものと考えられている。今日に傳えられ、実演されているものは二百三十余番である。

こゝに載せた「羽衣」は、世阿彌の作、白鳥処女式説話のうち、代表的な羽衣傳説に取材したものである。われ〳〵は古典劇の台本である謡曲を研究するとともに、能と狂言との関係や、それらが後代の演劇に與えた影響などについても調べてみよう。

なお、こゝでは、能樂としての演技を示すために、説明を加えたが、本文に合わせて、特に歴史的かなづかいを用いた。

登場人物

ワ　キ（漁夫白龍）
ワキツレ（漁夫）二人
シ　テ（天女）

場　面

三保の松原

季　節

春三月

はやし方（笛・小鼓・大鼓・太鼓）・地謡、着座。
作り物（松の立木）に長絹をかけて、舞台正面先に持ち出す。
一セイでワキ、ワキツレふたり登場。つりざをかたげて向かひ合つて立つ。

ワキ
ワキツレ（一セイ）〽風早の、三保の浦わをこぐ舟の、浦人騒ぐ、波路かな。

ワキ（サシ）〽これは三保の松原に、白龍と申す漁夫にて候。

ワキ
ワキツレ〽万里の好山に雲たちまちに起り、一楼の明月に雨はじめて晴れり。げにのどかなる時しもや、春のけしき松原の、波立ち続く朝がすみ、月も残りの天の原、及びなき身のながめにも、心空なるけしきかな。

（下歌）〽忘れめや、山路を分けて清見潟、はるかに三保の松原に、立ち連れいざや通はん、立ち連れいざや通はん。

（上歌）〽風向かふ、雲の浮き波立つと見て、雲の浮き波立つと見て、つりせで人や帰るらん。待てしばし、春ならば吹くものどけき朝風の、松は常磐の声ぞかし。波は音なき朝なぎに、つり人多き小舟かな、つり人多き小舟かな。

ワキツレは地謡前に着座する。

ワキは後見座につりざをを置いて正面先に出る。

ワキ「われ三保の松原にあがり、浦のけしきをながむるところに、虚空に花降り音樂聞え、霊香四方に薫ず。これたゞことと思はぬところに、これなる松に美しき衣かゝれり。寄りて見れば色香たへにして常の衣にあらず。いかさま取りて帰り、古き人にも見せ、家の宝となさばやと存じ候。

松にかゝつてゐる長絹を取り、脇座の方へ二足、三足行きかゝる。と、シテ、幕より出ながら呼びかける。

シテ「なう、その衣はこなたのにて候。何しに召され候ぞ。

ワキ「これは拾ひたる衣にて候ほどに、取りて帰り候よ。

シテ「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべきものにあらず。もとのごとくに置きたまへ。

ワキ「そもこの衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば末世の奇特にとゞめおき、國の宝となすべきなり。衣を返すことあるまじ。

シテ「悲しやな、羽衣なくては飛行の道も絶え、天上に帰らんこともかなふまじ。さりとては返したびたまへ。

ワキ〽この御ことばを聞くよりも、いよ〳〵白龍力を得、「もとよりこの身は心なき、天の羽衣取り隠し、〽かなふまじとて立ちのけば、

シテ〽今はさながら天人も、羽なき鳥のごとくにて、あがらんとすれば衣なし。

ワキ〽地にまた住めば下界なり。

シテ〽とやあらん、かくやあらんと悲しめど、

ワキ〽白龍衣を返さねば、

シテ〽力及ばず、

ワキ〽せんかたも、

地　〽涙の露の玉かづら、かざしの花もしを〳〵と、天人の五衰も、目の前に見えてあさましや。

シテ〽天の原、ふりさけ見れば、かすみ立つ、雲路まどひて、行くへ知らずも。

地(下歌)〽住みなれし空にいつしか行く雲の、うらやましきけしきかな。

(上歌)〽迦陵頻伽のなれ〳〵し、迦陵頻伽のなれ〳〵し、声いまさらにわづかなる。かりがねの帰り行く、天路を聞けばなつかしや。ちどり、かもめの沖つ波、行くか帰るか春風の、空に吹くまでなつかしや、空に吹くまでなつかしや。

ワキ「いかに申し候。御姿を見奉れば、あまりに御いたはしく候ほどに、衣を返し申さうずるにて候。

シテ「あらうれしや、こなたへ賜はり候へ。

ワキ「しばらく。承り及びたる天人の舞樂、たゞ今こゝにて奏したまはば衣を返し申すべし。

シテ「うれしや、さては天上に帰らんことを得たり。この喜びにとてもさらば、人間の御遊のかたみの舞、月宮をめぐらす舞曲あり。たゞ今こゝにて奏しつゝ、世のうき人に傳ふべし。さりながら、衣なくてはかなふまじ。さりとてはまづ返したまへ。

ワキ「いや、この衣を返しなば、舞曲をなさでそのまゝに天にやあがりたまふべき。

シテ「いや疑ひは人間にあり、天に僞りなきものを。

ワキ〽あら恥づかしや、さらばとて、羽衣を返し與ふれば。

ワキ、長絹をシテに渡す。

シテ、後見座にてその長絹を着る。いはゆる物着である。その間、大小、アシラヒを打つ。

シテ、長絹を着けて、シテ柱先に立つ。

シテ〽をとめは衣を着しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、

ワキ〽天の羽衣風に和し、

シテ〽雨に潤ふ花のそで、

キ〽一曲をかなで、

シテ〽舞ふとかや。

地（次第）〽東遊の駿河舞、東遊の駿河舞、この時やはじめなるらん。

地（クリ）〽それひさかたの天といつぱ、二神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空は限りもなければとて、ひさかたの空とは名づけたり。

シテ（サシ）〽しかるに月宮殿のありさま、玉斧の修理とこしなへにして、

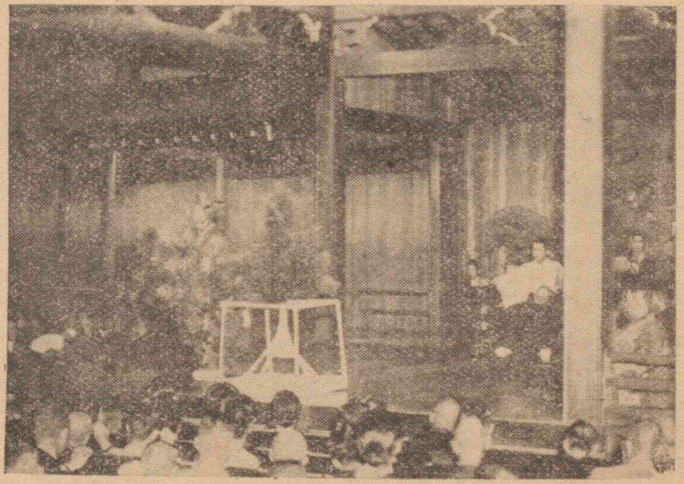
地　〽白衣黒衣の天人の、数を三五にわかつて、一月夜々の天をとめ奉仕を定め役をなす。

シテ〽われも数ある天をとめ、

地　〽月のかつらの身を分けて、かりにあづまの、駿河舞、世に傳へたる、曲とかや。

地（クセ）〽春がすみ、たなびきにけりひさかたの

つらの花や咲く、げに花かづら色めくは春のしるしかや。おもしろや天ならで、こゝもたへなり天つ風、雲の通ひ路吹き閉ぢよ、をとめの姿、しばしとゞまりて、この松原の、春の色を三保が崎、月清見潟富士の雪、いづれや春のあけぼの、たぐひ波も松風ものどかなる浦のありさま。その上天地は、何を隔てん玉がきの、内外の神のみ末にて、



月も曇らぬ日の本や。

シテ〽君が代は天の羽衣まれに來て、

地　〽なづとも盡きぬいはほぞと、聞くもたへなり東歌、声そへて数々の、笙・笛・琴・箜篌孤雲のほかに滿ち〳〵て、落日の紅は蘇命路の山をうつして、綠は波に浮島がはらふあらしに花降りて、げに雪をめぐらす白雲のそでぞたへなる。

シテ〽南無帰命月天子、本地大勢至。

地　〽東遊の舞の曲、

——シテの序の舞。

地　〽東遊の舞の曲、

シテ〽あるひは、天つみ空の綠の衣、

地　〽または春立つかすみの衣、

シテ〽色香もたへなりをとめのもすそ、

地　〽左右左、左右さつさつの、花をかざしの、天の羽そで、なびくも返すも、舞のそで。

——シテの破の舞。

地（キリ）〽東遊の数々に、その名も月の、宮人は、三五夜中の、空にまた、滿願眞如の影となり、御願円滿國土成就、七宝充滿の宝を降らし、國土にこれを、施したまふ。さるほどに、時移つて、天の羽衣、浦風にたなびきたなびく、三保の松原浮島が雲の、あしたか山や富士の高嶺、かすかになりて、天つみ空の、かすみにまぎれて、うせにけり。

次第に舞ひあがる心を示して常座で留め拍子を踏む。

シテ退場。ワキ・ワキツレ退場。作り物が引かれて、地謡・はやし方、退場。

研究

一　シテ・ワキ・地謡・作り物・一セイ・サシ、その他、能樂の専門語について調べよう。謡の趣味を持つ人にきいてもみよう。

二　「風早の……」は万葉集巻七の「風早のみほの浦わをこぐ舟の舟人騒ぐ波立つらしも」を引いたもの。もとの歌では、紀伊の地名であるが、こゝは駿河の三保の浦に轉用している。この曲での引き歌について調べよう。

三　「万里の好山に……」は、陳文恵の詩の句、「千里の好山に雲たちまちにをさまり、一楼の明月に雨はじめて晴れたり。」とあるのによっている。詩句の引用について調べよう。

四　「晴れり」という、動詞と助動詞との接続について考えよう。

五　「春のけしき松原の」は「けしきを待つ」と「松原」の「松」とが言いかけになっている。

六　この曲の中の懸詞(かけことば)について研究しよう。

七　「忘れめや……」の目的語は何か。文の倒置と、その効果について考えよう。

八　「いかさま」「あさまし」のように、現代にも使われはするが、その意味の変わっている語に注意しよう。

九　「衣を返すことあるまじ。」と「天上に帰らんこともかなふまじ。」との「まじ」について考えよう。

十　「この御ことばを聞くよりも、いよ〳〵白龍力を得」という句を、ワキ自身がうたうことについてどう思うか。第三者が説明する場合に使うようなことばを、行爲者自らのことばとして使う言い方について調べよう。能樂以外のものに、このような特殊な言い方をするものがあるか。

十　「住みなれし」の主語は何か。

十一　「返し申さうずるにて候。」と「返し申さん。」または「返し申すべく候。」とどう違うか。

十二　「賜はる」と「たまふ」とには、どんな違いがあるか。

十三　「返しなば」と「返さば」とは意味の上でどう違うか。なぜこゝは「返しなば」でなければならないか。

十四　ことばの部分（「をつけてある。）とうたう部分（〽をつけてある。）との間には、文章の上でどんな差異があるか。どちらに謡曲としての特色があるか。その特色を箇條書きにしよう。

十五　この曲の展開を大きく分けると、どうなるか。

十六　この曲は、数ある謡曲の中でも、傑作とされている。そのすぐれている点を考えてみよう。

七　講　演

民主社会においては、各人の意見が、お互に明らかにされることが一番たいせつである。そのわけは、多くの人がそれ／＼違った意見を持ち、互に交換して意見をまとめて行き、まとまらない時は、多数決によってすぐれた意見とされるものに従うことを原則とするからである。

こうして、われ／＼が多くの人の前で、自分の意見を表明したり、ことがらを説明したりしなければならない場合がしば／＼起って來る。たとえば、学校の自治会などで、何かを提案したり、自分の研究を級友の前で説明したり、討論会に出て自分の信ずることを述べて相手と意見をたゝかわせたりするような時、たゞ自分の意見を述べ、ことがらの説明や傳達をするのを主とする場合もあれば、人の意見に影響を與え、進んで、自分と同じ意見を持つように誘導する説得の場合もある。いずれの場合にも論旨を明確にして、堂々たる態度を持し、声の調子にも細かい心を用いなければならない。聞き手を飽きさせないくふうも必要で、雄弁術や修辞学が重んぜられ研究されて來た歴史に顧みて、その價値を知るべきであろう。

講演技術に上達するためには、人の話をよく聞き、自ら進んで、話す機会を持つようにするのがよい。人の話を聞く場合には、たゞ、話し手の技術にのみ注意したり、ことばの表

面に現われた意味の理解に満足することなく、それを自己の経験や、客観的事実に照らして、正否を判別し、話し手の眞意をつかもうとする態度がなければならない。そういう態度か、自分の講演をよりいっそうたくみに進めて行く能力をつけるのにも役立つであろう。

こゝには、実際の講演の記録二編から抄出した。一つは効果的に講演をするための技術を論じたもの、他は、幸福を論じたもので、特に、議論の進め方の参考となるものである。

〔一〕ことばの調子

内藤　濯

國語の混乱ということが、この数年來しきりに言われておりますが、言語活動、すなわち私どものことばづかいが生活それ／＼の場でいたって重要な役割を演ずることに対する感覚の痲痺、これこそは問題のよってきたるところだと私は言いたいのです。

着ること・食べること・住むこと、いかにも私どもは、この三つのことをしかるべくさばかない限り、一日といえども生きて行けません。しかし、この三つのほかに、もう一つ、私どもの生きて行くのになくてはならぬものがあります。なんであるかと申せば、これが私の今こゝで問題とすることばであります。

衣食住の営みをしないかぎり生きて行けないということは、しごくあたりまえなことです。晝が明かるくて夜が暗いというのと同様、いまさら事新しく申すまでもないことです。しかしながら、私がたゞ今こゝで、私どもはものを言わないかぎり、つまりことばをしかるべく処理しないかぎり生きて行けないではありませんか、と申したら、なるほどその通りだ、うっかりしていたとお思いになるか

たが、みな様のうちにはいらっしゃらないものでもありますまい。

私どもがものを言わないかぎり、生きて行けないことは、衣食住の場合と同じくしごくあたりまえなことです。しかし世の中には、事があまりにあたりまえであるために氣づかずに過ごすことが少なくありません。ですから私どもは、事につけ、おりにふれては、かような平々凡々たる生活事実を顧みる必要があります。ことばのしかるべき切り盛りが衣食住の営み同様の意味合い、あるいはそれ以上の意味合いを生活の面に持っていることに感覚をさとくする必要があります。

あけすけに申しますと、昨今私ども日本人は、言語活動と生活とのつながりに対して恐るべき無感覚に陥っています。他に対してものを言う場合に、着物のほころびを縫いもしないで、お客様の前に出るような不体裁を演じています。食物の味がついていようといまいと、そんなことはいっさいかまわずに、自分も食べ、人にも食べさせるたぐいの乱暴をはたらいています。つまり、自分の使うことばの吟味にもむとんじゃくであれば、もの言うくふうもしないありさまです。これでは、私どもの日本語は乱れほうだいになるほかはありません。くふうあっての文化である以上、もの言うくふうになおざりであることは、ことばからその文化性を奪い去ることになるのでして、文化日本の再建という目下の國民的大業をいたって身近なところではゞむことになります。私どもはこの際、本氣になって、混乱の中にいさゝかでも秩序を導き入れる覚悟を持たなければなりません。

省線のある駅に電車がはいりかけています。駅員がホームにいる人の群れに向かって、「最前車両は回送でありますから、おあとに願います。」とアナウンスしました。その際、ある人がホームの様子を見ていると、角帽姿の大学生何人かだけはホームのうしろの方へ行ったが、一般人で大学生たちにならった人はいくらもなくて、多数は、立っている場所をみじんも動かずにいたそうです。「一番前の車」とくだけて言ってこそ、ことばとしての力が氣持よく活躍するところを、わざ〳〵「最前車両」というような四角四面なことばの城の中におさまって、ことばの機能を弱めるばかりか、あごでものを言ってるらしい封建的な氣構え、これが、今日の生活語に醜いほころびを作っている一つの原因であることは、すでに心ある人々のしば〳〵指摘してきたところです。日本語が、このたぐいの漢字ことばの悪用で、土足にかけられることは、全くくやしさの限りです。が、それはそれとして、私のここで特に言いたいことは、ことばの響きに対する私どもの関心が、ことばの調子に対する場合と同様すこぶる低調であることです。

私は昨今のラジオの講演に、ほとんどいつももの足りなさを感じています。

声の抑揚と顔の表情と身ぶり、これがことばなり話なりを立体的に成り立たすところの要素でありますす。ところでラジオ講演の場合は、この三つのうち二つまでが視界の外に置かれるだけに、興味が薄い。講演者の方でも、聞き手と呼吸を合わせるという、ことばづかいにとってはいたってたいせつなことがそがれてしまうのですから、壁に向かってものを言うのと同様のたよりなさに陥る。のみならず、講演の持つ調子がまた、なんとも割り切れないものを感じさせずにはおきません。妙にかん高で堅苦しくて、聞き手にとかく肩の凝りを感じさせがちです。なぜそんなことになるかと申せば、なるほど一應は声ことばから成り立っているように思われても、実は文字ことばと混線した声ことばであるからです。

講演者はいかにもマイクロフォンを通してものを言っています。声ことばをあやつっています。し

かしそれは形だけのことで、その正体をつきつめれば、声ことばの変形にすぎないのです。

講演者の前のテーブルの上に置かれている草稿、これが声ことばを不純なものにしている張本人です。いたって少数の例外はあるのですが、多数の草稿には、日常の話しことばの敷き写しではなくて、行きあたりばったりに運んで行くところに自然さもおもしろさも感じられる話しことばをそのまゝ書き並べてあるのではなくて、すでに一つの文章としての構造をちゃんと備えた文字ことばが並んでいるわけです。未熟な考えを練りなおすとか、書こうとした文句を消してほかの文句と取り換えるとかいうくふう、反省と選択と配合との加わったことばが行列しているわけですから、そのちゃんとしたものがそのまゝ声となって聞えてくると、聞き手の方では話しことばの自然さを受け取る氣持などはまるきりしない。主格の次には目的格、それから注文通り動詞といったぐあいに、ことばの格があまりにも合いすぎていて、聞き手は肩も張れば息もつまるさわぎです。

先年フランスに行っていました際の私の経験を一つお話しいたしましょう。下宿の食堂、わけても夕食のテーブルではなか〲話がはずむ。私も会話の練習はこゝぞとばかり、持ち合わせのフランス語をありったけそこへ持ち出したものです。そうすると、「あなたのフランス語を聞いていると、肩が張ってしようがない。」と、よく話し相手から言われました。なぜそう言われたかと申せば、私のフランス語がその多くは書物から覚えたもの、つまり文法的にせいとんされた文章そのまゝのフランス語だったからです。たとえば「コーヒー一つ、どうぞ。」と、くだけて言えばよろしいところを、「私にコーヒー一ぱいをもたらすことの親切を持ちたまへかし。」といったぐあいに、文章そのまゝ、思いきりしかつめらしく肩を張ってやるのですから、相手が肩に凝りを覚えなければそれこそ不思議というものでしょう。

口語すなわち声ことばと口語文すなわち文字ことばとの差異は、おゝよそこんなところにあるのです。話の場に應じて自然に私どもの口を突いて出るのが口語であり声ことばであるなら、口語の体裁を取り入れた文章、口語の様式化された結果を文字としたのが口語文であり文字ことばであるといってよろしいのです。ラジオ講演の大部分が声ことばの変形であると申すのは、二つの異なったものをごっちゃに取り扱っているという意味からであります。口語文をそのまゝ口語とする不用意が、生活語特有な調子の自然さをくずしてしまうのです。

坂田藤十郎といえば、元祿年代の名優です。ある時ある役者が藤十郎に向かって「われ〲分際は初日の舞台に出ると、せりふがよく身についていないために、どうも氣持が落ち着かない。ところであなたは、実に手なれた藝をお見せになる。一体どんな心がけがあってのことか。」と尋ねます。藤十郎はそれに答えて、「自分も初日はとかくあわてる。それでいて、いかにも手なれた藝をしているように見えるのは、けいこの時よくせりふを覚え、初日にはそれを忘れてしまって舞台に出る。そして相手役者の言うせりふを聞きながら、それにつれてこちらのせりふを思い出して言うことにしているからだ。なぜそうするかというに、常々人と打ち合わせしたり議論したりする場合には、自分の使うことばにくふうというほどのくふうはせぬ。相手のことばに應じてこちらのことばが自然に出る。芝居といっても平常こそその手本だと考えるから、けいこの時よく覚えたせりふを、初日になって忘れたまゝ舞台に立つのだ。」と言ったということです。

実に藝道祕話中の祕話というべきで、私どもはこの祕話から、くふうにくふうを重ねて、しかもく

ふうのあとを残さない、練り上げられた精神のひらめきを感ずるのですが、私のこゝで言いたいことは、かれ藤十郎がけいこでじっくりと覚えたせりふを初日の舞台で忘れる一方、相手の言うせりふにつれて自分のせりふを思い出すことにしたところに、せりふという書かれたことばを思いきり、純粋な声ことばに轉じようと努めた心構え、せりふ帳の中に封じられていたことばを、せりふの自然なやりとりという紛れもない言語生活のまったゞ中に解放しようとした心構えをくみとるべきではないかということです。ラジオの講演者が、あらかじめ講演の草稿を作るのは決して惡いことではない。しかしかりそめにもマイクロフォンの前に立つ以上は、文字ことばと声ことばとの違いをとらえて、ことばの骨ともいうべき調子を適当に切り盛りする感覚ぐらいは持っていてもらいたいものです。考えようでは、ことばの調子こそ、ことばの響き以上にことばを生かす要素だと言えるかもしれません。

世間にはかん高にしかものの言えない人があります。ちょっとの間のことならがまんができるが、講演の場合のように、それが三十分となり一時間となると、聞き手の方ではつい神経がいらだってくる。話し手の方でも、声を振りしぼる結果、自分のからだにつらく当たることになるので、ものを言うことにすぐ疲れを感ずるのが必定です。したがって、話をし話を聞くことの樂しさなどは、どこかへ逃げていってしまう。それでは話が話になりません。話の調子、ことばの調子がはずれてしまっているからです。

それとは反対に、話じょうずな人の話となると、申すまでもなく、いつまで話が続いても飽きることがない。話し手と話されていることがらと聞き手と、およそ三つの呼吸が一つになって、忘我の境というのでしょうか、なんともことばにあまる樂しさが感じられる。ところで、何がそうした樂しさを生むかと申せば、私はことばの調子こそあずかって力があると言いたい。話されることがらそれ自体がおもしろいから樂しいと言えるには言えるのですが、どんなにおもしろいことがらでも、そのことがらにふさわしいことば、更にそのことばを生かす調子、ちゃんと整った調べに事欠いていたら、節づけされない詩や歌が歌曲でないのと同様、ことばが話としての組み立てを持たなくなるのが当然でしょう。

こゝで、何をさしてことばの調子というかが問題となります。ことばの調子のよしあしを品定めするためには、まずことばの調子そのもののなかみを吟味してかゝらねばなりません。

歌曲という歌曲の節まわしが、高さと強さと速さと休止とで成り立っていることは、あらためて言うまでもないことです。ところであの節まわし、私どもを樂しませるあの節まわしのもとがどこにあるか、言い換えれば、作曲の基準となるものがどこにあるかといえば、それは私どもの日常のことばづかいの中に自然織りこまれているのでして、無から有が生まれるわけではありません。

私どもは「樂しいなあ。」と言う時、樂しさの度合が多少の変化を生むにしても、だいたいにおいて高くて強い調子にことばをのせる。「あゝ悲しい。」という場合には、反対に低くて弱い調子を選ぶことになる。それだのに、もしまかりまちがって、この二つの調子を入れ換えましたら、それこそ樂しさも悲しさもまるきり現われなくなるでしょう。また、私どもはだれかに「何々さんはもう幾つにおなりでしょう。」ときかれる時、何々さんの年齢がはっきりしない場合だと、まず、「さあ……。」と言って、多少の間を置いたあと、「そうですね、四十近くにもおなりでしょうか。」といったぐあいに、全体の調子がゆるやかに流れて行くのですが、「そうですね、」から「四十近くにもおなりでしょうか。」

へことばが進むにつれて、いくぶん速さが加わるのみならず、「さあ」と「そうですね」との間に、一息ほどの休止を置く点などはなか〳〵藝が細かいのです。

こんなぐあいに、ことばづかいの中に自然流れて行く調子を高さと強さと速さと休止との四つの方面から吟味して行きますと、私どもは四つの要素がまるで唐草模様のように美しくからみあっているのに氣づく。それは実に自然な、小細工の臭みなどの全くない音樂であって、坂田藤十郎のごときは、舞台の上でこの自然な音樂に細かく耳を澄ましたに違いありません。

私どもはこの音樂の美しさ細かさを感ずれば感ずるほど、ことばの調子をたいせつにする氣にならざるをえませんが、かようなことばの味を味わいぬいて、ことばをほんとうに生きたものにするためには、生活の動力とするためには、常に自分の耳の監視を怠ってはならないと考えます。

一つの詩でも、作曲者次第で違った旋律を生むことは、世間によくあることです。それと同じく、こういうことがらにはこういう調子といったぐあいに、ことばの調子に型などのあるものではないと私は考えます。甲の人が高くて強い調子を持たせたことがらが、乙の人の場合は、反対に低い、ものやわらかな調子となって、それがかえってことばとしての力を持つことがあるものです。

フランスの國立音樂学校あたりで、ある一つの歌曲を歌わせる場合に、まず歌詞の朗読をじっくりとやらせるならわしがあります。今日の日本では、歌のことばが歌の旋律にのまれてしまっているたぐいの歌い方が相当のさばっていて、心ある者のまゆをひそめさせていますが、これは朗読――正しくはもの言う技術――という言語訓練のいたってたいせつな段階がなおざりにされている結果、声樂の基礎がはなはだしくぐらついているからだと私は考えます。

詩文の美しさを目で受け取らずに声で受け取ること、これが朗読の構えだということにまちがいはありませんが、もっと正確にいえば、言語音樂としての声樂を手落ちのないものにするための基礎訓練であるのと同時に、ことばそれ自体の中におのずから流れている音樂、すなわちことばの持つ響きと調子とに耳をさとくする訓練方法こそ、いうところの朗読です。私のかつて見たフランスのパリには、「もの言う技術指南所」という看板が、方々の門口にかゝっていました。それは以上の意味の朗読技術を練る場所であって、結婚前の婦人で心ある人は、新家庭をつくるための修業の一つとしてそこへ通うということでした。日本での生け花や茶道などと同じに心得られているわけです。私は私どものこの日本でも、こういった言語訓練の場所ができて、そこでは正しい美しいことばの調子をつかむために、歌も歌う、朗読もやるというふうにいたしたい。何事も、議論よりは実行です。

（美しさに沿うて）

研究

一 「國語の混乱」とは、どのような事実をいうのか。具体的に実例をあげて考えてみよう。

二 もし、現在の國語が混乱しているとすれば、それは何に原因があるのだろうか。実例に即して考えてみよう。筆者は、何がその根本的な原因だと言っているか。

三 「ことばをしかるべく処理しない限り生きて行けない。」というのは、どのような事実をいうのか。実例をあげて考えてみよう。

四 筆者は、どのような点で、ラジオの講演にもの足りなさを感じているのか。

五 筆者がフランスに行つていた際の経驗についてどう感じるか。

六 こゝに掲げた坂田藤十郎の祕話について、感

想を話しあおう。

七　話じょうずな人の話を聞いていると、なぜ楽しさが感じられるのか。このような経験を味わったことがあるか。

八　筆者がいう「ことばの響き」「ことばの調子」とは、どういうことか。

九　「ことばの調子」は、なぜたいせつなのか。

十　「詩文の美しさを目で受け取らずに声で受け取ること、これが朗読の構えだ。」ということばの意味について考えよう。

十一　筆者のいう「朗読」の意味を考えてみよう。

十二　次のことばの意味を考えてみよう。定義のできるものは定義の形で言い表わしてみよう。
(1)言語活動　(2)声ことばと文字ことば　(3)文字ことばと混線した声ことば、声ことばの変形。(4)口語と口語文。(5)くだけて言う。(6)ことばの格。(7)ことばの文化性。

十三　「一　談話生活の問題」と読み比べて、その考え方・説き方を比較してみよう。

〔二〕幸福

木村健康

幸福の追求はおそらく人類に備わる最も古い、そうして最も根強い欲求の一つであったと思われます。幸福主義といわれる思想が倫理学の歴史に現われた最も古い学説であったことは、決して偶然ではありません。幸福主義というのは、幸福の獲得を善と考える思想ですが、これにも何を幸福と考えるかによっていろ〳〵の種類が分かれてきます。幸福というのは、最も一般的には満足の感情だということができると思います。しかし満足といってもいろ〳〵です。物質的な満足もあれば、精神的な満足もあるというわけです。これらの中で最も普遍的に、そうして切実に感ぜられるのは物質的満足でしょう。衣食住の欲求の満足は人間の生活を可能ならしめる自然的基礎であり、衣食住の生活における欠乏が私どもを最も苦しめるものであることはだれでもよく知っています。それでは物質的欲求の満足が幸福でしょうか。非常に多くの人がそのように考えて、物質的欲求を満足するための富を求めて日夜努力し苦しんでいます。このような欲求が通俗的意味における経済生活の要因ですが、経済生活は実に人間生活の大部分を占めているかのように見えます。これほどたいせつな経済生活において豊かであることはもちろん望ましいに相違ありません。そうだとすれば、物質的欲求の満足のための富を豊かに持っていることが幸福にほかならないと思われます。

しかし、はたしてそうでしょうか。もし富を持つことが幸福ならば、富さえ所有すれば、人間は完全に満ち足りてなんら不安や不満を感じないはずです。なぜなら、幸福とは満足なのですから。しかし富の所有がいっさいの不安や苦しみをなくするものでないことは、だれもがよく知っていることです。富を所有することは幸福のように見えても、その幸福はまことにはかない幸福だと言わねばなりません。なぜなら富は、私どもがこの目で見、この耳で聞いているように、まことに移ろいやすいものだからです。自分の幸福のいっさいをたゞ富の所有にのみかけている人の心は、決して安らかではなかろうと想像されます。なぜなら、そういう人たちは、富を失うまいとして、また富をふやそうとして必死にならねばなりませんし、場合によっては、友を裏切ったり、人に無慈悲であったり、もっと恥ずべきことをあえてしなければならないでしょうから。しかもどんなに必死になっても、自分ひとりの力で自分の富を完全に確保することは、不可能な場合が多いのです。富の獲得は個人の力を越える面を持っているように思われます。それで富の所有のみに自分の幸福を見いだそうとする人たち

は、かえってその意図に反して、常に苦しみ悩まねばならないかもしれません。そうだとすれば、富の所有は幸福ではなくて、かえって不幸だと考うべきであるかもしれないのです。

ギリシア・ローマ時代に有名なストアの賢人たちは、まさにそのように考えたのです。この賢人たちにとって幸福とは、動揺のない平静な心を意味しました。不安や不満や苦悩や焦躁から心が解放されて、心が常に安らかであることは確かに幸福であるに相違ありません。ところが人間の心にこのような安らかさが恵まれることは、きわめてまれにしかないのです。なぜ人間の心はいつもこのように苦しみ悩み悲しんで動揺するのでしょうか。ストアの賢人たちは、諸人の欲する富だの名声だの地位だのこそが心の動揺の原因にほかならないと考えました。富だの名声だの地位だのは、人間の心がせつに求めてやまないものですが、それらは内なる心の外にあるために、心のまゝにはならないものなのです。しかも内なる心がこれを欲して思いのまゝにこれを得ることができない限り、心は苦しみ悩まざるをえません。それゆえ外なる富や名声こそが、内なる心の不安と動揺との原因をなしているということになります。それでは幸福を得るにはどうすればよいでしょうか。外なる富や名声や地位が内なる心を動揺せしめないようにすればいいわけです。言い換えれば、外なる富や名声と内なる心とをつなぐきずなを絶ち切ればよいのです。ストアの賢人たちはこのきずなを人間の欲求と考えました。人間が富や権勢を欲求するがゆえに、そうしてこの富や権勢が思いのまゝにならぬ外なるものであるがゆえに、人間の心は苦しみ悩むのだというのです。それで外と内とをつなぐきずなを絶ち切るというのは、人間の備えている欲求を否定し絶滅するということになります。心の安らかさ、すなわち幸福は、私どもの欲求をできるだけ抑制することによって得られるというのがストアの教えの要点です。ストイックという形容詞が禁欲的の意味に使われるのは、このような関係からです。

人間の欲求がともすれば極端に流れがちなことを考えると、ストアの賢人たちの教えには確かに深い知恵が含まれています。しかし、だからといって、欲求の絶滅こそが幸福への唯一の道だと言いきれるでしょうか。過度に流れた欲求は確かに人間の不道徳と堕落と不幸との原因ですが、いっさいの欲求を否定してしまうことなどはとうていできそうにありません。いっさいの欲求を絶滅してしまえば、人間の生活も全面的に否定されるからです。そうしてもし生活が否定されるならば、「幸福とは何か。」というようなことを考える意味も必要もなくなってしまうでしょう。人間の物質的欲求の満足は、たとえそれ自体が幸福ではないにしても、幸福に重大な関係があります。物質的欲求が満足されないために、どんなに多くの不道徳がなされ、罪が犯されることでしょう。貧のために盗みを働いたり、肉親が争ったり、友だちどうしが反目したり、その他もっとあさましいことが世の中にはみなさんの想像される以上にたくさん行われているのです。もとより渇して盗泉の水を飲まないことや、乏しきを分かちあうことが、正しくないというのではありません。それどころか、それはこの上もなくけだかいことです。そうして実際そのようなけだかい行いをしている尊敬すべき人たちが世の中にないわけではありません。しかし、そのようなけだかい行為が、だれにでも容易にできるものだと考える人は、おそらく貧しいことの苦しみをほんとうに経験したことのない人です。渇して盗泉の水を飲まぬということは何人もしなければならぬことですが、弱い人間には決してなまやさしいことではありません。それでも渇している者が自分ひとりだけの時はまだ比較的容易ですが、自分といっしょに自分の愛し親しんでいる人たちが渇している場合には、私どもの心は言語に絶した苦しみに打ち砕か

れざるをえないのです。渇しても盗泉の水を飲まないためには、この言語に絶した苦しみにうちかたなければならないのです。確かに渇しても盗泉の水を飲むべきではありませんが、できるならば渇しないにこしたことはありません。しかし、渇したり飢えたりしないためには、富が必要ではないでしょうか。それならば富を持つことはやはり幸福ではないでしょうか。しかしさきほど考えたところでは、富の所有は、それのみではまだ幸福ではないということになったではありませんか。一体どうなのでしょう。

さきほど考えたところでは、富とは物質的欲求を満足するものでした。そうして物質的欲求の満足ということを、私どもは知らず知らずの間に個人個人の立場から考えていたのではないでしょうか。ところがよく考えてみると、富はたゞ個人個人の立場からだけ考えていいものではないようにも思われます。というのは、私どもの使うどの品物をとっても、何一つとして、世の中の無数の人々の働きなしに得られるものはないからです。こういうように考えて行くと、私どもが富を獲得するという場合、私ひとりが富を得て、他の人が貧しいまゝでいるという状態は、ほんとうに安定した富の所有の状態ではないように思われます。富がほんとうに世の中のすべての人々の協力によって社会的につくり出されるものである以上、社会そのものが矛盾や不合理や不正義を含んでいて不安定であることは、富そのものを不安定たらしめるからです。

私どもは今まで経済生活だの物質的欲求だのを不当に軽んずるように習慣づけられてきました。ところが、口では精神主義を唱えて物質などには少しも煩わされていないような顔をしている人でも、実際にはこの問題にひどく煩わされ、この問題のためには大なり小なり不道徳や罪を犯してきました

し、そのために表に標榜しているえらそうな精神主義が台なしになってしまったのです。物質的欲求や経済生活を不当にないがしろにすることは、決して健全な考え方ではありません。こういう切実な生活問題を空虚な精神主義でごまかして行こうとするのはとんでもないまちがいです。私どもはこのような問題と眞劍にとり組まねばなりません。私どもは少なくとも人間としての生活を維持するに足るだけの富を獲得するために、まじめに努力しなければならないのです。しかもこの場合、私ひとりだけが豊かになればいいというのではなく、すべての人が富を得なければならないのです。すべての人が生活の苦しみから解放されるのでなければ、私ひとりの富もほんとうの意味で確保された富ではないからです。さてこのようなことを実現するためには、確かに社会の改革が必要です。みなさんはその日その日の生活の戰いに眞劍であるとともに、社会の改革に対してみなさんの立場からなしうることをいっしょうけんめいになさなければならないと思います。この努力を通じてでなければ、幸福は決してみなさんのものにはなりません。

それでは世の中の人がひとり残らず富を得れば、それでみんなが幸福になるのでしょうか。今の世の中における不道徳や犯罪やその他の悩み、苦しみのかなり大きい部分が貧乏から起っていることはだれにもわかることであり、したがってすべての人がその日の生活に困らなくなれば、人間の苦しみや惡の相当の部分がなくなるであろうとは容易に想像されます。しかし、だからといって、みんなが豊かになりさえすれば、人間が幸福になると考えるのは、甘い考えだと思います。みなさんが知っていられるように、毎日の生活には何不自由ない人でも、みんながみんないい人だというわけにはいきません。そういう人の中にも、意地惡をしたり人を欺いたり、そのほかもっと惡いことをする人

が絶えないのです。豊かな家庭でも親子が反目したり兄弟が深刻に爭ったり、夫婦がかたきどうしよりもも〻と憎みあったりする例がよくあります。これを見ると、人間には生まれつき何かどうにもならない惡いところがあるのではないかと疑われてきます。宗教家は、この人間に根本的に備わる惡を「罪」といっているようですが、この罪がある限り、人間は決して安らかな心を持たず、幸福にもならないと思います。人間の罪のうちで一番深いのは我意ではないでしょうか。人のことを少しも考えずに、自分の意志だけを通したいというわがまゝや、自分だけを美しくえらく見せたいという虛栄心などがそれです。わがまゝや虛栄心のために、人間はどんなに他人を傷つけたり欺いたりすることでしょう。そしてそのことが人を苦しめるだけでなく、自分自身をも悩ましめることでしょう。この罪からなんとかしてのがれるのでなければ、私どもは決して幸福にはなれないと思われます。しかしこの罪は人間に本質上備わるもののように思われるので、私どもがこれからのがれることはほとんど望みがたいように思われます。それでは、私どもはどうしても安らかな心に達することはできないのでしょうか。

確かに人間が幸福を得ることは形容のできないほど困難なことです。私どもははたして幸福を得られるかどうかをにわかに決めることができません。しかし、だからといって、幸福はとうてい望みえないと、簡單にあきらめることもできそうにもありません。それで勇氣を出して、もう少しこの問題を考えてみましょう。西洋の本を読んでみると、よく「義務」ということばが出てくるのに氣がつきます。有名な哲学者カントの教えによると、道德的に正しい行爲は、自己の義務心からなされた行爲だということになります。私どもが、これは自分のしなければならぬことだと思うことを実行するの

が善だというのです。義務というのは一体何でしょうか。

私どもは自分がしなければならぬと思うことをいろ〳〵たくさん持っています。そうして大部分の場合、義務は私どものわがまゝをおさえなければできないように思われます。しかももし自分がわがまゝをおさえて義務を盡くしえた時には、わがまゝを通した時とは違った、たとえようもないすがすがしい滿足を感じないでしょうか。わがまゝを通した時は、自分の我意が通ったのですから滿足には違いないでしょうけれども、そこには何かいやな感じが残って、自分で自分がいやになります。ところが義務を盡くした時は、それとは全く違った感じです。それが幸福ではないでしょうか。義務を盡くすことに幸福があるのではないでしょうか。確かにそのように思われます。しかし、義務を盡くすというようなことは、そうやさしくできることではありません。私どもは義務を盡くさなければいけないと思いながら、どんなに大部分の場合わがまゝをしていることでしょう。義務を盡くすことは確かに喜びですが、しかし同時に私どもにとっては苦しいことです。義務を盡くすためにはわがまゝをおさえなければならないからです。わがまゝの心は、私ども人間にまことに根深い強いものなので、これをおさえるためには非常にほねおらなければなりません。義務に苦しみが伴なうのはおそらくはそのためでしょう。

もし義務に伴なう苦しみを苦しみとしないで、いつも義務を盡くしたことの喜びだけを感ずるようになると、その時こそ私どもは幸福になるのではないかと思われます。しかし、そのようなことがはたしてできるでしょうか。それは非常にむずかしいことです。しかし、苦しみを苦しみと思わないというようなことが私どもの生活に全くないとはいえないと思います。たとえば登山をする人は、頂上

に着くまでの途中ではほねおり苦しみながら、しかもそれを苦しみとは思わないのではないでしょうか。もしそうだとすれば、義務に伴なう苦しみを苦しみとしないで、義務を盡くす喜びのみを感ずることも、決して不可能ではないと思われます。義務を盡くすことに感ずる喜び、それが幸福だとすれば、幸福は私どもにとって全く不可能だとはいえないような氣がします。

しかし、自己の義務に満足するということは、不可能ではないにしても、やっぱり非常にむずかしいことです。ことに義務を盡くさねばならぬという意識がはっきりしてくると、それに伴なって、私どもの悩みもまた多く深くなって行きます。義務を盡くさねばならないのに、私はなんとそれを盡くさぬことが多いのだろうというように考えて、前よりはいっそう自分が自分でいやになることもあるでしょう。また私が義務にかなった正しいことと思ってしたことが、私の意図に反してかえって人を傷つけることになったような場合、私はほんとうに苦しむでしょう。また私が義務の心からした正しい行いを、人がほんとうにわかってくれないために、さびしく思うこともあるでしょう。こういう苦しみや悩みは、決して小さいものではありません。そうしてそういう苦悩を苦悩として感じなくなるためには、自分ひとりの力では足りないように思われます。友だちどうしがお互に励ましあい力づけあうのでなければ、とうてい義務を盡くすことの幸福だけを享受する境地までは行かないと思います。しかし、友だちどうしの励ましだけでも、おそらくは悩みはなくならないでしょう。自分のなすべき義務をなすだけに満足して、それ以外には何も求めないというところまで、弱い人間が達しうるのは、おそらく宗教の力によるよりほかはなかろうかと思われます。だから宗教的幸福が一番清らかな永続的な幸福なのではないでしょうか。

幸福の獲得は非常にむずかしいけれども、私どもに不可能ではないということは、はっきりいえるのではないかと思います。そしてこの場合たいせつなのは、幸福は自分ひとりだけのものであってはならず、すべての人が幸福にならねば眞の幸福ではないということであり、また幸福はすべての人が友として協力しなければ得られないということです。このことは物質的富の獲得にでも精神的幸福の獲得にでもあてはまります。しかし、幸福が得られたとしたら、なんとすばらしい人生が開けてくることでしょうか。その時には、人はお互に憎しみや疑いで争うことがなく、我意をしりぞけ、義務を盡くすことによって人々はお互に愛しあうことになるでしょう。みなさんはたとえ及ばなくとも、ほんとうの幸福を実現するために、眞劍に努力したいと切にお思いにならないでしょうか。

昔の人は、「未來は喜びと悲しみとをもって待つ。」と言いました。みなさんの前途にも喜びとともに悲しみが待っているでしょう。悲しみや苦しみが人間の生活から全くなくなってしまうとは思われません。人間の幸福とは悲しみや苦しみがなくなることでは、おそらくないと思います。悲しみや苦しみのうちにも、安らかな清い心を失わないでいられること、それがほんとうの幸福なのではないでしょうか。

（若き人々とともに）

研究

一　この講演のすじみちを明らかにするために、要旨を表解してみよう。

二　「幸福」ということについて、われ〳〵が従來いだいていた考えを整理してみよう。

三　われ〳〵は、どんな場合に幸福と感じ、どんな場合に不幸と感じるか、話しあってみよう。

四　同じような境遇にあっても、人によって幸福と感じたり、不幸と感じたりすることはないか。そのような場合を考えてみよう。

五　この講演の論旨を、われ／＼の経験や、その経験にもとづく考え方と対比して、よく味わってみよう。

六　次にあげる文の中で、この講演者の考え方と一致するものに印をつけよ。

(1)　人が幸福になるためには、すべての人が富を所有しなければならない。

(2)　われ／＼の不安動揺の根元である物質的欲求を否定することが、幸福への道である。

(3)　社会の矛盾や不合理をとりのぞかなければ、われ／＼の富の安定は得られない。

(4)　社会の矛盾や不合理をとりのぞくことによって、われ／＼は幸福になれる。

(5)　幸福を求めるためのストアの賢人たちの主張は全然まちがっている。

(6)　われ／＼が、幸福を論ずる場合、われ／＼の物質的欲求は当然重視しなければならない。

(7)　我意をおさえて、常に義務の遂行に喜びを感ずることのできる人は、絶対にないわけではない。

(8)　宗教の力によって、弱い人間も、清く、安らかな幸福を得ることができる。

(9)　われ／＼がほんとうに幸福である場合には、悲しみも、苦しみも、全くないはずである。

(10)　幸福などというものは、求めても結局得られないものである。

七　学校におけるわれ／＼の生活をいっそう、幸福なものにするために、われ／＼の努力しなければならない点を、校友会の組織や、友情の問題に結びつけて論じてみよう。またそれを講演の形にして、みんなの前で発表してみよう。

われわれの國語

二

Approved by Ministry of Education
(Date Oct. 13, 1950)

昭和二十四年六月二十七日発行
昭和二十五年十月十三日再版印刷
昭和二十五年十月十七日再版発行

定價　金四十二円五十銭

著作者　私たちの國語研究会
代表者　佐藤正憲

発行者　東京都中央区銀座七ノ四
株式会社　秀英出版
代表者　有光次郎

印刷者　東京都新宿区市谷加賀町一ノ三
佐久間長吉郎

印刷所　東京都新宿区市谷加賀町一ノ三
大日本印刷株式会社

発行所　株式会社　秀英出版
東京都中央区銀座七ノ四
電話銀座(57)六八二五番

意匠登録出願中

(高國 1102・168ページ)

広島大学図書
0130449681

株式会社秀英出版

文庫
449
681